

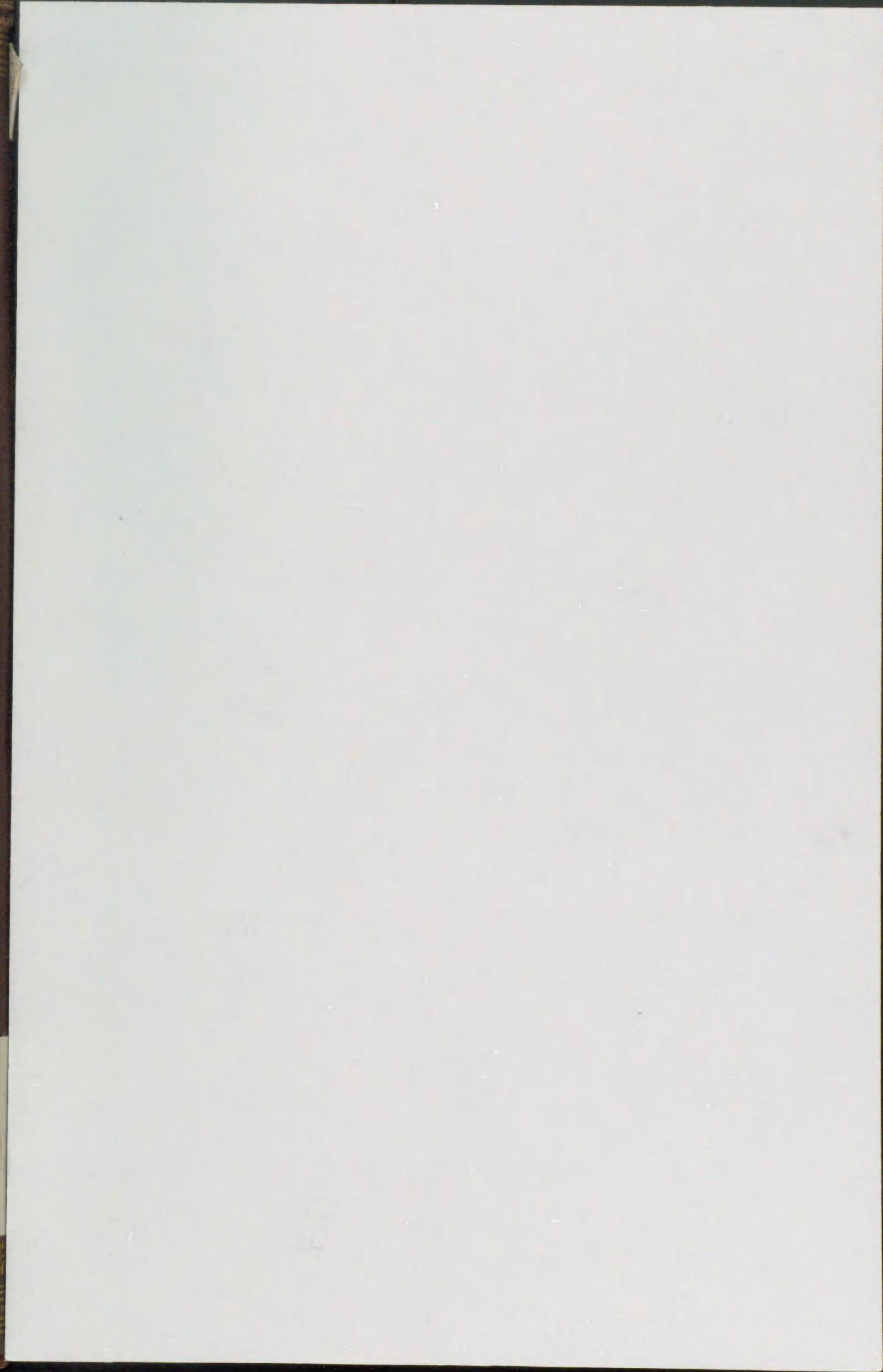
603-113-(12)



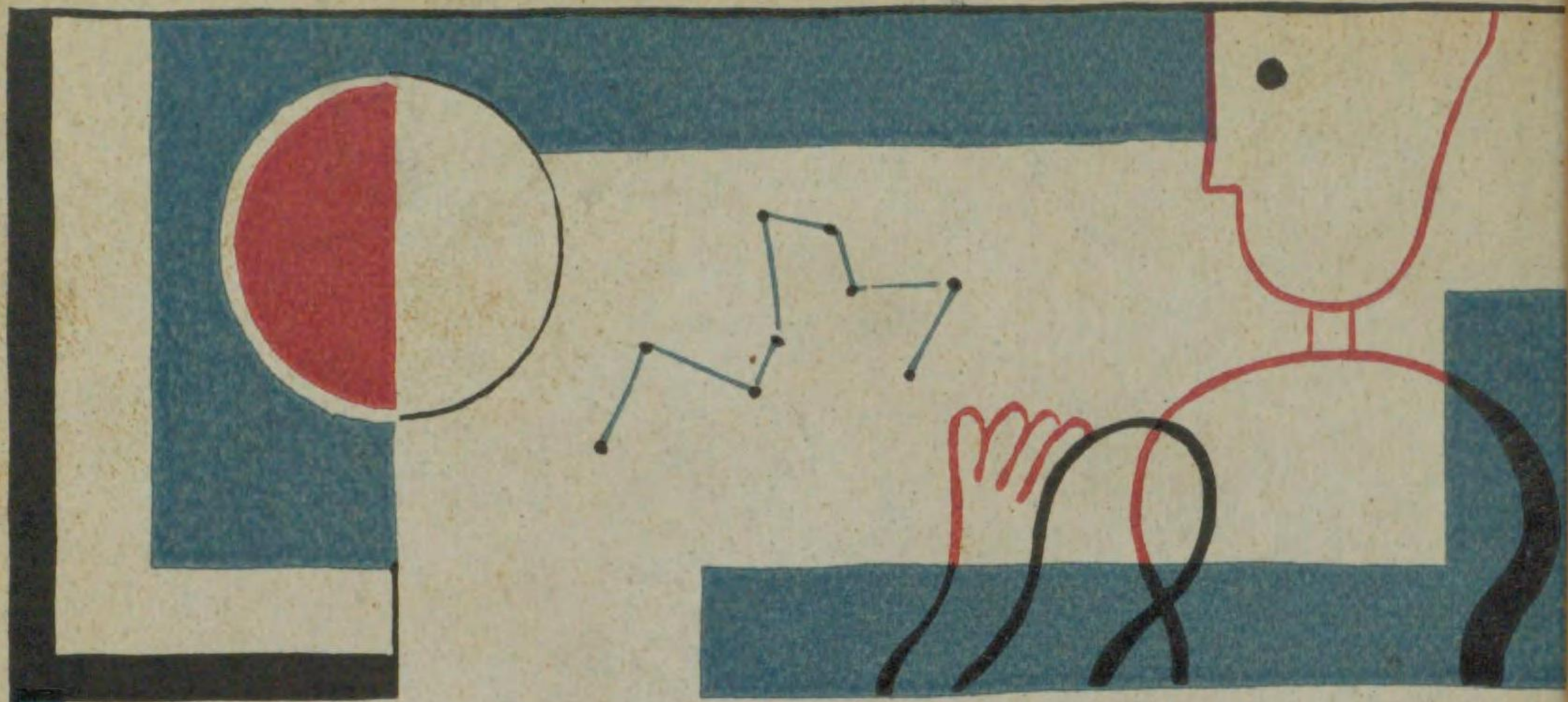
1200501530903

603

113



5.7.2



新興藝術派叢書

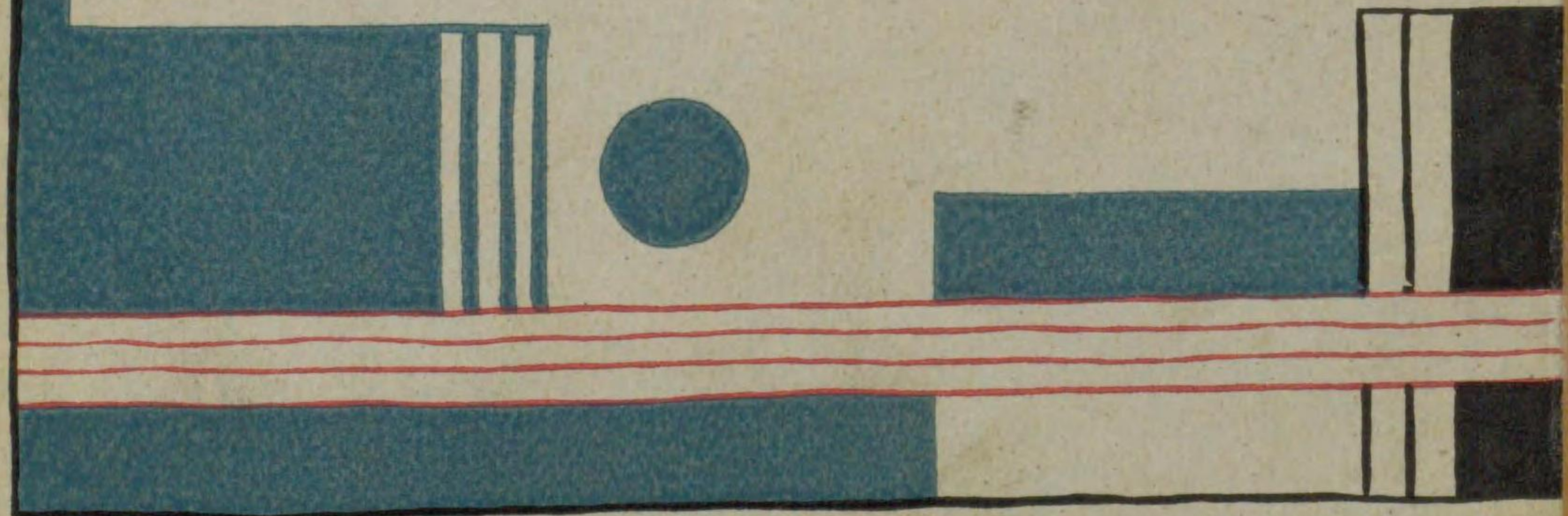
悲劇を探す男

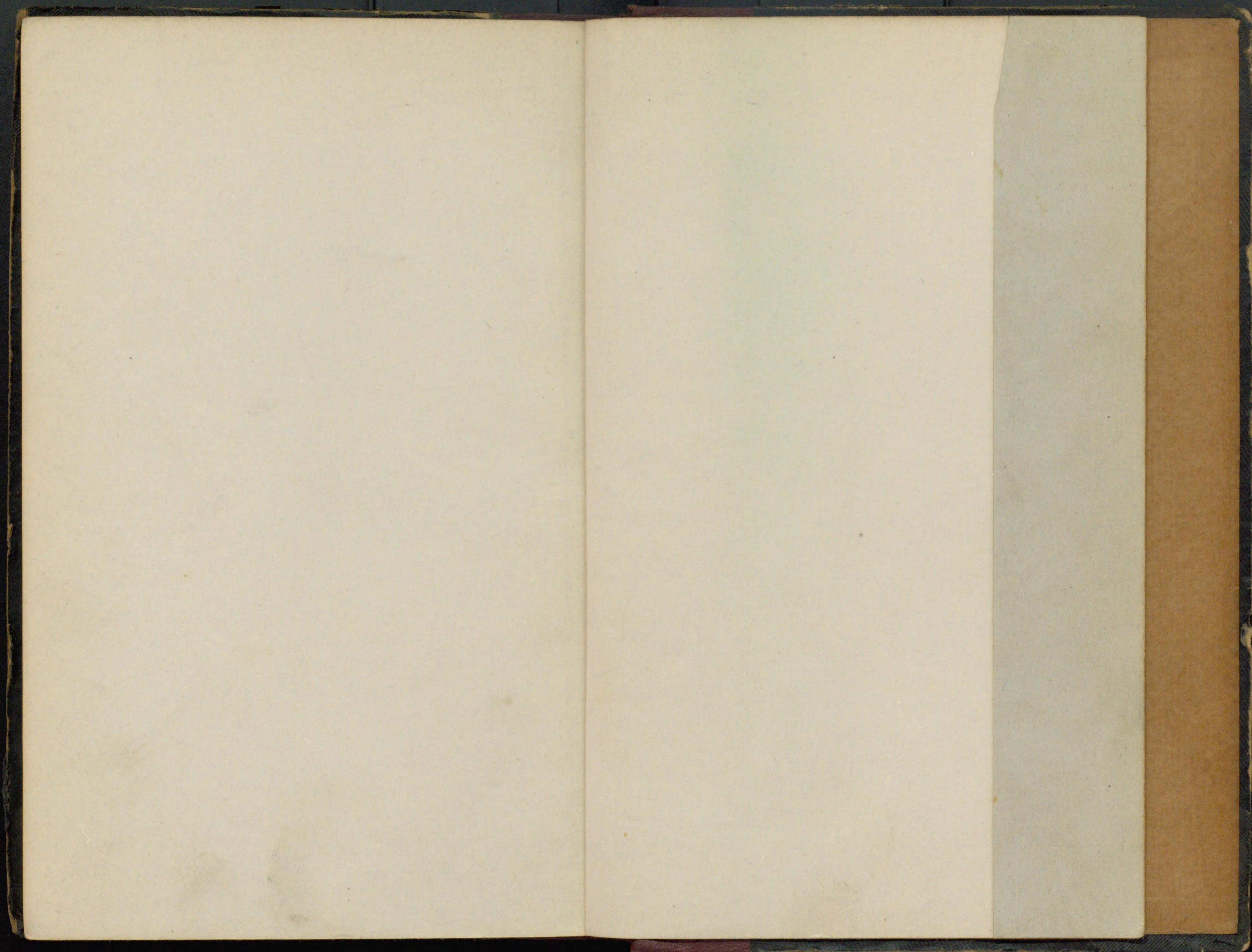
尾崎士郎 著

170

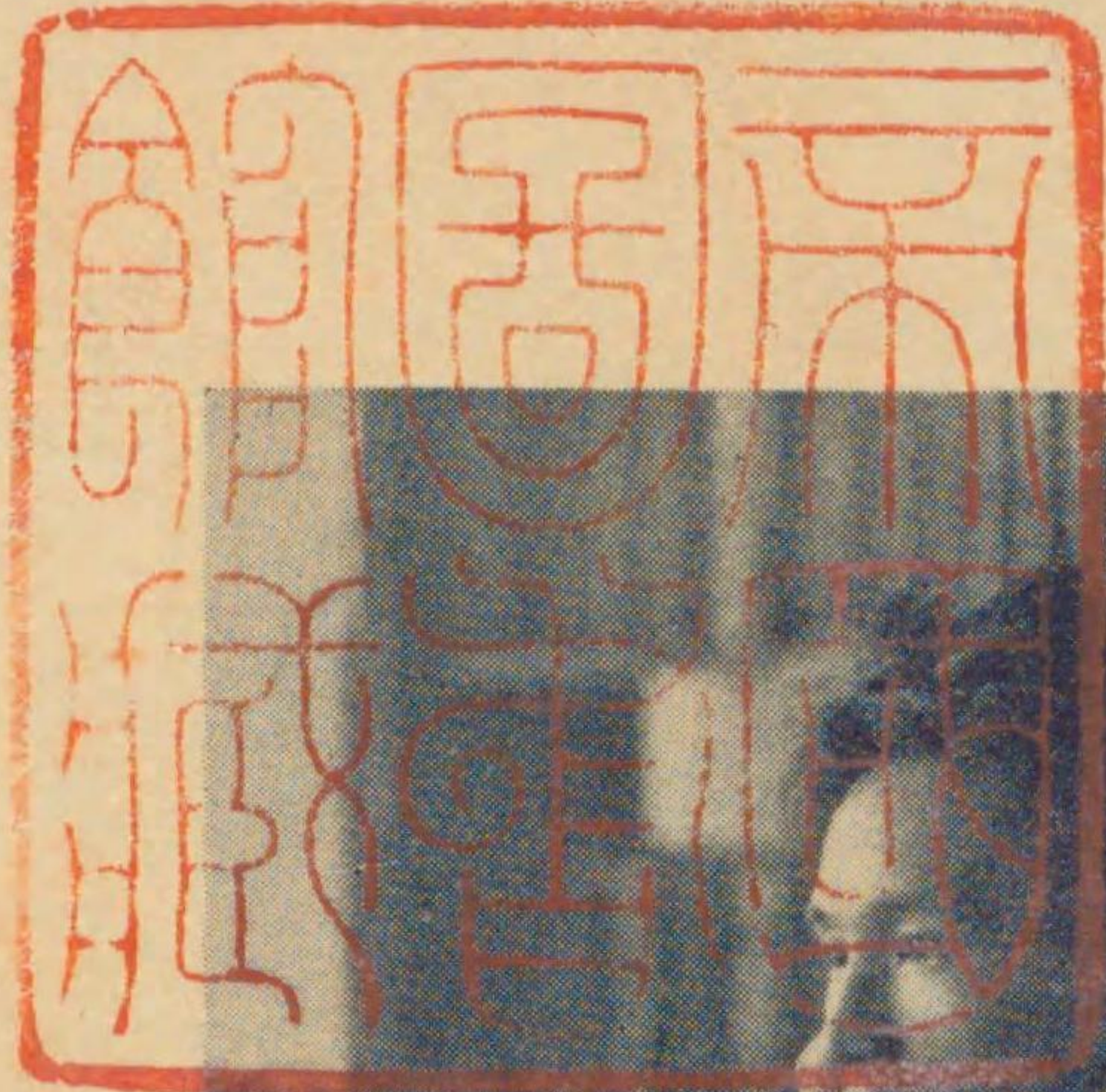


新潮出版社





悲劇を探す男



尾崎士郎著

新興藝術派叢書 第十三編
新潮社出版



603-113

目次

| | |
|---------|-----|
| 悲劇を探す男 | 三 |
| ある港にて | 四 |
| ピストル | 五 |
| 犬と幻想 | 六 |
| 野良犬フリッツ | 六 |
| 運命について | 八 |
| 酒場にて | 九 |
| 當世文人氣質 | 一〇 |
| 「苦命」たち | 一四 |
| 消えてゆく街 | 一四〇 |

東京堂出版

三洲士魂

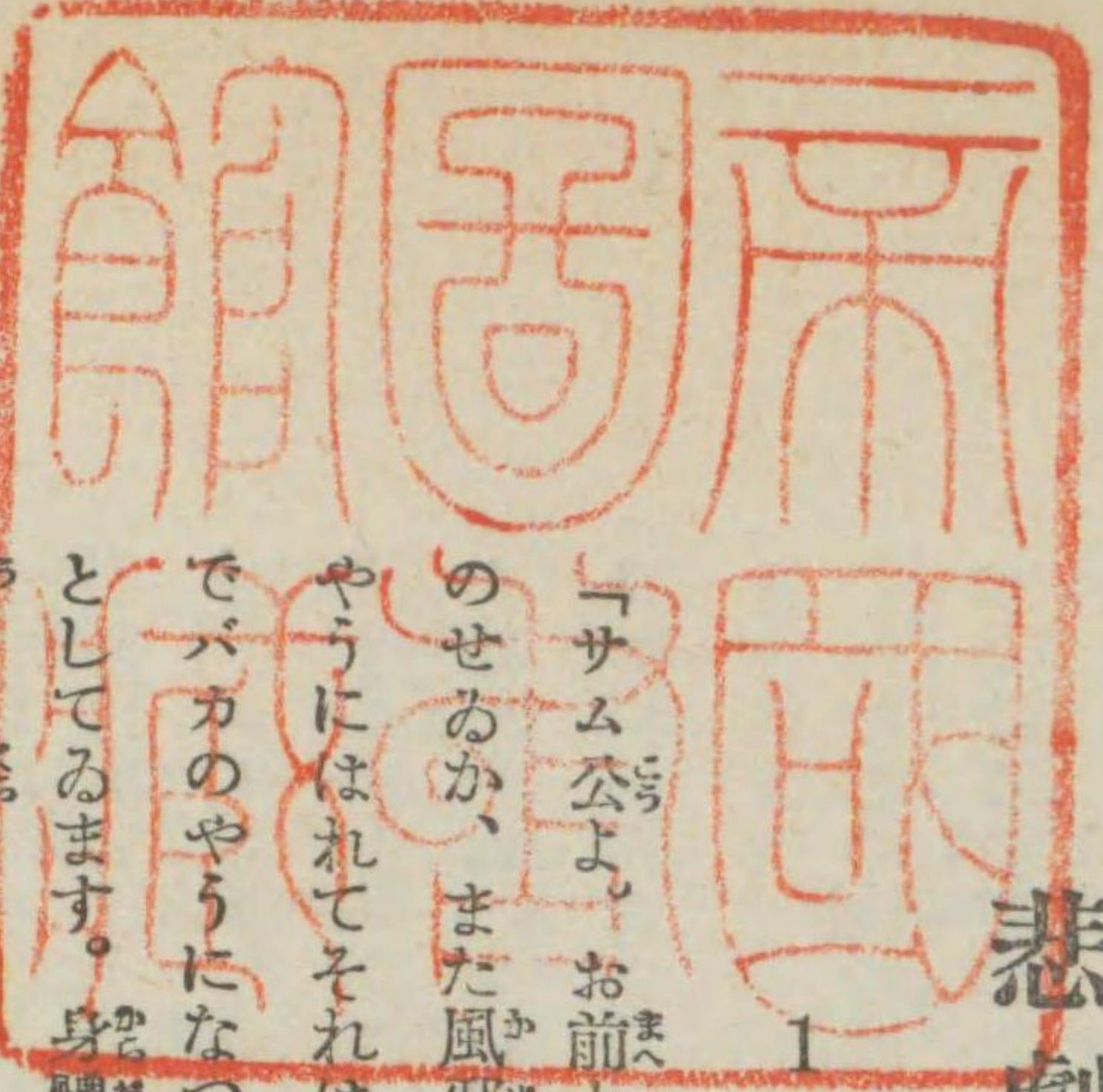
東京堂出版

| | |
|--------|-----|
| 六助の逃亡 | 二六 |
| 月光の道 | 二八 |
| 放浪者 | 一八 |
| ある心の断片 | 一七 |
| 傳説 | 一〇三 |
| 逃げられた男 | 一三四 |
| 明暗の記 | 一三一 |
| 莊嚴な話 | 二七 |
| 町會議員 | 二四 |

—了—

悲劇を探す男

尾崎士郎



悲劇を探す男

「サム公よ、お前と別れて歸つてから、不眠症にて、アダリン、カルモチンなどちやんぼんに飲み、そのせぬか、また風邪のためかわからないほどひどい發熱にて二日寢ました。それで手足、顔が豚の子のやうにはれてそれはみつともないことになりました。しかし今朝は宿の女中が二人あそびに来て、三人でバカのやうになつて騒ぎ廻り、熱のある身體のまゝにて、とび走りしたので今日はどうやらぼかんとしてゐます。身體のわるいときには自分の家がないのは心細いです。歸りたい。歸りたい。サムは如何して暮しておいでるやら。Y温泉もこの二三日夏らしい暑さになりました。それで東京は定めて暑いことであらうと思ふとサムが可哀想でなりません。私も身體がよわいがサムの方がもつと弱いし、それにサムは神經でもまるくせがあるから、どうぞ早う涼しいこちらへ来ておくれ。この部屋は日本一に涼しいです。廣いです。川のそばです。四方がガラスばりにて風通しがすばらしいです。お前がおいでるまで毎日電報うたうか。東京で何がお前をとめてゐることせう、おばあさまのこと、それから家の

借金のことなどは私が入りかほりになり、八月、九月までかゝつてすつかり整理します。何も心配せず十圓札一枚握つて荷物もカバンも何も要らないから、身体一つでとんでおいで。こちらは涼しい。涼しい。原稿用紙は二百枚ある。お前と入れかほりになつて私が東京で金の工面をします。早うおいでんさ、待つてゐます。朝晩何を喰べておいでるやら、何を着ておいでるやら、何もよくよしてはいけません。私は東京での困難な生活を、ある意志的な空想をもつて楽しんでゐます。お前がYですばらしい仕事と健康とお持ちする間に私は私たちの巢を住み心地のよいすばらしい玩具の家庭につくり直すので。この玩具の家庭の中には何時でもサム公のすばらしい着物と本と喰べものと、それから帽子と靴と、それから何時でもピチピチした十圓札とがあります。もう一つすばらしい寢床があります。こんな玩具の家庭をもつお前は合せではないでせうか。それは玩具ですからお前が厭になつたら何時でも壊すことが出来ます。あゝ、うれしい、悲しい。……

わたしの胸の底を不意にうそ寒い風が通りぬけた。すると、わたしにはもう妻の手紙をこれ以上讀みつづける勇氣がなくなつた。わたしは机の上ひろげた手紙——一枚の原稿紙の上に細かいペン字でぎつしりと書込んである——を丁寧に疊んで元の封筒の中に入れた。一瞬間、わたしは自分の心が一氣に古い記憶の中に陥ちこんでゆくのを感じた。——しかし、過去は未だわたしの胸の底に生々しくすぶ

つてゐる。その回想の一つ一つが今、新しい火の中に無氣味な音を立て、燃えはじめた。

——ぢやあ、これでわたしたちはすつかり別れてしまふのね。

——さうさ、何も彼も消えてしまつたのさ、死滅したテーマのぐるりを堂々廻りしてゐたつて仕方がない、いゝかね、おれにとつて一番大事なものは記憶なのだ、その記憶が今はずたずたに引裂かれてしまつたのだ、一切のものを消えよ。この家が何だい、この壁が——。この庭が、おれはだれにでも呉れてやるぞ！

——それで、もう何も言ふことはないのね、わたし明日から、もうゐなくなつてしまふのよ、そして今度會ふときには、始めてあなたに會つたときのやうな可愛い娘さんになつてやつてくるわ。上野で寝たときのやうに、島田を結つて、いゝ着物を着て、それから長襦袢も着て、……

——泣くな、馬鹿、そんなセンチメンタリズムが今のおれたちに何の必要があるんだ。貴様は何時でもおれのヤケ(自暴)に調子を合す用意をしてゐるやがるくせに、

——要らぬお世話さ。あなたはこれからひとりになつて綺麗な若いお嫁さんを貰ふといゝわ。でも、わたし悲しいのよ、だから私もこれからうんと綺麗になつて勝手なことをして暮してやるわ、さあ、これからはんたうにひとりぼつちなよ、ねえ、何故あなたはそんな難かしい顔をしてゐるの、まるで人類の苦悶をひとりで背負つて立つてゐるやうな顔をしてさ、

—だから、お前の存在なんぞ眼中に無いと言つてるんぢやあないか。——うるさい奴だな、おれはもう寝るよ。

—あなたはそれで平氣で眠られるの、ぢやあ、これでほんたうにすつかりおわかれなのね、わたし明日から何處かへ行つてしまふのよ、

—如何でもするがいゝさ、何處へでも勝手なところへ行けよ、ゴミ溜の中でも、群集の中でも、何處へでも行つてお前の新しい痴話喧嘩の相手を探してくるがいゝさ、

うす暗い部屋の中で妻の蒼ざめた顔が顫へてゐる。二人は大きな瀬戸の火鉢を挟んで坐つてゐるのであつた。その中に投げこまれた一束の手紙——わたしたちの戀愛の歴史——が、やうやく燃え盡きようとするところだつた。わたしは今にも泣き出しさうになる氣持をぢつとこらへながら、しかしかすかにわたしの胸をみだしはじめた慘虐な感情を無理にもかき立てようとしたが、しかし、わたしの眼は火鉢の中の灰の上に白くうかんである手紙の文字の上を放心したやうに彷徨つてゐるのであつた。如何しておれはかういふ氣持になつてしまつたのか、——いや、さういふことを考へるべきではない。おれは前へ進むのだ、さあ此處で大きく廻れ右をして未知の將來に向つて歩きだすのだ！

ともすれば深い回想の中へ引きもどされさうになる自分を勵ますやうに、さう呟いてみるのであつたが、しかし、わたしの心の中は、道具を一つ残らず運び去られてしまつたあとのがらんとする部屋のや

うであつた。そのとき、夜風に鳴る笹の葉の音が、この部屋の中のを寒く澱んだ空氣に調を合すやうにひびいてきた。その音の中にわたしの昂奮はぢりぢりとおとろへていつた。すると、このうす暗い部屋の中にいがみ合つてゐる二つの魂が同じやうに哀れな姿をとつて不意にわたしの眼の前に現はれてきたのである。

わたしの両手は何時の間にか前にのびてゐた。わたしは化石したやうに冷たくなつた妻の瘦せた肩をしつかりと壓さへつけながら、

「——さあ、今夜は寝ようぢやないか、お互に新しい不幸の中へ飛びこんでゆくときが来たんだ、それだけのことさ、おれたちはこの古ぼけたロマンチズムの城砦を捨て、新しい人生の旅にのぼるときが来たのだ、だからおれたちは……」

しかし、涙をこらへるためにぢつと齒を喰ひしぼつてゐる妻の横顔を見ると、わたしは急に口を噤んでしまつた。悲しみがどつと溢れてきた。そのまゝ、わたしは火鉢のふちに顔を俯せてしまつた。何も言ふことはなかつた。もう二人の間にはお互ひの理解を要求するための新しい言葉は残つてゐなかつたから。さうだ、深い愛情の中に、——愛情の高まるにつれて離反してゆく二つの魂の持つ宿命がいよいよ最後のわかれ道にまで二人を追ひ詰めてしまつたといふことを除いては。——

妻は、ふと思ひ立つたやうに火鉢の中を名残惜しさうに見詰めてゐるが、急に深い溜息を吐きながら、

そばにあつた一枚の古新聞を膝の上ひろげはじめた。それからおそるおそる火箸をとつて、もうすつかり灰になつてしまつた手紙の燃えかすをそつとつまみあげた。わたしは思はずどきつとした。深い感動がわたしの心を捉へた、彼女の心がありありとわたしの胸にうつつてきたのである。

「おい、如何するんだ、そんなことをして？」

「この灰をとつておくのよ。」と、妻はわたしの言葉を弾き返すやうに明るい調子で言つた。——「わたし、あなたの氣持はよくわかるの、だけど、わたしには、この古いロマンチズムが無ければ生きてゐられないのよ、でもわたし今はほんたうに幸福なのよ、あなたがわたしに、どんなひどいことをなすつても、やつぱり、あなたはわたしを愛してゐて下さるといふことがわかるのよ、わたし、こんなに愛されてゐるといふことだけで、どんなに幸福か知れないのよ。でも、わたしは何一つあなたのお役に立たなかつたのね、わたしはほんたうにいけない奴なの、そのことだけが悲しいわ。」

「おい、おい、——そんな話はもう止さうぢやないか、何しろ今夜は寝よう、愚圖々々してゐると夜が明けてしまふぜ。」

「夜が明けたつていゝぢやないの、もう今夜だけだといふのに、さあ、此處へいらつしやい、そしてならんで腰かけて静かな氣持で話をしようぢやないの。」

彼女はよろよろと立ちあがつて寢臺の端しに腰をおろした、……

わたしはもう、ほぐしはじめた回想の糸を断ち切ることができなかつた。それは不思議な物狂はしい瞬間であつた。この同じ部屋の中でわたしは何時の間にか半歳前の出来事の復習をやつてゐるのであつた。そして、火鉢も、寢臺も、窓も、カーテンも、いや、かつてわたしたちの不幸を照らした電燈の光さへ、同じやうにわたしの淋しい影を高い壁の平面にうつし出してゐるのに、それにもかゝはらず、この美しい空想は最早わたしたちの手の届かないところまで遠く離れていつてしまつたではないか。といふのは、わたしはもう新しい不幸の中へ身を躍らしてしまつてゐるからである。それはちやうど糸を失つた風船が次第に高く空の深みの中に消えてゆくのをちつと見詰めてゐるやうなものだ。おゝ、それにしても、あのときから、もう半歳近く経つてゐるではないか。玩具のやうな家庭、玩具のやうな家、すばらしい寢臺、ピチピチの十圓札——わたしは妻の手紙の中の文句をもう一度頭の中に繰返した。しかしこの美しい空想すらも、今は何とうす氣味わるくわたしの心の上のしかゝつてくることよ。このやうな深い愛情にみちた妻を持つた幸福な男が世界の何處にゐるであらうか。このやうな深い愛情に追いつけられながら、それにもかゝはらず逃げ廻らなければならぬ不幸な男が。——

わたしは到頭、妻に送る手紙を書くために机の上に原稿用紙をひろげたのである。しかし、わたしの

感情は硬化して何を書く氣力もなかつた。すべてが終つてしまつたのだ。すべてが。——すべてがあまりに進みすぎてしまつてゐるのだ。それでなければあまりに遅れすぎてしまつてゐるのだ。妻への愛情は最早わたしの心に一本の古い里程碑となつて残されてゐるだけだ、それだけのことではないか。前へ進め、前へ！

わたしはそのまゝ寝臺の上へぐつたりと死骸のやうに横になつた。すると、一隊の騎兵が乾いた道路に砂塵を立てゝ走り去るやうに、過去と未來とをつなぐ雑念の行列が陰惨な翳をふるひ落しながら走りすぎた。風が絶え間なくあけ放した窓のカーテンをゆり動かした。そのたびごとに蒼く澄んだ空の色が疲れたわたしの視野の中にひろがつてきた。遠くの方から太鼓の音が聞え、それから、かすかな騒音が、きれぎれに夜風の中を傳つてきた。その音にちつと耳を澄ましてゐると、夜祭の雑沓の中をひとりよちよちと歩いてゆく妻のうしろ姿がひよつこりとうかびあがつた。すると、古い回想が、一つ一つ、鈍い午後の陽ざしの中に舞ひ落ちる木の葉のやうにわたしの腦底をかすめて通つた。わたしはもうぢつとして部屋の中に坐つてゐることができなくなつた。やつとのことで鳥籠をぬけ出した一羽の小鳥が新しい未來に向つて翼をひろげたときに彼の身體はもう何時の間にかカスミ網にひつかゝつてしまつてゐるやうに息苦しい羽搏きを心の中につづけながら、しかし、わたしは彼女のつくりあげた人生の筋書をもう一度頭の中で調べはじめたのである。その筋書には少しの誤りもなかつた。わたしが進んで極度の不

幸の中に追ひ込まうとした主人公（わたし自身）は、見事にわたしの想像以上のどたん場に追ひ詰めてしまつてゐるのだから。「羚羊の攀づる道」さへも今は彼の眼の前に横つてはゐないのである。彼は過去の地獄をうしろに残して歩きつづけてきたのだ。そして今や新しい不幸の斷崖が彼の脚下にはるばるとつゞいてゐる。だが、しかし、その前に立ちどまつて、ふとうしろをふりかへつた彼の眼に、夕陽の中に輝いた過去の風景がいかに美しく見えることであらう。それは妻を捨て、故郷を逃れ出た男が、とある丘の上に立つて惨苦の記憶の中にすらも美しい夢を描き出すことができるやうに、彼は過ぎ去つた日のゆるやかな生活の流れにちつと耳を澄ますのである。それから彼は立ちあがる。そして何の躊躇もなく、くるりと一廻轉して、新しい道を歩きはじめた。風景は眼新しく刻々にうつり變つて、彼の残してきた過去の里程碑はたちまち夜の闇の中にかくれてしまふのである。

それだけのことではないか「お前は屋氣樓に欺かれてはならないぞ！」と、わたしは顫へ聲で自分に叫びかけながら冷たい蒲團の中へもぐりこんだ。しかし、何時の間にか枕が涙に濡れてゐるのに氣がつくと慌てゝ立ちあがつた。そして、外からくる過去のおもひでの來襲を防ぐために力強く窓をしめた。

朝、わたしは重苦しい夢の中に氣魂しく下の家の格子戸を敲く音を聴いた。瘦犬のフリツツが疥高い

聲で吠え立てた。わたしは今、自分をとりまいてゐる借金取りの一人を頭に描きながら、——しかし、さういふ豫想の中に不吉な運命を感じながら、ちやうど幕営に眠つてゐる將軍が兇惡な刺客を迎へるやうな氣持で起きあがつた。靴音がわたしのゐる上の家へ向つて土の階段を駆けのぼつてきた。かういふときには機先を制するにかぎる。——わたしは急いで鍵を外して、一氣に入口の扉をひらいた。するとヴェランダの前に立つてゐた若い電報配達が、わたしのとげとげしい表情にぶつかつて、かすかなおそれと軽い反抗のための肩をそびやかしたところだつた。

「電報です！」

わたしは妙に照れ臭い氣持になつて彼から電報をうけとると、そのまゝ逃げるやうに寢室へ歸つた。そして、電報の差出人に對して、不安を極度にまで誇張することによつて胸を躍らせながら、しかし、急いで短い電文を読みはじめた。

「イツクルカスクヘンマツ」

いよいよ、運命に對する妻の挑戦がはじまつたのだ。わたしの胸は見事にこの愛情の砲丸によつてうちぬかれた。しかし、一瞬間、もはや彼女の機關銃から身をそらすことができないといふ氣持のために、單身敵の陣營の中に躍り込まうといふ勇氣がわたしの心に奮ひ起つてきたのである。

おれは妻をおそれてはならぬ、今こそ、おれは冷徹な惡魔の心によつて、妻の前にすべての眞實を語るのだ。わたしが人生の上になつた新しい計畫について。すべての家庭的な愛情がわたしにとつてまったく無價値になつてしまつてゐることについて。それから、何時の間にか妻にかくれて、わたしが一人の少女を愛しはじめたことについて。

わたしは、しかし、何よりもこのひそやかな戀愛の報告のために妻の心に現はれるであらうところの反應について考へねばならなかつた。何故かといつて、いかなる言葉によつてこの事實が語られるとしてもわたしの心の動きを正しく彼女に傳へることは出来ないであらうから。——

わたしは、自分の語るべき言葉をさまざまに紐立てゝみるのであつた。それを幾度びとなく解きほぐしては、そして、解きほぐすごとに、自分に都合のいゝ想念を一つ一つ積み重ねていつたが、しかし、厳めしく装ひ立てられた空虚な論理は、すべて、彼女の前ではひとたまりもなく崩れてしまひさうに思はれる。そこで、わたしは到頭、彼女に會ふための心の構へを投げ棄てた。——勝負は時の運ではないか、何しろ、おれはぶつつかつてみなければ、……

わたしは時計を見て汽車の時間表を調べ、それから大急ぎで洋服に着替へた。すると、まるで何事もなく平穩な旅に出かけるやうな、そはそはした氣持にさへなつた。臺口の中には二圓足らずの金しか入つてゐないが、しかし、途中で時計を質に入れれば如何にかなるであらう。恐るゝことはない。下の家

の母親の寝てゐる部屋の窓の下をそつと通りぬければそれでいゝのだ（母親の病勢は前の日から少しづつ險悪になつてゐた）。——わたしは壁際に立てかけてあつたステッキをとつて立ちあがつた。大氣は妙にうすじめつて風にはかすかなねばりがあつた。門前にならんでゐる椎の木の高く鳴りだした。その音をうしろに聴きながら、何時ものやうに新しく砂利を敷いた裏道を忍びやかな足どりで歩きはじめた。しかし、石疊を敷いた坂道を表通りへぬけることは何よりも危険だつた。といふのは、袋の口を思はせるその露路のぐるりは、小さな債権者のむれによつてすつかりとりかこまれてゐたから。先づその入口に陣を敷いてゐるのは見るからに精悍な酒屋の親爺であつた（こいつは最も強敵である）。その前が、肴屋、米屋、俵屋といつた風に没落に瀕したわたしの居城をとりかこんで彼等は何時でも火ぶたを切らうとしてゐるのである。だが、わたしは誰にも見つけられずに雑木林のかげの落葉を敷いた細い道にぬけることができた。誰も見てゐるものはなかつた。今は、わたしにとつて唯ひとりのサンチヨバンザであるところの老犬フリツツが鼻を鳴らしながらついてくるほかに。——だが、停車場へつづく広い大通りへ曲る坂の上り口まで来たときには、この氣まぐれな犬の姿はもう見る事ができなかつた。

三島驛へ着いたのは、しかし、その日の日ぐれ方だつた。わたしは、かすかな胸のときめきを感じながら、窓越しにプラットホームを見わたした。それから、ぞろぞろとおりる乗客の一ばんうしろから、わざとゆつくりした足どりでついていつた。汽車をおりるとき、わたしは一步踏みとどまつてもう一度雑沓の上を見おろした。妻がわたしを見つけるよりも前に、わたしの方が先きに彼女を見つけるために。そして、彼女の新しい魅力がどの程度にまでわたしに働きかけるかをさぐるために。

人々の影がわたしの眼の前をゆらめいて流れた。おや、來てゐないのかな。——わたしはすぐにホームへとびおりた。すると、彼女はわたしのまん前に、ちつとわたしを見上げながら、柱をうしろにして立つてゐるのであつた。どきつとしてわたしは立ちどまつた。彼女はわたしの視線を迎へると、待つてゐたやうにほがらかな笑ひを浴せかけた。不意うちを喰つて私は思はず帽子をとつた。もう一息でお辭儀をしてしまふところだつたが、しかし一瞬、彼女の瞳をかすめた悲しげな感情に觸れると、わたしはやつとわれに返つた。

そのまゝ、わたしたちは一言も交さないで改札口の方へ歩きだした。頬紅の色のために彼女の顔は前よりも肥つて見えたが、しかし、もう六月も終りだといふのに、セルの平常着を着流してゐる姿が、妙に佻しい感じを興へた。それに、最も悪いことは、すべての身装が元通りだといふことだつた。無雑作に束ねた髪にも、帯の結び方にも、手提鞆にも、安物の下駄にも、半年前の二人の生活の影が沁みついて

あるといふことだつた。——
 「若しかしたら電報が間に合はないかしらと思つてね。」
 すると、おそろおそろ彼女を見たわたしの顔の上に、妻は深い愛情のこもつた視線を投げながら言つた。——「大急ぎでやつて来たのよ。そりやあ、もう、ろくすつぽお化粧をするひまもなかつたのよ、それで……」

と、彼女は出口の前で立ちどまつて、

「——これから何處へゆくのか？」

「何處へゆくか見當なんかつけてゐないよ、それに電報が間に合はないやうな気がしたのだからね。」

「電報が間に合はなかつたら如何するつもりだつたのか？」

「さあ、——仕方がないから、さうなればM町に泊つて、もう一度電報をうつか、それとも……」

「どつちにしても、あなたはY（温泉）までいらつしやるつもりはないのね、わたし、さう思つて、わざと宿の方には停車場まで迎へに来なくてもいゝと言つてきたのよ、でもよかつたわ、ことによると、わたしが出たあとで、行くのを見合せるといふ電報が來てるんぢやないかしらと思つて、はらはらしながらやつてきたのよ。」

そのとき、ホームの左手（汽車の到着する場所とは反対側の）に、S行の軽便列車が氣魂しく發車の

汽笛を鳴らしはじめた。すると、彼女は、ほとんど衝動的にその前に走りよつて一番最後の車室の扉をあけた。そして、せき立てるやうにわたしを追ひ込みながら、早口に言つた。

「ぢやあ、兎に角、これに乗らませうよ。」

車室の中は彼女とわたしと二人きりだつた。

「ねえ、あなた、——あなた今、お金持ち？」

汽車が動き出すと、突然彼女は調子はづれの聲でかう言つてから、くすくす笑ひだした。——「わたし、自分の言葉をまるで忘れてしまつたのよ。何だか、へんにピントが合はなくなつてゐるのね、あなたの顔だつて、わたしすっかり忘れてしまつたのよ。ほんたうに、こんな顔だつたのかしら。」

その言葉の浮々したわざとらしさにもかゝらず、彼女の表情の中には、全く反対の感情がひそんでゐた。彼女は、極度に言葉をゆがめることによつて、深い悲しみをまぎらさうと努めてゐるやうに見えた。

「それで、一體、何處へつれてゆくんだい？」

「——このすぐ先きにNといふ温泉があるのよ、でも、あなたはあまりゆつくりできないのね。」

わたしはそのとき、ちつとわたしの顔に定着してゐた彼女の視線が次第にゆるんでくるのを見た。如何したといふのだ。——ピントがはずれてしまつたのは言葉だけではなかつた。この色のあせた會話の中に如何して以前の夫婦の姿を描きだすことができるであらう——一瞬間、わたしの眼がしらはぼうつとかすんできた。涙が止度もなく流れだした。

「馬鹿ね。——サム公、こんなところで泣いたりして。」

彼女はハンカチをもつた左手で不意にわたしの顔を抑へた。この思ひがけない愁嘆場に一脈の色彩を添へるために。

4

客のほとんど静かな温泉宿の離室であつた。わたしと妻とは、夕飯のあと、明るい電燈の光の中にはじめてしみじみと顔を見合はせたのである。わたしの心は、もう何時の間にか何事も起らなかつた前と同じやうなゆつたりとした落ちつきにみだされてゐた。——それは過去と現在とを同時に感じてゐるやうな奇妙な時間であつた。まるでわたしは長い旅を終へて自分の家へ歸つたやうな氣持にさへなつた。今、そこに、わたしの眼の前に坐つてゐるのはいふまでもなく、昔ながらの、わたしの妻と呼ばるべき女であり、だから、わたしたちの間には昔ながらの愛情がかき立てられてゐるではないか。

それにもかゝらず彼女は、もはや家庭の牢獄の中で、わたしの生活を見まもり、わたしの空想の方向にまで干渉しようとする意地のわるい看守ではなかつた。それにしても、わたしの心は古い戀愛の里裡標をうしろに残して、前へ前へと進んでゐるのに、そして、二人の生活はすつかり終つてしまつてゐるのに、何と新しい情感の陽さがわたしの胸の中にひろがつてくることよ。

これは一體、生活の始めなのか、それとも終りなのか。……事實、東京でのわたしの生活は一變して、新しい戀愛が芽をふき、新しい敵に向つての戦線が、ひろげられてゐるのに、おゝ、それ等の生々しい現實までがいかに古ぼけて見えることであらう。そして、わたしは今、此處にゐるではないか。昔ながらの妻のそばに、昔ながらの情愛の中に。——

しかし、その感じは、妻が口をひらいて、彼女の生活——Y温泉での新しい友人たちにとりまかれてゐる——を語りだすにつれて、だんだんうすれていつた。わたしは彼女が、わたしから遠く離れた霧圍氣の中にゐることを感じなければならなかつたから。さういふ霧圍氣に對して、わたしは何時の間にか、前と同じやうな嫌悪と嫉妬を感じはじめた自分の心を今更のやうに顧みた。わたしの心に反應したその感じに對して、しかし、慌てゝ彼女は警戒しはじめたのである。そして、話題の方向を一變して、多分わたしが興味を持つであらうところのY温泉でのさまざまな出來事をしやべりだした。例へば、宿の女中が一夜泊りの學生と墮落ちした話とか、村の豪農の娘が電報配達に強姦された話とか、山の中腹にあ

る有名な灌が新しい水力電氣の工事のために水量を失ふといふことについて村中で大騒ぎをしてゐるといふ話とか。……

だが、それ等の話はわたしにとつてはおそろしく退屈なものであつた。それ等の退屈な話がつゞいてゐる間に、しかし、わたしは過去の幽霊に對する構へをすっかり立て直してゐた。わたしは相手を自分のつくつた陥穽におびきよせるために何時の間にかかういふ調子で言葉を切りだした。

「ねえ、それよりも、お前の戀愛事件を聴かうぢやないか！」

「わたしの戀愛事件ですつて、——冗談ぢやないわ、あなた未だあんなことを氣にしてゐるの？」

彼女はどきつとして、不意に言葉の調子を變へてから、わたしの表情をさぐりはじめた。——「あの人はもうY温泉にゐないのよ、だけど、あの人が假りにわたしに戀してゐたとしてもそりやあ、あの人の勝手ぢやないの、それに、わたし此頃はこの人がやつてきてもろくすつぽ物も言はなかつたのよ。」

「あの人といふのは高尾君のことなだね？」

「さうよ、——だつて、あなたがさう思つてゐるんでせう、だけど、そのことは、わたし誰の前だつてはつきり言へるわ、あの人がどんなに深刻な戀情を寄せたとしても、わたしの心にひびかなかつたとしたなら何でもないぢやないの？」

彼女の顔は昂奮のために火照つてきた。わたしは、自分が豫期してゐたよりも以上の苛立たしさを感

じながらも、しかし、次第にわたしの思ふ壺にはまつてくる彼女の心を被告に對する冷酷な檢事の眼で見おろした。

「そんなことにムキになる必要はないぢやないか、——おれたちの關係はもう明かにそんな時期を通り越してゐるんだからね、だから、お前も、もつと樂な氣持で話した方がいゝよ。」

「樂な氣持ですつて、へん、——そんなことを言ふもんじゃないわ、みつともなくつて仕方がないぢやないの、わたし、あの人に會ふのが恐ろしかつたわ、あの人は十五年間、わたしが自分のところへ來るのを待つてゐるといふのよ。」

過去が再びわたしの頭の中に殺到してきたのである。心が前にのめりかゝつた。——わたしは自分のつくつた陥穽の中に危く足を踏みはづしてしまふところだつた。その瞬間、妻に對する憎惡が、もうすつかり鏽のついてしまつた古い記憶とよもに溢れ出てきたのである。すると、一年前に、わたしの愛情の上に小さな蹉跌を來したところの一つの出來事が、その出來事の前にみすばらしく腰をかゞめてきた自分の姿までがありありとうかんできたのである。

——一年前の冬の夜であつた。もう年も暮に近かつた。Y温泉から彼が妻を訪ねてやつてきたのは、しかし、わたしとの間にあまり年配の隔たりのないこの若い洋畫家——高尾伸三をわたしはその年の夏始めてY温泉へ行つたときから知つてゐた。彼の顔の輪廓も身體つきも妙に角ばつて無恰好であつた

が、しかしそれにもかゝらず、この男と話してゐると、ひそやかな情感が迫つてくるのを覺えた。それは乍しい運命の影に彩られた情感であつたが。——わたしは何時の間にか、彼に對して、それは年長者が年下の者に對して感ずるやうなかなかな尊敬と信頼とを感じはじめた。妻はわたしよりも先きにそこへ行つてゐたので、彼女がわたしに彼を紹介したときには二人の間にはもうさうやかな友情が、——といふよりも、彼の情感が妻の心の一角に淡い影を落してゐた。といふのは、彼の言つた言葉が何時の間にか妻の口によつて繰返され、ときには彼の癖までが、妻の言葉の端しはしにまで現はれてきたからである。

しかし、わたしは、つとめておろかな亭主となるための役割を避けねばならなかつた。例へば、假りに、高尾の友情が彼女に對して、はつきりとした戀愛のかたちをとることがあるとしても何であらう。さういふ場合が來たら堂々と戦はう。おれはこの戦ひを不純にしてはならぬ、——わたしは心にさう叫びかけながら、むしろ彼の挑戦をひそかに期待するやうな氣持で、毎日のやうに心の中を去來する小さな嫉妬を壓へつけねばならなかつた。しかし、妻に對する感情とは反對の角度をもつて彼はわたしに近づいてきた。わたしは彼の心の動きに對して、かすかな心の用意を感じながらも、しかし、わたしに近づき、わたしを理解しようとする彼の眞實を疑はなかつた。秋が來て、妻だけをそこに殘して東京に歸る日が來ても、だから、少しの不安を感じなかつたほどに。だが、東京へ歸つてくると、現實への距離が

あまりに遠くなりすぎたので、無数の幻覺がわたしをおびやかしはじめた。曇りかけた感情の中でわたしは次第に妻の愛情を疑ひはじめたのである。すると空想の中のわたしの敵は正面からわたしに向つて銃口を向けだした。——一ト月ほど經つて妻はひとりで歸つてきた。

「——もう少し經つたらね、高尾さんがいらつしやるつて。」と、彼女はわたしの顔を見るとすぐに浮きうきした調子で言つた。

「高尾君が、——何しに？」

ふとわたしの顔に現はれた險惡な表情を見ると、妻はいかにも意外だといった風に急に聲の調子を落した。

「勿論、あなたに會ひによ。」

「おれに會ひに、——」

わたしは鼻の先きでせうら笑ふやうに、さう言つてから、妻の表情の中に少しの嘘もつかんでゐないのをたしかめると、急にどきまぎしながら、

「ぢやあ、高尾君を迎へる準備をしよう。」

しかし、わたしが自分の卑劣さを掩ふための照れかくしにさう言つた言葉までが、一ト月と經たぬうちに現實となつて現はれてきたといふことは何といふ皮肉であらう。といふのは、わたしは久しぶりで

彼と向ひ合つた瞬間、わたしが彼を親しい友人として迎へようと努めてゐるよりも以上に、彼の心がわたしに對して極度のぎこちなさのためにほとんど何時もの平定を失つてしまつてゐることに氣がついたからである。それは夕方であつたが紺緋の着物の上に黒いマントを羽織つた彼の姿はわたしの胸にかすかな哀傷を唆つた。寒い風の中を歩いて來たせるであらう、彼の顔は蒼ざめて、切ない物思ひに深く沈んでゐるやうに見えた。——その夜、近所に住んでゐる若い詩人、Aの家で、ダンスの例會があるから見に來ないかといふ誘ひをうけてゐたので夕飯のすんだあとわたしたちは彼と三人で出かけた。Aの家は綺麗にとりかたづけられて、正面の西洋間には、蓄音機の奏樂につれて幾組かの男女が踊つてゐた。わたしはダンスのはじまつてゐる次の部屋で踊りに疲れた人々といつしよにウイスキーを飲みながら雑談に耽つてゐたが、ふと傍にゐた高尾伸三の顔を見ると、思はずしやべりかけた無駄口を途中でよしてしまつた。彼は非常に苛々してゐた。それは彼の氣持がこの場所の空氣に調合しきれないもどかしさのためであるよりも以上に、何か心の底にをさまりきれない感情のひそんでゐることを思はせた。彼はひとりで、ぐいぐいとウイスキーを呷りはじめたのである。それから、蓄音機の奏樂に合わせて椅子に腰をかけたまゝで無恰好な身體をゆすぶりだした。

「——どうです、高尾君、いつそのこと踊つてみては？」

わたしはふいと立ちあがつて、うしろから彼の肩を敲いた。すると、彼はどろんとした眼でちつとわ

たしを見据ゑながら、けれどももある感情の反撥を示すために、わざと一度、苦笑ひをしてみせてから、「何故？」と言つた。

わたしは彼の思ひがけない強い語調にどぎまぎしながら、

「——いや、君が踊り出したらね、ことによつたら僕も小説が書けるかも知れないと思つてさ。」

「ぢやあ、踊りませう。君に小説を書かせるためにね。」

荒々しく立ちあがつて、彼はダンスの相手をさがすために部屋の外へ出ていつた。そのとき、わたしの耳に廊下の一角から妻の言葉がひびいてきた。——「あぶないぢやないの、そんな恰好をして……」

彼女は何かしきりに高尾と言ひ争つてゐるやうであつたが、一瞬間、わたしの耳は烈しく鳴りだした。もう落ちついてゐることができなかつた。わたしは立てつづけにウイスキーをぐいぐいと飲み乾した。數分間の後、彼は、いかにも疲れたやうに胸を撫でながら部屋へ歸つてきた。彼とわたしとは始めてテーブルをはさんで向ひ合つたのである。彼はもうすっかり落ちついてゐた。しかし、彼が落ちつくにつれて、わたしの心は俄かにいきり立つてきた。わたしは正面から彼に對してぢりぢりと攻勢をとりはじめた。わたしの表情の中からすぐに、彼も一つの感情を讀みとつたらしい。——彼は横にゐた人たちの方を見て酔ひにまかせて、しかし、靜かな調子でわけもなくしやべりだした。わたしには彼が何をしやべつてゐるのかまるでわからなかつた。わたしの心は唯一つの機會をねらふことにのみ追はれてゐる

たから。そのとき、彼がくるりとわたしの方を向いた。わたしはちつと彼の顔を見た。そして眼を——すると、彼の表情の中をひとすぢの輕侮の情が電光のごとく走り去つた。

「お——」と、わたしは低く叫んで立ちあがつた。胸の底で何か一つの堅い殻がばちん！ とはじけるやうな音を聞きながらわたしは右手に握りしめた煙草を火のついたまゝふりかざして、一気に彼の面上に敲きつけた。燃えさしの煙草は彼の額に當つて、テーブルの上へ落ちた。彼は、しかし、冷やかな手つきで、今、眼の前に落ちた煙草をつまみあげた。ちつとわたしの顔を見詰めてゐる彼の眼は、わたしの顔に現はれた戰意をたしかめようとするよりも、むしろ、何か一つの見えざる感情への憧れのために輝いてゐた。この思ひがけない素振りに、十分、彼の應戰を豫期してゐたわたしの心は急にたぢたとひるみはじめた。すると、彼は視線をわたしの顔から離して、ちつと考へこむやうに眼を瞑ぢた。しかし、すぐに猛然として立ちあがつた。

「よし、やらう。——さあ来い！」

わたしの心は隙をつかれて二三歩あとへのめりかゝつたが、しかし、彼の不意の襲撃に對して長い間壓さへつけられてゐた野性が一時に燃えあがつてきた。しかし、わたしたちの怒號はそこにあつまつた人々によつてすぐに隔てられてしまつた。そのとき、わたしは自分の右手が、妻の兩腕の中にしつかり支へられてゐるのを知ると、矢庭に彼女の肩を突きとばしながら叫びだした。——「馬鹿！ あつちへ

行け、貴様におれをとめる資格があるか、今こそ、貴様が望むところのものをを見せてやるのだ、馬鹿！」その夜の出來事が、——もう、すつかり、新しい土によつて掩ひかくされてしまつてゐる過去の事實が、わたしの眼の前に現はれてきたのである。すると、わたしは妻に對する憎惡の記憶を咬しかけられながら、そして、慘忍な感情が小氣味よく心を煽るのにまかせながら、もう一度古い言葉を胸の中で繰返した……「今こそ、貴様が望むところのものをを見せてやるのだ！」

5

しかし、長い沈黙のあとで、彼女は、ほがらかに、輕がるとわたしのつくつた陷穽の上をとび越えてしまつた。——

「そんなことよりも、サム公、もつといい話をしようぢやないの、こんなもつたいたい時間をそんなこととつぶしてしまふのは惜しいわ。」

「いい話だつて？」

「さうよ、——わたし、もうずつと長い間このことを考へてゐたのよ、わたし、あなたの心を苦しめたりなんぞしないわ、わたしがみんななるかつたのよ、だから……」

「から如何するのさ？」

「そんな風に言はないでね、——わたし、ほんたうにあなたを一人きりにしてあげるわ、そして、わたしたちはもつと高いところで結びつかうぢやないの、ねえ、——『事實は影なり』つて、何時かあなたはわたしにかう言つて教へてくれたことがあるぢやあないの、だから、過去の事實をほじくり廻すのはよさうぢやないの。」

さうかも知れない、——だが、おれの心の中ではお前の存在そのものが既に過去の事實になつてしまつてゐるのだ、とわたしは危く言ふところだつたが、しかし、やつと疼くやうにのぼつてきた一瞬の言葉を咽喉元で壓さへつげながら、

「お前の言ふとほりさ、だがね、おれは『影』を求めてゐるのぢやなくつて『事實』を求めてゐるのだ——動いてゐるのは『事實』であつても『影』ぢやあないからね。」

「ぢやあ。」

と、彼女はそのとき呼吸を弾ませながら言つた。——「ぢやあ、わたしたちの愛情もあなたにとつては一つの『影』なのね？」

「ちやうど。」

わたしは此處で、今まで自分を胡麻化してゐた假面を剥ぎ捨てた。そしてわたしの眼の前に坐つてゐる一人の女の顔を見おろした。一人の女を、——さうだ、妻でも戀人でもないところの一人の女の顔を。

すると、ちやぶ臺の端をつかんだ彼女の指の先がかすかに顫へだした。

「ぢやあ、あなたの心の中には、わたしに對する愛情はほんのちよつぴりとも残つてゐないのね、そして、あなたは未だわたしを憎んでゐるのね？」

「——さうだ、すくなくとも、今までおれたちが家庭の中で大事に育ててきたやうな小さな愛情はね、しかし、おれはこんなにお前を愛してゐるぢやないか、それはお前を憎んでゐるといふことと同じことさ——お前がおれに小さな愛情を求めるとは、やつとのことで金網を喰ひやぶつて飛んでいつた小鳥の前に同じ鳥籠を置いてもう一度この中へはひれといふやうなものさ、未知の荒漠に向つて羽をひろげた小鳥の姿が、とりも直さず未知の悲劇に向つて突進するおれの姿だ、——おれは多分、不幸になるだらうよ、だが、あの鳥籠の中でお伽噺のやうな痴話喧嘩のテーマをひねくりかへしてゐる時期はもう疾くに過ぎ去つてゐるんだからな。」

彼女の顔は見る見るうちに曇つてきた。話が途切れた、窓の下を流れてゐる川波の音がどつとわたしの幻想の中に迫つてきた。立ちあがつて障子をあげると、雨氣を帯びた山の緑に雷燈の火影がうつつてゐる。流れの上には夕靄が流れ、すぐ間近にある大きな岩は艶やかにしめつてゐた。だがそのなめらかな岩肌にごびりついた苔が波を浴びるごとにかすかにゆれてゐるのを、わたしはもどかしい氣持で眺めた。——

わたしは、しかし、部屋の中で妻のすすり泣く聲を聞くと慌てて障子をしめた。彼女は何時の間にか壁の方を向いて、わたしに背を向けて坐つてゐた。すると、肩から下の丸く屈んだうしろ姿が、不意にわたしの心に無気味な愛情を喚び起したのである。

「ねえ、おい——如何したんだ、泣くことなんか少しもないぢやないか！」

わたしは彼女のうしろへにじり寄つた。泣きじやつくりをするごとにびくびく動いてゐる瘦せた肩の感觸は妙にとげとげしく冷たかつた。力を加へたら今にもほきほきと折れてしまひさうだつた。

「——何でもないわ、よくわかるのよ、でも考へると悲しくなるの。文學なんかやつてゐたつてわたしはやつぱりたゞの女なのよ。」

きれぎれの聲が一つ一つ鋭い實感をもつて吸盤のやうにわたしの心を吸ひつけた。彼女は、しかし、急にわたしの顔を見上げながら低い聲で言つた。——「ねえ、あなた、わたしたちの生活はほんたうにもう終つてしまつたの？」

「さうだ、——おれたちの生活は終つたのさ。だが、終つたといふことは始まりだといふことなのだ。ほんたうの生活はこれから始まるのだ。それに。」と、わたしは言葉の調子を變へて自分の心に呼びかけるやうに言つた。

「どつちみち、もう此處まで来てしまつてゐるんだからね。勇を鼓して前へ進むのだ！」

「でも」と、彼女はわたしの肩に凭れかゝりながら、

「——わたし、これからひとりきりで暮してゆけるかしら、何だか心の中心がなくなつて倒れさうな気がするのよ。」

「だから、そんな氣持になつちやいけない、おれたちは今、斷崖の上に片足だけで立つてゐるやうなものだからな、——かういふときにはうしろを振返つちやいけない、前を見るのだ、前を……」

だが、しかし、事實倒れさうになつてゐるのは彼女よりもむしろ、わたし自身の方だつた。激情ともつかず、執着ともつかぬ哀憐の思ひが烈しくわたしの胸の中にどよめきかへした。一瞬間、彼女とわたしとの心の距離がぐつと引きましたつた。

「——ねえ、あなた、わたし、これからどうなるかわからないのよ。」

「どうなるかつて、——そんなことを心配しなかつて今にお前の道がひらけてくるよ。」

「わたしの道が——でも、あなたは前にかう言つたことがあるぢやないの、お前のやうな性格の女には危険のすぐ間近にゐても危険だといふことわからないものだつて、——」

わたしは、彼女の身體を軽く壁の方へ押しつけた。ぢりぢりとよりかゝつてくる彼女の肩の重みのために、わたしの心は壓しつぶされてしまひさうな氣がしたからである。すると新しい想念がわたしの脳底に閃めいた。この女は多分、永久に男の壓迫（どのやうにつまらない男からでも）から逃れることが

できないであらう。そして、今に何處からか荒くれ男がやつてきて、この女を滅茶滅茶にしてしまふであらう。――

しかし、彼女はすぐわたしの方を向いてはだけた襟をかき合せながら言った。

「――もう、ほんたうに何でもないので。わたしバカなのね、これから自分の生活を建てなほすことにするわ、ほんたうに、これからはセンチメンタル嚴禁さ、――どんなことがあなたの身邊に起つてたつてわたし少しも驚かないことよ。だからね、一つのことだけ約束して下さいね。」

「一つのことゝいふのは？」

「――これから、あなたがどんな女に戀することがあつても、家庭的な生活だけはしないことさ、――ね、若しあなたが新しい家庭をつくるやうだつたら、それこそ前の生活の中の悪いものだけをうけ継ぐことになるのよ、さうなると、あなたはきつと滅びてしまふわ。」

わたしは黙つてうなづいて見せながらしかし、思はずうしろをふり向いた。自分の心の中を誰かこつそり覗いてゐるものがあるやうな気がしたからである。そのわたしの空々しい顔を彼女は悲しげな眼附で眺めながら囁くやうに言った。――「でも、さう言つたつてわからないわ、若しあなたが、その女をほんたうに好きになれば、あなたは女の力に負けてしまふ人ですもの、こんな約束をしたつて結局無駄になつてしまふのね。」

「だがね、――おれの心の中には、すつかり自分を惨めにする用意が出来てゐるんだから、さうなれば、おれはお前の聲の聞えないところまで逃げ出すよ。」

わたしは、ひそやかに迫ってくる彼女の情感を拂ひのけるために、わざと冗談口を敲くやうな調子で言つた。しかし、彼女の方が役者が一枚上だつた。といふのは、彼女はわたしの言葉の中からいくつかの漠然とした事實を感じてしまつたからである。それからちつとわたしの顔を見詰めてゐるが、急に穩かな語調でしゃべりだした。

「そんなこと何でもないわ、わたしは足が長いから何處までも追掛けるから、――だからね、サム公、何も彼も話しておしまひなさいよ、どんなひとなの、その女は？」

「どんなひとだつて、――おれは未だ何も話してゐるやしないぢやないか、だがね。」
と言ひかけて、わたしは思はず言葉を途切らせた。しかし、滅多にその手に乗つて堪るものか、――と、いふ氣持のために、わたしの心は反つて妙に固くなつてしまつた。

「ほんたうに、あなたの言ふとほりなのよ、事實は影なりさ、わたしたちは、はなればなれに暮してゐても、高い愛情の中で溶け合ふことができるのよ、だから、わたしもこれから方々へ行つて好きな男を探してくるのよ、お互ひに浮氣者のくせに相手の心を縛り合ふなんていけないことなのね、だから何も彼も話しておしまひなさいよ。」

尾崎士郎

彼女は愉快さうに笑ひだした。だが、彼女の感情の方向が急轉したのでわたしの遠近法はまったく狂つてしまつた。

「ぢやあ言はう、——そのことに觸れなければ、おれが此處へやつてきた理由の大半は消えてしまふわけだからね、その女はね……」と、わたしは何時の間にかたじたじとなつて土俵際に押されてゆく自分の心をはつきり意識しながら、しかし、今こそ安らかな氣持でうちあけることができるぞ、——といふ氣持になつた。すると、不意に彼女が、まるで新しい發作でも起つたやうにわたしの前に兩手をひろげた。

「駄目よ、駄目よ、——やつぱり言はない方がいゝわ、結局わたし何も知らない方がいゝのよ、だからあなたもわたしに知らせちゃ駄目よ。」

わたしは此處まで来て、到頭、片足を土俵のそとに踏みだしてしまつた。彼女は最早、完全に數分間の弱々しさをとび越えてゐた。何か一つの幻想の中に心を委ねてゐるやうであつた。いや、その幻想の中で自分の心のほがらかさを樂しんでゐるやうにさへ見えた。

「——わたしたちの生活は今によくなるわ、M村の家はわたしたちの戀愛の記念塔としてとつて置かうぢやないの、あれは、もうわたしが貰つたんだから、すばらしい家にするわ、でも、わたし、どんなに好きな男が出来たつて、あなたのやうにへまな眞似はしないことよ。」

彼女の眼には、かすかな哀愁の翳も残つてゐなかつた。わたしの心にはもはや次の勝負を試みる勇氣はなかつた。何故かといつて、一度過去の渦巻の中へまきこまれたわたしの感情は、やつと新しい波の上へうかびあがつたのだから。

夜が更けてゐた。わたしたちは白い蚊帳の中に蒲團をならべて眠つた。ときどき眼を醒まして明るい會話——わたしたちの將來について、文學の問題について、それから、決して彼女にヒステリーの發作を起させないですむところのさまざまな話題について、——を續けながら。

二日目の午後、わたしは彼女と、三鳥驛でわかれた。汽車が動き出したとき、かういふ感情の中でこの女をふたゝび見ることはないであらうといふ氣持のために、わたしの心は一瞬間、離れがたい氣持に囚はれた。わたしは窓から首を突き出して、ブラットホームに立つてゐる彼女の顔を見た。彼女の顔は、しかし無心にわたしに向つて笑ひかけた。強烈な陽ざしを浴びてその顔は深い幻想の中に牙えかへつてゐた。汽車が進むにつれて、彼女の姿は小さくなつたが、しかし、わたしの胸に落ちた彼女の影は次第に大きくひろがつてきた。さて——おれは今から何處へ行くのか？

——言ふまでもなく新しい不幸の中へ！

心の中で一つの聲が答へた。だが、その聲は、皮のゆるんだ太鼓をうつやうに力のない不快な響をつくつてわたしの心の中へ跳ね返つてきた。その問答は、しかし、汽車の進行につれて、幾度びとなく繰返された。繰返されるごとにわたしの心は過去の回想の中へ強い力でひき戻されながら。

日暮れがただだつた。やつと汽車が横濱へ着いたとき、わたしはもう一度はつきりと彼女への心の距離をたしかめてみた。さうすることによつて少しづつ新しい勇氣を奮ひ起さうとしたが、しかし駄目だつた。ちやうど、戦線の間近まで追ひ立てられた臆病な兵卒が否應なしに彼の敵に向つて小銃の照準を定めるやうに、新しい未來に向つて心の構へを立て直さうとしたが、兩足はわなわなと顫へて今にも倒れさうだつた。それにわたしの心臓は回想の重みのために押し潰されさうな氣がした。

わたしは最早自分に對してかすかな誇を感じることができなかつた。しかし、何よりもこの落着きのない氣持をまぎらはすことが必要だつたので、わたしは、わざと省線のホームの方へおりずに途中下車をしてしまつた。しかし、改札口を通りぬけて待合室へはひると一層悪いことが起つた。といふのは、ふと入口に近いベンチに、三十近い一人の女がちつと入口の方を見詰めて腰かけてゐたが、しかし、そこへ請負師風の髭の生えた男がはひつてくると彼女は慌てゝ立ちあがつた。やがて彼等はわたしのすぐ隣りの空席に腰をおろした。新しい發車時間が來ることに待合室に集つた人の數はぢりぢりと減つてゆき、入り替り立ち替りに新しい顔があらはれたが、ほとんど二三十分の間、二人は黙つて顔を見合せた。

まゝ物を言はなかつた。わたしの心はすぐに彼等の方へひきつけられた。彼等の顔は何か深い感情の中を言ふべき言葉を探してゐるやうに見えたから、女はわたしの方に背を向けてゐたので、わたしは男の顔を見ることが出來ただけであつたが、しかし、彼の表情が苛立たしく變ることに、女の心の動きがすぐわたしの頭にうつつてきた。すると、この二人は何であらう、といふ興味が烈しくわたしの胸に來た。答へは簡單だつた。——以前は夫婦か、それでなければ、それに似たやうな關係に置かれたことのある人たちだ。その想念は、しかし、わたしの心をすぐに彼等の運命に結びつけてしまつた。二人の年配から察すると彼等は十年あまり同棲生活を續けて來たにちがひない。如何して彼等はわかれたのか。勿論、ありきたりの痴情沙汰が原因で。だから、いふまでもなく少しづつの憎愛と未練とを残して。そして、女が呼び出しをかけたのだ。男は何のためにやつてきたのか。勿論、わかれた妻の新しい魅力をさぐるために。

わたしの頭の中には二人の幻像が異常な速度で動きはじめた。そのとき、ぢつと、女の顔を睨んでゐた男の眼が急に險惡な色を帯びて輝きだした。(過去の記憶の中でこの男は女を憎みはじめたのだ)しかし、彼は一つの感情をぢつとこらへてゐるやうに見えた。そして、不意に吐き出すやうな調子で、(それはかういふ種類の男が他人を憫殺するときに用ふるあの一種獨特の上品さで)言つた。

「——おい、よくも、そんなみつともない恰好をしてやつてきたな！」

すると、女が早口に何かしやべつたやうだつた。彼女の言葉はわたしにはよく聞きとれなかつたが、しかし、男の顔にうかんだ表情の變化と、女のいきり立つた調子によつてわたしはすぐに彼女の言葉を想像することができた。……「へん、よくもそんな口がきけたもんだ、自分の昔の女房が、こんなみつともない恰好をしてゐるのがお前には恥かしくないのか……」

男はもう一度ちろちろと女の風體を見ながら、女は髪だけは新しい丸髷に結つてゐたがしかしよれよれの浴衣の上に伊達巻のやうな帯をしめてゐた。何か言はうとしたが。前歯で一度くつと下唇を噛みしめてから、わざと女の顔を見ないで呶鳴るやうに言つた。

「何だつて、——未だ貴様の根性骨はなほらねえんだな、よし、もう一度この拳骨を頭に喰はしてやらうか！」

すると女がすぐに低い聲で、しかし喚きたてるやうに喰つてかゝつたが、男は、そのとき、待合室の中の人の眼がことごとく自分に向けられてゐるのを知ると、ある氣恥かしさのために、つとめて冷靜を装ひながら。

「おい、おい——あまり大きな口は利かねえ方がいゝぞ、お前がおれのうちを出てからの行狀はすつかりわかつてゐるんだからな。」

「——そりやあ、わたしだつてひとりで暮さなきやあならないんだからね。」

ひとりで暮すつて、——へん、えらいもんだね、おれのうちを出て——さあ、それから、言つてやらうか、みんな。」

女の肩がかすかに顫へるのが見えた。それから彼女は前屈みになつて、泣きぢやつくりをおさへるために急いでハンカチで顔を掩つた。そのしほらしのために男はますます冷酷な調子になつて、——

「まつたくえらいもんだ、淫賣屋に奉公してさ、——しかしね、そのときと比べたら今は大した出世さ、何しろ横須賀の不見轉藝妓ときてるからね。」

小氣味良ささうに笑つたが、しかし、彼の顔はくすんだやうに蒼ざめて、眼だけが底氣味わるく光つてゐた。やはり、わたしの想像どほりだつたのだ。しかし、この二人の關係が現實の上にはつきりしたかたちをとつてくるにつれて、わたしは何時の間にか、この男の冷情を憎みはじめた。昔の女房の不幸をこのやうな賤しい言葉で輕蔑しようとしてゐる男の心を。

女は顔をあげた。彼女の肩が軽くわたしの肘にさはつたので、わたしはすんでのことで女の背中を撫でてしまふところだつたが、その瞬間、男の顔をかすめた烈しい苦悶が不意にわたしの心に新しい感傷を呼び起した。

「それぢやあ……」と、女が、かすれるやうな低い聲で言つた。——「あなたはやつぱりわたしのことを思つてゐてくれたのね。」

わたしは胸がこみあげてきた。(このやうに愛すべき言葉があらうか)しかし、女の最後の執着を男は賤しい、せうら笑ひをもつて素早く弾き返した。

「へん、何だつて？」

女は、その言葉を聞くと、ぢつと眼を瞑ちた。最早、自分の姿が衆人の視線によつてかこまれてゐることを意識しなかつた。わたしは涙が彼女の手の甲の上、——それから膝の上に着るのを見た。彼女は噛みしめた唇の間に洩れるときれときれの聲でももつれかゝるやうに言った。

「——ねえ、わたし、こんな苦勞をしてきたのも、——みんなもう一度あんたといつしよになりたいからなんだよ。」

「ほう、——大した度胸だね、しかし、さういふわけにもゆくめえよ、まあ、お前さんもせいぜい稼業に精を出すことだね、これから十年も経つてお前さんが符合でも出すやうになつたら、おれもお客になつて一ぺん位は出かけるからね——」

わたしは彼の言葉をしまひまで聞くことができなかつた。よろけさうになる兩足を踏みしめてわたしは待合室を出た。すると、數時間前にわかれてきたばかりの妻の姿が沁みるやうに頭の中にひろがつてきた。おれは何人をも不幸にしてはならぬのだ。——と、わたしは心に思つた。「さうだ、何人をも。」しかし、それにもかゝらず何故お前は人生の不幸の中へ突入しようとするのだ? 「おれは新しい事實を

創造しなければならぬからだ。」新しい事實を。さうだ。——「おれは影を追つてはならぬ。事實にぶつかるのだ。事實に！」

二ヶ月あまり、わたしの生活は、ちやうど逆潮に乗りあげた船のやうに一つの方向に向つて流れはじめた。過去の岸邊は遠く小さくわたしの背後に消えていつた。幾度びとなくわたしは逆潮のそとに躍り出ようと試みたがその努力は結局、わたしを疲勞させることに終つてしまつた。かういふときにはちつとしてゐるにかぎる。——わたしはもがくことをやめてこの宿命的な事實の中に身をまかせた。良榮丸といふ漁船が潮流のためにアメリカまで押流されていつたといふ新聞記事を読んだとき、わたしは心に呟いた。——「おれは良榮丸だ。だから、どつちみち何處かの岸に乗りあげるだらう！」

夏の夜、わたしは一人の少女と深い雑木林にかこまれた淋しい道を歩いてゐた。わたしは女にとつて、彼女のロマンチックな空想を充たすべき唯一の戀人であつた。だが、しかしわたしにとつては、女はやうやく熟しかけた果物であつた。それでなければ新しく伸びはじめた若木であつた。彼女の若さと健康とがわたしの情感を咬り立てた。樹立から洩れる月の光が、白い路上にわたしたちの影をうつし出した。この女には今から人生が始まらうとしてゐるのだ。とわたしは思つた。——それにもかゝらず、

おのれの青春はもう終りに近づかうとしてゐるではないか。すると、一瞬間、わたしの心は青春を空費したといふ悔恨に惱まされた。細い坂道の前まで来たとき、わたしは立ちどまつて女の肩に両手をかけた。彼女は慌て、胸をそらし、わたしから逃れようとしたが、しかし、そのとき、彼女の首筋に纏ひついたわたしの両腕は彼女の顔を力強くわたしの胸にひきよせてゐた。わたしは彼女の頬に接吻した。それから唇に。――

彼女はぐつたりとわたしの身體にもたれかゝつて、それから頭へ聲で呟いた。――「これから如何なるの？」

「如何なるかつて、――そんなことがおれにだつてわかるものか！」

しかし、逆潮は非常な速さでわたしたちを押流していった。十日と経たないうちにわたしたちの戀愛はロマンスではなくてアフエイア（事件）に變つてしまつたのだから。わたしが抱きしめたものは若木のやうな彼女の肉體ではなくて重苦しい生活の枯木ではないか、といふ疑ひがわたしの心に不幸の豫感を與へたのだ。だが、おれは決してこの少女を不幸にしてはならぬ、とわたしは思った。それにもかゝらず、わたしは自分の手をもつて彼女のために一つの小さな牢獄をうち建てようとしてゐるではないか。その中にわたしの新しい空想を幽閉するために。

しかし、M村にあるわたしの家は航路を失つた難破船のやうに暗礁に乗りあげてしまつた。その中に

唯ひとりだけ残されて助けを求めてゐる老母のために、わたしは時々歸つていつたが、しかし、歸るごとにわたしは深い回想の波を浴びてづぶ濡れになつた。といふのは、その家の何處にも妻の記憶の沁みついてゐないところはなかつたから。壊れかゝつた門の前に土を小さくもりあげた芝生の中には二本の紅葉の木がならんでゐた。それは妻と二人でひこばえのときから育てたものだつた。二三十本あつたひこばえの中でやつと二本だけが残つたのである。それを結婚記念だといつて日當りのいゝ芝生の中へ植替へたのは六年前だつたが、しかしその木は同じやうに育つて、今はわたしの脊丈ほどにまで伸びてゐるではないか。夜、石疊を敷いた坂道を足音を忍ばせながら歸つてくると、眞つ暗な家の中に母の寝てゐる部屋の窓だけが明るく輝いて、荒れ果てた庭の上に椎の木の影がゆれてゐる。

すると、この家が出来かゝつた頃の二人の生活が鈍い燈火に照された影畫のやうに現はれてくるのだ。そして、六年間の過去が幻覺のごとくわたしの頭の中をすべりぬける。地ならしが終り、土臺石が据ゑられて、もつこを擔いだ土工が狭い坂道を往つたり來たりする頃から、しかし、わたしと妻との間には奇妙な感情のこだまりが現はれた。今は、それすらも一つの幻覺に過ぎないとしても、二人の致命的な争ひの中に、この小さい家が、わたしたちの戀愛を象徴するために出来あがつたといふことは何といふ皮肉であらう。――

秋に入つて妻はY温泉から歸つてきた。そして、海岸のアバートの一室に入つて、彼女の新しい雰囲気をつくりはじめた。すると新しい事實は矢継早にあらはれてきた。ある雨の夜であつた。わたしが幾日ぶりかでM村の家へ歸つてゆくと、上の家にも下の家にも電燈の光が青い窓のカーテンに沁みてゐた。わたしは思はず門の前まで来て立ちどまつた。すると下の家の六疊の間のあけ放たれた窓の間から五六人の男女の談笑する聲が聞えた。おそろおそろ近づいて覗いてみると大きな机をかこんで麻雀がはじまつてゐるところだつた。正面に坐つてゐた妻は、小聲で鼻唄をうたひながらずつと眼の前にならんだ牌を眺めてゐたが、しかし、ふと、わたしの顔を見ると、落ちついた聲で、

「おはひりなさいよ。」
と言つた。

彼女は何時の間にか斷髪にしてゐるのであつた。そのせゐか、前よりもずつと若く見えたが、しかし、それにもかゝはらず、ぢつと彼女の顔を見てゐるとまるで別の人のやうな氣がした。

「——わたし今日から此處へ陣どることにしたのよ。上の家はね、Kさんに貸してあげたの。此處でがんばつて一仕事するつもりなのよ。今夜は引越し祝ひなんだから、あなたも一杯おあがりなさいよ。」

彼女は机のかけにあつたコップをとりあげてわたしの手にわたした。そして、いそいでビールを注ぎ

ながら、麻雀に夢中になつてゐる若い人たちの上に軽い流し眼を呉れてから、

「——如何？ これはみんなわたしの燕なのよ、ところが、ほんたうはどれもこれも、せいぜい鳥（からす）といふところなんだからね。」

「——でも、このごろは酒が飲めるんだね？」

「ちえッ！」と、小さく舌を鳴らしてから、彼女は怨々たる思ひをこめてぢつとわたしの顔を見た。——

「さうよ、何しろ亭主に捨てられたんだからね、せめて酒でも飲まなくっちゃあ。」

冗談のやうな調子でかう言つてから、しかしすぐに若い人たちの笑ひ聲に合せて、ほがらかに笑ひだした。

麻雀の勝負が進行してゐる間、わたしは自分の古い書齋の中をもう一度見たいといふ衝動に驅られたので、そつと席をはづして上の家へあがつていつた。しかし、扉をあけると部屋の中はすつかり新しくなつてゐた。かつて、古雑誌が亂雑に積み重ねてあつた正面の壁の前には新しい洋書で埋められた書架が整然とならび、かつて、わたしの一閑張りの古机（それは四年間同じ位置から動かされなかつた）が置いてあつた場所には、頑丈なテーブルが据ゑられ、その横の小さな丸いテーブルのぐるりには眼新しい

五六脚の椅子が訪客を迎へるためにならんでゐた。以前と同じものは唯、リノリウムの上に敷かれた古い絨毯だけだったが、しかし、天井からくる明るい電燈の光がその茶色の敷物の上に、かつてわたしがこぼしたインクの汚點をうきあがらせてゐるほかには、わたしの回想を喚び起すものは一つもなかつた。すべてのものが新しく變つてしまつたのだ。それはちやうど古い壁の上に落書された文字のあとが新しい壁によつて塗りつぶされてしまつたやうに、この部屋の中に残された過去の事實はことごとくわたしの眼の前から消え失せた。一瞬間、わたしの心は深い感慨に捕へられたが、しかし、すぐにわたしは主人のゐない部屋の中へはひつていつた。そしてわざと客のために用意された椅子の上には腰かけないで絨毯の上に胡坐をかいた。すると、この部屋の中で窓をとざして暮してゐた六年間の生活が長く影を曳いて、きれぎれにわたしの頭の中を通りすぎた。わたしはその記憶の一つ一つを噛みしめるやうに味ひながら、しかし何時の間にか過去の感情の整理をはじめたのである。わたしは自分に所屬する荷物だけをまとめて引越の馬車に積みあげるために、堆高く散らばつてゐる過去のおもひの中から自分に必要なものだけを選びつけた。

それから、立ちあがつて、部屋の中をぐるぐる歩き廻つた。今はわたしの心の中にはかすかな感傷の翳すらも残つてゐなかつた。今こそわたしはすつばだかになつて新しい人生の中へ躍りこむときが來たのだ、と思つた。おれは他人を不幸にすることをおそれてはならぬ。だから、新しい悲慘は多分これ

から續々とあらはれるであらう。わたしは花道の前に立つて、やがてひらかれる新しい舞臺に躍り出ようとしてゐる役者のやうに大きく胸を張つた。すると、一つの聲がわたしの心の底からのぼつてきた。
——「しつかりしろ！ 悲劇はこれからだ！」
そのとき、下の家からは麻雀の牌を交ぜ合す賑やかな音が、ゆるやかな諧調をもつてひびいてきた。

ある港にて

調和

港に船がつくことに一組か二組の観光團がきまつてやつてきます。

往來の前の川ぶちに子供をつれた漁師らしい男がひとり掻卷のやうな襦袢を着てぼんやり懐手をして立ち、通りすぎる観光團の顔を一一つ眺めてゐます。観光團が行つてしまふと、その男は小さい橋をわたつて川向うにある自分の家へ歸りはじめるのです。

両手を頭のうしろで組み合せて、

「關の五本松……」

と、突拍子もない大きい聲で唄ひ出したのです。すると、あとからよちよちとついていつた子供が身體を大きくゆすぶりながら、

「ドッコイシヨ」

と、馴れた聲で調子をとります。

「一本切りや四本」

すると、子供が足を前に踏みだして踊るやうな恰好をしながら、

「ドッコイシヨ」

とやります。

おやぢは見向きもしないで唄ひつゞけながら歩く。子供は親父の聲の途切れるのを俟つては「ドッコイシヨ」と相の手を入れてゆくのです。かうしてゆつくりゆつくりと歩きながら、親子は家の中へはひつていつてしまひました。

やきもち

橋から右に三軒目の家で風呂が湧いたと云つて呼びにきました。その家ではこの四五日風呂が立たなかつたのです。となりの家の女房が毎日風呂をもらひにくるので、その家の女房がやきもちをやいたといふので、おやぢが怒つてかまどをこはしてしまつたといふのです。よほど疳癩もちの男らしい。わたしは一ぺんだけその男の顔を見たことがある。だぶだぶのズボンをはいて鳥打帽子をあみだにかぶつてゐました。悠揚としたい顔をしてゐる。風呂桶をこはしたりしさうではない。

「風呂はなほりましたか？」

氣合術

わたしはうつかり、かう言つてしまつたのです。すると、呼びにきてくれた女房は長閑な聲で、
 「はあ、——ちよつと釜がいたみやしたけえの、ぢやが、もうなほりやした。」
 と言つてのけました。二三日前、自分が怒つてしやべつてゐたことをまつたく忘れてしまつたやうで
 す。

同じ日に書留で送つた原稿が二通とも届いてゐないらしいので、郵便局へ調べてもらひにゆきました。
 何時も事務机によりかゝつてゐるおぢいさんの局長にそのはなしをすると、すばらしく自信にみちた態
 度で、

「そんなことはありません！」

と、氣合をかけるやうに儼然として言つてのけました。わたしは頭をどやしつけられたやうな氣がし
 たのです。もう何を訊く氣も起らないほど。なるほど、そんなことはありやせん。わたしはこの局長の
 言葉だけで十分満足しました。若しわたしの戀人が、ほかに女があるといふやうなことでわたしを疑つ
 たらわたしはかういふあんばいに儼然として言つてやらうと思ひながら。——「そんなことはありやせ
 ん！」

人間

原稿は到頭見つからなかつたが、しかし、「そんなことはありやせん。」にきまつてゐます。

日ぐれがたになると白い海の色が蒼黒くなり、遠い島には紫の霞がかゝる。だが、時が経つごとに
 色の配合がだんだん反對になつてきます。残照にいろどられた空の色は非常な速度でほかされたやうな
 淺黄色にそまり、きれぎれに浮いてゐた雲が急に動かなくなりました。枯葦にかこまれた海のほとりの
 堤防を人が歩いてゆきます。頭が黒い點のやうになつて見えるだけだけれど、どうしてこんなにはつき
 り人間だといふことがわかるのだらう。不思議な氣がしてならぬのです。

ピ
ス
ト
ル

これは一人の朝鮮の革命少年についての話である。彼は十五歳であつたから今若し生きてゐるとしたら二十を過ぎた立派な男になつてゐるであらう。そのころ日本のソシアリストの集團であつたB社に彼は給仕として働いてゐたのである。

「女君！」

と呼ぶと彼は返辭をするかほりに、にやりと笑つた。その笑ひ顔が非常に素直で美しかった。女佐健といふ名前も、頭を坊主刈にしたまるまるとふとつてゐる頬の赤い青年に相應はしかつた。女佐健をB社へつれてきたのは同志の北村であつた。北村は大阪驛の待合室でこの少年と知り合ひになつたのだ。彼は切符賣口に自分とならんで立つてゐる一人の少年が、東京までの切符代を聞いて驛員がそれに答へると、手に握りしめてゐた小さい蓋口のふたをあけてしきりに金の勘定をしてゐたがやがて悄然として列を離れてゆくしる姿を黙つて見送ることができなくなつたのだ。そこで、北村は少年を呼びとめた。

「おい、君——切符を買つてやらうか？」

北村は笑ひながら叫んだ。(彼はかういふ言ひかたをする男であつた。)すると、少年は、振返つてしばらくづつとしてゐたが、やがてきつぱりと、

「要らない。」

と言つた。その言葉は北村にとつては意外であつた。だが、この瞬間、彼はこの少年がすっかり好きになつたのだ。

「どうしてさ？」

すると、少年は昂然として、

「歩いてゆきます。」

と答へた。それで、北村はますますこの少年が好きになつた。そのことを北村は歸つてきてから繰返して話した。だが私たちは實物の女佐健がB社の事務室へ現はれるまで、北村の感激に調子を合せるわけにゆかなかつた。何故かといつて、北村は氣まぐれなものの喰ひの常習犯だつたし、そしてこの話も結局彼のさういふ性格に對する私たちの解釋に一つの反證を與へるものにすぎなかつたから。しかし、ほんもの、女佐健は私たちのさういふ疑ひを片端しから打ちくだいていつた。最初は彼を備ひ入れることにすらもかすかな躊躇を感じてゐるらしく見えた年長者の大炊までが、

「これは近ごろにない掘り出し物だ。」

といつて感嘆したほどだった。この少年を一眼でも見たら誰でもそれを不思議に思はなかつたにちがひない。玄佐健は西大久保にある北村の家に同居してゐてそこから毎朝通つてきてゐた。斷つて置くが私もB社の青年事務員の一人であつた。そのころ、郷里にゐた私の兄がピストルで自殺したのでその葬式を済まして歸つたばかりのところであつた。郷里の家を整理するために次兄が一人踏みとどまつてゐた。そこで私は一先づ先きに上京して、やがて一家をあげてやつてくる彼を迎へるために新しい借家を探さなければならなかつた。さういふ忙しさのために四五日社を休んでゐたある日、久しぶりでひよつこり出かけてゆくと、朝が早かつたので二階の事務室には北村が一人きり火鉢の前にしゃがんで新聞を讀んでゐた。

「やあ——君が来るのを待つてゐたんだ。」

私の顔を見るとすぐにさう言つて叫びかけた。

「あのね、君の兄さんが自殺したピストルね。どうだらう、あれを僕に呉れないかしら？」

私は前にピストルのことを彼に話したことがあつた。それは舊式の六連發銃であつたが兄が自殺した弾丸のケースが環の中に残つたまゝどうしても抜けなかつた。家の者はみな薄氣味わるがつて用筆筒の抽出しの奥深くに藏ひこんでゐたが、私は上京するとき誰にも話さないでこつそりそれを持つてきたのであつた。

「うん。上げよう。」

私はすぐかう言つた。言つてしまつてから一寸惜しい氣がしたが、調子に乗りすぎて元氣のいゝ返辭をしてしまつたあとで、北村のうれしさうな顔を見ると、やつぱりさう言つてよかつたと思つた。次の日、私はピストルを持つてB社へ出掛けた。寒い日は外は曇が降つてゐた。大火鉢をかこんで腰かけてゐた社員たちは私がピストルをポケットからとりだして机の上へ置くと一齊に立ちあがつて机のぐるりに集まつてきた。

「これがぬけないんだ。どうしてもぬけないんだ。」

私はかう言ひながら六つの穴を持つた環をはづしてそれを掌の上に置いた。六つの穴の一つには兄の撃つた弾丸のケースが残つてゐる。環をひつくりかへすと、ケースの底にはうすく緑青がふいてゐた。北村はそれを私の手からうけとると、太い火箸をとりあげて、穴の中へ突き刺し、環を腹にあてがつて力一ぱい火箸を押しこみはじめたがケースは抜けなかつた。

「怨念が祟つてゐるのかも知れないな。」

大炊が相好を崩して笑ひながら、こんどは環を机の端に置いて、鐵の文鎮で火箸の頭を敲きはじめた。しかし同じことだつた。火箸の先きのとがつたところに觸れてゐる部分だけケースの底にかすかな窪みが出来たゞけだつた。大炊は苦笑ひをしてそのまゝ自分の机の方へ行つてしまつた。私はその夜、雪の

道を一人で下宿の方へ歸りながら、あのピストルの中に死んでしまつた兄の運命の翳がまつはりついてゐるといふ感じを記憶の中に新しく呼び起した。それは何かしら呪はしいものゝ象徴であるといふ氣持を避けることができなかった。その次の日の朝、B社の二階で北村は私の顔を見るとすぐに、

「舊式のピストルだけに音が大きいね。」

と言つた。彼の顔はかう言ひながらも至極満足さうだつた。

そのとき玄佐健がそばから、

「音が大きいので眼が醒めましたよ。」

と言つた。頓狂な調子だつたので私と北村とは聲を揃へて笑つた。玄佐健は學生服のやうな黒い羅紗の詰襟服を着てゐた。北村が柳原から買つてきてやつたものだつた。しかし、一月と経たないうちに玄佐健に對する社員の態度は少しづつ變りかけた。清純な青年だつた玄佐健は次第に傲慢で狡猾な印象を與へはじめたのだ。その原因をつくつた者は北村だつた。飽きつぽい北村の性分としては仕方ないことであつたが、前に感じた好意が大きいだけに玄佐健に對する彼の悪罵は辛辣を極めた。さういふ氣持がひとりで玄佐健に反響していつたことは言ふまでもない。

「あいつは近ごろ色氣が出てゐるんだ。二三日前も、僕はいつがこつそりラブ・レターを書いてゐるのを見た——それにおどろいた嘘つきでね、わかりきつたことを平氣で白ばつくれるんだ。」

北村は一つ一つ例證を擧げてそのことを説明した。さういふときの北村が私には非常に賤しく見えた。しかし、そのために玄佐健の態度が露骨に變つてきたことも事實だつた。彼の反抗は唯、北村に對してだけではなしにB社全體に向つて爲されてゐるやうに見えてきた。彼の表情からは青年らしい快活さが消えてゆくのが一日ごとに目立つてきた。彼の出勤時間はおくれるし、命ぜられた仕事に對しても少しの熱意を見せようとしなくなつた。そして彼はひとりぼつちになることによつてますます傲慢になつてゆくやうに見えた。

あるとき大炊が北村に言つた。

「こまるね。朝鮮の革命家になる前に僕等は忠實な給仕になることを要求してゐるんだからね——われわれはB社の奴隷としてより以外にはあの少年を必要としないんだから。」

殊更冷酷を装つた大炊のさういふ言葉の底には玄佐健に對してよりもむしろ世話役の北村に對する批難が含まれてゐた。何故かと云つて、彼は北村の氣まぐれな飽きつぽさのために、だんだん根性のひねくれてくる朝鮮の革命青年に多分の同情を持つてゐたし、それに最初から玄佐健の心にB社に對するあの意味の侮蔑感を植ゑつけた者が北村であることは疑ふべくもなかつたから。北村はB社が唯ソシアリストの集團であるといふだけで積極的に働きかける實行力を持つてゐないといふこと、そして殊に名實共にB社の首脳である大炊が全く運動に對する情熱を失つてゐるといふことに一つの憤りを感じてゐる。

た。彼のさういふ言葉のきれぎれが玄佐健の心に響かない筈は無い。北村はそれほど玄佐健に對して氣まぐれな尊敬を拂つてゐたのだから——

しかし、ある朝、前の日から續いてゐた仕事のために、定刻よりも早く出社した大炊は彼の机の上に一枚の紙きれが載せてあるのを見つけた。それにはかういふ文字が書いてあつた。

「B社諸君。左様なら、ぼくは朝鮮へ歸る。日本の馬鹿な社會主義者よ。ぼくは大きくなつたらきつと日本へ征めてくる。しかし、君たちの命だけは助けてあげる。」

私が出社したとき大炊とほかに二三人の社員がその紙きれをいぢりながら騒いでゐた。

「こんなことになるだらうと思つた。だが、一寸おもしろい奴だつたな。」

大炊は私の顔を見て愉快さうに笑つた。そこへ北村が荒々しく扉をあけてはひつてきた。はひつてくるとすぐに彼は大きい聲で叫んだ。

「玄が逃げていつたよ。ピストルを盗んで逃げていつたよ。」

北村は昂奮してゐた。彼の顔は晴ればれとして何か一つの素晴らしい事件に觸れた人のやうであつた。そして、それは全く素晴らしい事件にちがひなかつたのだから、北村は玄佐健の残した紙きれを手にとつてそれを聲高く讀み上げながら、うれしさうに眼を輝かした。この一つの事件のために玄佐健に對して持つてゐた反感は跡方もなく消えてしまつてゐるやうであつた。彼のかういふ變りかたは北村を

知つてゐる者には少しも不思議ではなかつた。だが、その日の午後、大炊は新しい訪問者があることにその紙きれを見せて笑つた。さういふゆとりのある自分の態度にむしろ一つの誇りを感じてゐるかのやうに。

「しかし、ピストルだけは惜しかつたな。未だ五六發残つてゐた筈だからね。あいつもいづれ朝鮮に歸るまでに何處かでつかまるだらうが——」

北村はどうせ玄佐健がつかまつてピストルが没收せられてしまふ程なら、いつそのこと搜索願ひを出した方がよくなるかといふ氣持になつてゐるらしかつた。然し玄佐健のゐなくなつたB社の事務室は妙に空虚な感じがあつた。彼がB社にゐたのは二ヶ月あまりであつたが、この薄暗い未枯れた室の中にこの少年の若々しい顔だけが何かしら新しい情熱をかき立てゝゐたやうな氣がするのであつた。すると私の幻想はひとりでにひろがつていつた。ピストルの運命が新しい不幸の豫想をかきたてた。私は兄が彼自身を撃ち殺した同じピストルの銃口が玄佐健の手によつて何者かに向けられてゐることを感じた。前の日の夜は雨が降つてゐた。その雨にぬかるんだ道を、あの黒羅紗の詰襟服に古い烏打帽子をかぶつた玄佐健の姿が東京驛の方角に向つて歩いてゆく姿を描きだされた。昂然と肩を張つて歩いてゆく彼のズボンのポケットの中には舊式の六連發銃がしつかりと押しこまれてゐる。兄の不幸な運命の鬚につままれて一つの小さな魂が地上に新しい悲惨の種を蒔くために彼自身の夢に向つて突進してゆく。

だ。私は何事か起りかけてゐるといふ不安の中に幾つとなく怪奇な情景を描きつゞけた。數年の後、私は今見失つてしまつたピストルの運命にふたゞびめぐり合ふことがあるかも知れない。あの古さびた銃口は一層黒くさびついて——しかし環の中の六つの穴の一つには兄の撃つた弾丸のケースが昔のまゝにへばりついてゐる。ピストルが長い年月の間に數人の人の手にわたることにケースの中にひそんでゐる兄の不幸な死の記憶は一つの祕密となつてとりのこされるであらう。さういふ小説的な空想は數ヶ月前に始めて兄の死顔の前に坐つたときの絶望的な呪はしい氣持を呼び戻した。その頃、兄の死因はまるでわからなかつたのだ。だが、最初彼が死を決したとき、ピストルを用ひようと思つてゐなかつたことだけは事實であつた。死ぬ二三日前の彼の日記を讀むと、多量のホルヒネを呻りその毒が今全身を廻りつゝあるといふやうなことが書いてあつた。それを書いた當座、たぶん彼はそのまゝ數時間のうちに死ぬであらうことを感じてゐたにちがひなかつた。私の頭には、父の代から、用筆筒の上の、古いがらくたの入れである支那鞆の隅に封じこまれて、長い間少しの手入れもされたことのなかつたピストルが瘦せた兄の手にちつとにぎりしめられてゐる情景が新しく想ひだされてきた——

二三日経つたが支佐健の消息はわからなかつた。

「やつぱりおれはピストルが惜しいから搜索願ひを出さう。」

ある朝、北村は、彼についてゐた尾行巡査をつれて近くにある警察署へ出かけていつた。その夜、赤坂の藝妓街の裏に住んでゐた森本といふ同志の家で露西亞革命の記念祭がひらかれた。私が夕飯をすまして森本の家へ出かけていつたときには入口はすつかり提灯をさげた制服巡査によつてかためられてゐた。森本の家は暗い坂の上にあつたので下から見上げると提灯のあかりが一層物々しく見えた。

二階には二十人あまりの人が胡坐をかいて坐つてゐた。薄暗い電燈の火かげの中に緊張した顔にとりまかれてゐる。演壇の上には北村が蒼い顔をして立つてゐた。彼は今言葉の一區切りが終つて、フラスコの水をコップに注ぎ入れてゐるところであつた。私は階段の入口に近いところにそつと腰をおろした。そのとき不意に一人の男が座席から立ちあがつた。だらりと下げた彼の兩腕は顫へてゐた。電燈の反射のために骨ばつた頬が痛々しく見えた。労働服を着た青年であつた。

「北村君に質問があるんです。あなたが議會政策の主張者であるといふ理由のために何故にテロリズムが輕蔑されなければならぬんです。」

演壇の上で肩をそびやかした北村が何か言ひかけようとしたとき、青年は慌てゝ身體を前にのめるやうにしなから、ほとんど衝動的に右手で自分の胸を敲いた。その芝居じみた身振りも非常に緊張した瞬間に行はれたので少しも不自然ではなかつた。彼は顫へ聲で叫びつゞけた。

「——あなたはテロリズムは遊戯であると言はれる。いや、遊戯であつてもいい。遊戯が何故わるいの

か。僕は僕の肺臓は二つながら腐つてゐるんだ。僕は生きてゐるうちに××の縮圖を示したいのだ。百の論理よりも僕には一發の彈丸をこめたピストルがほしいのだ。」

青年は咳きこむやうな口調で此處まで言つたが急に自らの感動におびえるものゝやうに聲をあげて泣きはじめた。しかし、この狂人ぢみた肺病の青年の言葉は會衆の漫罵の中に葬り去られてしまつた。その喧噪の中に警官の一隊が上つてきて記念祭は解散を命ぜられた。入り亂れた群集の怒號の中をくゞつて私は階段を下り、一人で外へ出た。かすかな興奮のために頭の中が妙にもやもやとしてゐた。私は何か非常に不快なものを見たやうな氣がした。あゝやつて聲を頼はして叫んでゐる肺病やみの青年の心に果してどれだけの至純な感激が宿つてゐるのであらうか。若し彼が、かりにテロリズムの實行者として街頭に現はれたとしても——私の頭にはこの瘦せ衰へた青年が群集の土足にかけられて苦しみがいてゐる姿がうかんだ——哀れでこそあれ何の美しさがあるものか。あの男は自分を今よりも以上に不幸にするだけのことだ。しかし、北村に向つて呼びかけた青年の言葉は鋭く私の記憶に沁みついてゐた。その一つ一つを思ひだすにつれて、私は彼の朽ちかゝつた肉體の中にひそんでゐる生々とした夢を感じた。何といふ慘たらしい矛盾であらう。彼が街頭に仆れるといふ空想の中に唯一つの望みと喜びとを持つてゐるとしたらそれは人間にとつて何といふ不幸であらう。

「百の論理よりも僕には一發の彈丸をこめたピストルがほしい。」

私は暗い坂を下りながら青年の口調を眞似て叫んでみた。だがその言葉は力なく空虚な闇の中に消えていつた。その瞬間、私の頭には不意に玄佐健の姿が生々とうかんできたのだ。彼の姿は晴れやかであつた。それは悲壯であるといふよりもむしろ滑稽に見えた。このピストルだにあらばと舊式の六連發銃をポケットの中ににぎりしめて回天の事業を夢みながら朝鮮へ歸つてゆく哀れな少年の姿は美しかつた。私は最早兄の死については考へなかつた。何故かといつてあの古ぼけた玩具のやうなピストルによつて兄が自殺してしまつたことも、そのピストルを盗んで逃げてゆく愛すべき革命家の滑稽な運命よりも以上に嚴肅なものだといふ氣がしなかつたから、星の暗い夜であつたが私は電車線路を突切つて半藏門の方へ通ずる廣い坂をのぼつていつた。静かな興奮のために私の心は軽くはずんできたのである。

犬と幻想

「ふく」が子供を二匹産んだ。二匹とも親に似て野良犬だ。私は二匹にそれぞれ名前をつけた。白ふちの方はフリッツ。赤毛の方はリッブ。

こんどは鬻を仕込まうとした。だが、それは全く徒勞に終つた。この二匹の野良犬の子は彼等を訓練しようとする人間の理智をまるでおそれてゐるやうに見えたから。

フリッツもリッブも少しづつ大きくなつてきた。フリッツには少しばかり潤達なところがあつたが、リッブはいぢけておぼおづしてゐた。彼は飼主をおそれるだけでなく「ふく」やフリッツまでもおそれてゐた。そのいぢげ方がやりきれなかつた。これは捨てしまふよりほかに仕方がないと思つた。だが捨てることを考へるのは一層やりきれなかつた。

うまいことがあつた。ある朝、見知らない紙屑屋が古新聞を買つたついでに仔犬を一匹くれないかと

言つた。

「番犬にするんですから。」

紙屑屋の親父は言つた。

「殺すんぢやあるまいね。」

「眞逆——」

それでも、やるとなると別れが惜まれた。

私はリッブを膝に抱きあげて二三次頬擦りをした。その紙屑屋はそれきり來なかつた。紙屑屋にも番犬が必要なんだらうか。私はときどきそんなことを考へた。

東京から二里近く離れてゐる、この郊外の村道は夜になると人通りがなかつた。その日東京へ出た私が村端れの停留場へ着いたのは夜十時を過ぎてゐた。人通りのない街道は霜に凍つき私の靴の音だけが高い反響を残した。

暗い道は、うねりくねつた坂によつて續いてゐた。立てつゞけに喫つてゐるバットの煙りが冷たい大氣の中に一つ、一つぶら下つたやうに動かなかつた。

道が二つに岐れるところへ來た。右の方には常夜燈が、その低い石垣のぐるりだけ淡い灯かけを落し

てゐるが、それだけに左の方の雑木林の中にある稻荷堂の闇は一層深くかきたてられてゐる。
私はふと立ちどまつた。何故立ちどまつたかわからなかつた。——常夜燈の灯が何時もよりは薄暗く
無氣味な色に見える。

誰かどゝあるな！ 稻荷堂の前でむくむく動いてゐるものがある。そのとき、私はたしかにうづくまつ
てゐる人の形を見たのだ。

母ぢやないかな！ どうしてそんな？ 今夜は少しどうかしてゐるなと思つた。だが道々私は母のこ
とを考へてきたのだ。母が病床からぬけだして此處へやつてくる。そんなことはない。それに母がこん
なところに稻荷堂のあることを知る筈がない。

今夜は頭がどうかしてゐる。私はまた歩きだした。道がゆき詰つて急な坂になつた。道の兩側には深
い繁みに向ひ合ひ、兩方から伸びた梢のために空からくる明るみが遮られてゐる。

私は煙草を喫ひ續けた。この道が何時もの道とは少し違つてゐるといふ氣がしてきた。
どうかしてゐるのだ。たしかにどうかしてゐる。——

私は煙草の火の消えるのをおそれた。火が消えてしまつたら、そのまゝ私の頭は現實との交渉を失ふ
のではないかといふ氣がしたのだ。

私は新しいバットをポケットの中に探つた。だが箱の中にはもう一本も残つてゐないのだ。

私は靴音を高く鳴らした。ざくりざくりと霜柱の層に喰ひ込む音が妙な冷たさを私の胸に運んでく
る。

すぐ前を一人の男が近づいてくるやうだ。軽い咳をした。——私はもう一度たしかめるやうに闇の中
を見透した。

頬かむりをしてゐるので顔は見えない。私はドキツとして立ちどまつた。

「今晚は。」

その聲で私は紙屑屋の顔をおもひだした。やつぱりあの男だ。天秤棒のやうなものを手にさげてゐ
る。

「今晚は。」

しかし、私は不安になつた。

「君は——」

私の聲はもう顫へてゐる。

「私は——私はリップで御座います。」

朗かな聲だ、だがその聲は風の音の中に消えていつた。誰もゐないのだ。私は吸口に火のつきかゝつ
た煙草を闇の中に投げ捨てた。

野良犬フリッツ

フリッツは野良犬の「ふく」の伴だ。わたしは五六年前、身體の小さい瘦犬が雨にびつしよりぬれながら、わたしの家の軒下に顛へてゐた姿をおもひだす、——風の強い日のつよく秋から冬にうつらうとするある時期の、雨にうたれた落葉のかをりが、何處からともなく漂つてくるやうな夕がただつた。追ひ立てようとする人間の顔を「ふく」は悲しうに見上げたが、しかしすすごと出ていつた。だが、すくにもどつてきた。そして、何かしきりに心の祕密を訴へようとするかのやうに鼻をくんくん鳴らしながらわたしの顔を見た。その姿からわたしは一人の人間を感じたのである。四十を過ぎて大きな風呂敷を抱へながら何の目的もなく旅から旅をわたり歩いてゐる哀れな乞食女を——。

野良犬ではあるが、しかし彼女には何處かに素性のよさを思はせる氣品が残つてゐた。犬としてはもうよほどの年配にちがひなかつたが身體が小さいせいか何處かに捨てがたい容色の名残があつた。この野良犬はその晩からわたしの家へずるずるべつたりの居候にをさまりこんでしまつた。

「この犬に何か名前をつけようぢやないか？」と、あるときわたしは兄に言つた。

「かういふ貧乏な家を見て犬がまひこんでくるといふことはきつと何かいゝことの前兆だね、——どうだらう『ふく』は、何しろ年増だからね、あまり若い娘のやうな名前でも困るし。」

兄はわたしをからかふやうな調子で言つたが、しかし、彼がさう考へることはもつともだつた。何故かといつて、兄は職業を見つけるために毎日のやうにそこをあるいてゐたし、わたしはわたしで家の中どころごろ寝そべつてくらしてゐたから。さて、「ふく」はお坐りもできなければお手をくれることもできないまつたくの藝なし犬であつたが、しかし、よく吠えるので用心のわるい家にはちやうどよかつた。「ふく」は誰彼の見境もなく吠えかゝつた。神經が強くて妙にとがつてゐたので、彼女は心をゆるした人間のほかには決して馴染まうとしなかつた。だが、どんなおばあさんでも犬にすたりはないものさ、——「さかり」の季節がくると燃えるやうな眼をした野良犬どもが彼女をめがけてぞろぞろとあつまつてくるのだから。

ある朝だつた。わたしは窓のそとで、悲しうに鳴く「ふく」の聲を聞いたのである。扉をあけると「ふく」の五倍もある強さうな黒犬が、かう背中合せになつて、むごたらしく「ふく」をひきずつてゆくではないか。——わたしは慌てゝ視線をそらした。何かしら莊嚴な、だがそれにもかゝはらずおそろしく不快な感情がかすのやうに残つたのである。それは四十女の痴情沙汰を見るやうな呪はしい氣持だつた。その日から「ふく」に對するわたしの感情は一變した。わたしは「ふく」の中にうごめいてゐる性

慾を感じると妙に腹立たしくなつてきたのである。夜中にしきりに「ふく」の鳴聲の聞える日が多くなつた。その聲にわたしは眼を醒ました。緞の下で、あの黒犬とあひゞきをしてゐるであらう。「ふく」の無恰好な姿が不快な影象となつてうつてきた。それは性の力にひきずられて、厭々心にもない男に身をまかせ四十女の哀れさである。その黒犬が、もちろん野良犬で、近所の鼻つまみになつてゐる無頼漢であることをわたしは知つてゐたから。それに、いかにも梅毒三期といった風にびつこをひきながら歩いてゐるやつだつたから。

「ふく」は到頭妊娠した。だから、彼女は縁の下へこもつたまゝ出て來なくなつた。三匹の仔犬が産れた。一匹が黒で、あとの二匹が「ふく」に似たうす茶であつた。「ふく」は目立つて瘦せてきた。彼女はもう前ほどに吠え立てなくなつた。しかし、ある日、わたしが外から家へ歸つて裏口へつゞく小さな廣場をつきぬけようとする時、「ふく」が何處からともなくとび出してきてわたしに吠えかゝつた。まつたく思ひがけないことだつた。彼女は執拗に、むしろ明かに一種の敵意をもつて吠え立てたのである。しかし、それはわたしに飛びかゝらうとするのではなしに、わたしの行手をふせぎとめようとするかのやうであつた。だから、わたしが歩くにつれて「ふく」はぢりぢりとうしろへしりぞいていつたが、板扉のそばに置いてある小さな蜜柑箱の前までくるとその前に立ちはだかつて、こんどは前よりも強く必死

になつて吠えたたてた。すべてがわかつた。その蜜柑箱の中には薬層の間にはさまつて三つの仔犬の頭がうごめてゐる。「ふく」の母性愛が眼を醒ました。だから彼女はそこを通りかゝる人間のすべてに對して極度の不安を感じだしたのだ。だが、その翌日から「ふく」はひなくなつてしまつた。隣の家の人主人が、不機嫌さうな蒼い顔をして、自分のうちの縁の下に「ふく」の死骸がころがつてゐることを知らせにきてくれた。それは一ト月ほど経つてから後であつたが――。

「ふく」の産んだ三匹の仔犬は三匹とも男だつた。近所の人々が來て黒いやつを一匹もらつていつた。そして、「フリッツ」と、彼の兄である「リップ」だけが残つたのである。毛並もだんだんはつきりしてきた。フリッツは白ぶち、リップは赤毛。

そこで、こんどは藝を仕込まねばならなかつた。だがそれはまつたく失敗に終つてしまつた。といふのはこの二匹の野良犬の子は彼等を訓練しようとする人間の理智を必死になつて拒んでゐるやうに見える。それから、しかし、二匹とも眼に見えて大きくなつてきた。それでも、フリッツには少しばかり間のぬけた野放圖なところがあつたが、しかしリップはまるでいぢけておぼおぼしてゐた。彼は飼主をおそれるだけではなく兄弟のフリッツに對してすら不安を感じてゐるやうに見える。そのいぢけ方は一々飼主の生活に反射してきた。だから、まつたくやりきれなかつた。

「こいつは捨て、しまふよりほかに仕方がないな。」と、あるとき兄がわたしに言った。しかし、さう言つてからすぐに彼は嚴肅な顔をしてつけ加へた。——「だが、捨てることを考へるのはちよつとやりきれないな！」

「捨てるんなら自分でつれてゆくんだね、おれはその役はごめんだぜ！」

「ぢやあ、何かうまいことはないかな、誰かほしがつてゐる人はないかな？」

「冗談ぢやねえや、だれがこんないぢけた野良犬をほしがるもんか！」

「だから、何かうまいことはないかな。」

——うまいことがあつた。といふのは、ある朝見知らない紙屑屋が古新聞を買つたついでに仔犬を一匹呉れないかと言ひだしたのである。

「何にするんだい？」

渡しに舟と思つたが、しかし兄はもつたいをつけるためにわざとさう言つた。

「番犬にするんですよ。」

「うまいことを言つてゐるね、實は殺して喰ふつもりぢやないだらうね。」

「馬鹿な、——かう見えてもね。」と、紙屑屋は鼻をうごめかした。さう言はれてみると、なるほど、ど

り見ても、犬の皮を剥ぎさうな奴だつた。それでも、いよいよやるとなると妙にわかれが惜まれた。わたしはリップを膝に抱きあげて二三度頬ずりをした。しかし紙屑屋はそれきり來なかつた。

夜であつた。もう一時に近かつた。兄が蒼ざめた顔をしてわたしの枕元に立つてゐた。彼は頬の肉を痙攣的に顫はせながら、かういふ話をした。——

その夜、彼は何時ものやうに停車場から雑木林にかこまれた郊外の村道を歩いて歸つてきたのである。——その道は本道から横にそれてゐるので夜になるとほとんど人通りがない。冬の夜なので、道は霜に凍りつき、だから、彼の靴の音だけが無氣味な反響を残してひびく。闇の中を歩いてゐると、何の理由もなしに人間は自分の行手に一つの不安を感じることがあるものだ。彼は停車場からずつと煙草をすひつゞけてゐたのだが、しかしその夜にかぎつて煙草の火の消えることが身の毛のよだつほどおそろしかつたといふのである。そこで、彼は新しいバットをポケットの方にさぐつた。だが、その日にかぎつて箱の中にはもう一本も残つてはゐないのだ。仕方がないので、彼は靴音を高く鳴らした。ざくりざくりと霜柱の層に喰ひこむ音が奇妙な幻想をそゝり立てた。まつたく手にしてゐる煙草の火が消えてしまつたら、もう闇を照らすものはなくなつてしまふのだから。最後のバットの火が到頭消えた。そのとき、一人の男が近づいてくるのを感じたといふのである。頬かむりをした男だ。すれちがひになるとき、そ

の男が「今晚は」と言つた。その聲が彼の記憶を一時によびさましたのである。それはリップをもらつていつた紙屑屋だつた。一瞬間、彼は紙屑屋の顔をはつきりおもひだしたのである。だが、そのとき彼の心は明かに深い幻覺の中をうろついてゐたにちがひないのだ。

「君は？」と、彼は言つた。言つてから、しまつたと思つた。すると、だしぬけに、――

「わたしは、リップでございます。」

その聲を、彼は、はつきり聞いたといふのだ、だがしかし、彼がそれを感じたとき紙屑屋はもうゐなかつた。……

「おれはどうもひどい神経衰弱らしいな、あの犬のことが氣になつてならならしんだ、だが、話してみると馬鹿なことさ……」

「いや、あの道は、さういふ幻覺の起りさうな感じがするよ。」と、わたしは兄のさびしさうな笑ひ顔を眺めながら言つた。

それから五年経つ。兄とわたしは海に近い郊外にうつた。そこに二軒の家をならべてくらしてゐる。フリッツも五年経つと五つになる。犬の年齢から言へば、彼は血氣さかんな若者だ。さて、青年、フリッツ、親に似てよく吠えるのだが、何しろ身體が小さくて脚が短いので犬仲間でもむろん幅のきく

いゝ男ではないにきまつてゐる。それに、鬚があるといふわけではなし、神経質で臆病で性格がへんにねぢくれてしまつてゐるので親しい友人があるやうにも見えなかつたが、しかしそれでも、さかりの季節がくると一人前の顔をして雌犬をさがしに出かけてゆくのである。ある春の朝、――わたしが、丘から丘につゞく雑木林の中の細い道のあるいと左側の藪の中から不意に一匹の美しいフォックス・テリアの雌犬がとび出したのである。すると、どうだ！ そのあとから大小合せて十五六匹の雄犬が、咽喉をごろごろ鳴らしながらとび出してきた。その眼は一つの眞剣な欲望のために輝いてゐた。わたしは思はず立ちどまつた。すると、そのとき、そのひとむれの一ばん最後に、おゝ、わが愛するフリッツまでが、同じやうに長い舌を出してあへぎながらとび出してきたではないか！

「フリッツ！ フリッツ！」

わたしは妙に晴れやかな氣持だつた。しかし、フリッツはわたしの聲援に對してふり返らうともしないで駆け去つた。ほかの犬の骨格のたくましさにくらべて、うしろから見るフリッツの姿のなんと小さく見すばらしいことよ！ まつたく、望みのない戀愛競争の中で彼は唯自分もまた女を追つかける集團の一員であるといふことにのみかすかな誇をかんじてゐるやうに見えるほどに。――だが、その日の夕方、フリッツはびつこをひきながら歸つてきた。彼は吠える勇氣もなく數日の間、悄然として庭の隅に つんである枯草の上にくづくまつてゐた。鼻柱と右の太腿にひどくかまれたあとを彼のみじめな戦跡を

物語るかのやうに、あざやかに残して——。

次の日から、フリッツは同じ場所に元氣なく寝そべつてゐた。彼の瞳はどろんとうるみ、絶えずふるぶると身體をふるはせてゐた。彼はだんだんやつれてきたが、しかしそれがために彼の聲は一層神經的になり、誰に對しても前よりも意地わるく吠えかゝるやうになつた。御用聞きがきても、新聞配達が來ても、彼はしつこく挑みかゝるやうになつた。夜、おそくなつて歸つてくるわたしに對してすら彼はとびかゝる氣配を示すことがあるのだ。狂犬になつたのぢやないか、——といふ不安のために近所の人たちがおそれるやうになつた。しかし、日がたつにつれて狂犬らしい兆候は消えてしまつた。そして、反對に彼は人がそばへ近づいてゆくことをおそれはじめた。彼の眠るべき大小屋は納屋のうしろにあるのだが、しかしその大小屋は大工が間違へてつくつたために入口が、小さいフリッツの身體がやつとはひることができるとは思はれないのである。そのためであらう、彼は大小屋の中に眠ることをきらつた。雨が降ると彼は縁の下へもぐりこみ、喰べ物を運んでやつてもそばに人のゐる間は決して近づいて來ようとしなないのだ。

晴れた朝、彼は雑木林の隅にしやがんで悲しげな聲を立てゝゐた。だが、しかし雌犬のすくないこ

の村にはフリッツの相手のゐる筈がなかつた。彼は半日姿をくらましてゐたが、その日の夕方、身體中傷だらけになつて歸つてきた。すると、彼はすごすごと庭のうしろの藪の中に姿をかくしてしまつた。木の下の雑草の中にくつたりと疲れて寝そべつてゐる彼の姿は、能力のない人間の生に疲れた姿を思はせる。夜になると、彼はいきり立つやうに吠えながら家のぐるりを走り廻るのだ。性の惱みがこの哀れな野良犬の神經を驅り立てるかのやうに、——次の朝、起きてみると、フリッツは窓の下に深い穴を掘つてゐた。

毎日、同じことがつゞいた。フリッツの穴は次第に深くなつた。その穴の中に身をひそめて、彼は終日出て來ないことがある。上から土を落とすと鍵形になつた暗い穴の奥から彼は挑みかゝるやうに眼を光らせて、悲しげにうめいてゐた。

犬は犬同士よりも、かへつて人間に對して親しみを感じるものだ、——といふ感じが、わたしの胸にしみじみときた。何故かといつて、フリッツほどに人間の好意を警戒する犬を見たことはないのだから。つまり、それほど彼は人間に近い犬であつたと言へるであらう。いや、たしかに、——彼の神經は犬よりも人間に近い。だから彼は何よりも自分の性の拙さを知つてゐるのだ。フリッツの穴はますます深くなつた。棒切れで追ひ拂はうとすると、彼は首をちぢめてうらめしげにぢろりとうしろを見わたすの

だが、しかしその眼は、かう言つてゐるやうに見える。——何といふ思ひやりのない人間どもだ、お前たちはこのおれの醜い死骸を何處の縁の下にさらせといふのか！

月のいゝ夜であつた。——わたしは酒に酔つて、高原の道をふらふらする足どりで歸つてきた。何か氣持のうきうきする晩だつた。森のかげが黒くうかんでゐた。わたしは、もう三日以上家をあけてゐるのだ。砂利を敷いた白い道がわたしの眼の前にひろがつてゐる。その時、わたしは視野の果てに、——それは丁度砂利道が斷崖によつて遮られてゐるところであるが——白いゴムまりのやうなものがごろごろところがつてくるのを見た。フリッツだ！と思つた時、併しこの哀れな犬はわたしの靴にまとひついて、しきりに身體をすりよせるのであつた。

「どうしたんだ。——フリッツ！」

フリッツが、かういふしなをつくつてじやれついてきたのは始めてだつた。わたしは妙なうす氣味わるさをおぼえた。彼のぢやれつきかたは犬が飼主に向つてもつ獨特の親しさではなくて、それは心の底にをさめた深い戀情を訴へてゐるかのやうであつたから。その夜、フリッツは庭の中を走りまはつてゐた。深い眠りにはひつたころ、わたしは彼の何時になく相高い聲で吠える聲を聞いた。月が出たのであらう。——ほのかな蒼白さがところどころに光の縞をつくつて、うすい窓のカーテンに沁みてゐた。わ

たしは、それから、とろとろと眠つたが、併し、荒々しく地面を蹴つて駆けずりまはるフリッツの足音は浅い夢の中に何時までも續いてゐた。その翌日から警察の野犬狩りがはじまつたのである。鑑札を持つてゐないフリッツはすぐに人夫に押へられて大きな箱車の中へなげこまれた。その事を坂の上の煙草屋の主人が知らせに來てくれた。

「たつた今、坂をのぼつていつたばかりですからね、今なら間に合ひますよ。なあに一兩もやればすぐに出してくれますよ。これが警察へ運ばれてからだ、ちよつと面倒ですがね。」

彼はさう言つてしまふと、いそがしさうに歸つていつた。前の夜、ひとりではしやぎまはつてゐたフリッツの姿が急にわたしの頭に新しい悲しみをよび起した。わたしはいそいで犬殺しのあとを追つ駆けたがしかし、道が違つたのかその姿はもう見えなかつた。その夜、わたしは窓の下にフリッツの鳴き聲を聞いた。してみると、あいつのことだからうまく逃げ出してきたのかた——？

わたしは窓をあけた。すると、わたしの眼の前を一匹の犬がとび立つやうに駆け去るのが見えた。しかし、それはフリッツではなかつた。

運命について

私はT旅館の二階から、四階の屋根裏へ移らなければならなくなつた。下宿料が拂へなかつたからである。宿の番頭は近いうちに日本から私のところへ金が送り届けられることを信じてゐるらしいので、追ひ出さうとはしなかつたが、しかし、萬一追ひ出されたところで困る筈はなかつた。何故かといつて私は自分の健康に自信があつたし、秋に入つて楊子江の沿岸は空気が高く澄みとほつて、私の無鐵砲な放浪に相應はしく思はれたから。

何處へ行つたつて人間は生きてゆけるのだ。何しろ私は健康だつたし、労働をするにも女を買ふにも、唯ゆきあたりばつたり歩いてゆけばよかつたのだ。しかし四階の屋根裏は、すつかり私の氣に入つてしまつたのである。七月から九月にかけてまる二月を暮した二階の部屋はB路の表通りに向つてゐたので私は朝から晩まで、街の雑音に惱まされなければならなかつた。毎朝、チャイナ・プレスの朝刊賣りの疍高い叫び聲が、窓の下で聞えると私は厭でも眼を醒ました。それから、通りの向ひ側の「水木兩作」(左官屋)の店頭で、頭のとげた肥つた親方の吠鳴る聲が聞えてきた。午後は大抵毎日一度づつ葬式の行列

が通つた。その暑苦しい車の音が響いてくると私は耳をふさいでしまつた。あらゆるものが不快であつた。窓をあけると街からくる生ぬるい風が病毒を室の中へ流しこむやうな氣がした。しかし、屋根裏の部屋には高い窓にうつるゆるやかな眺望があつた。窓の下は裏街の傾斜面で、傾斜面の兩側にならんでゐる古い煉瓦づくりの二階家のバルコンは大抵街路樹の深い葉かげにかくれてゐた。ちつとして見下ろしてゐると、その中に營まれてゐる穩かな生活が思はれた。往來を歩いてゆく人間の姿がみんなびつこのやうに見える。だから、この室の中にあると私は高い望樓の中にあるやうな氣がした。窓の左側には斷崖のやうな倉庫が聳え、そのうしろが坂の曲り角であつた。街路樹のかけに列をつくつてならんでゐる二階家のバルコンは夜になると一層私の心をひきつけた。そこにはうしろの窓からくる光を浴びて、それぞれの家の家族らしい人たちがうれしうにかたまつてゐた。雑音の沈んだ夕ぐれは空気が澄んでゐるので、彼等の囁きが顫へるやうに傳はつてきた。ときどきマンダリンの音が聞えたり、桃色のナイト・ドレスが輝かしく私の視野の中に閃めいたが、街路樹の深い葉かげに遮られてゐるので人の姿も顔も見ることができなかつた。それは日が暮れてから夜になるまでの僅かな時間に過ぎなかつたが、しかし、ちつとして窓にもたれてゐると、ひそやかな幻想の中に身體がうきあがつてゆくやうな氣がするのであつた。この屋根裏には私の部屋にならんで、ほかに二つの部屋があつた。私の隣りの部屋には四十を少し越したばかりの關西生れの落魄れた相場師が住んでゐたが、その次ぎの室——それは奥の暗い物置き

に續いてゐた——には六十近い一人の老人が住んでゐた。そして私は間もなく隣りの室にゐる相場師と知り合ひになつた。彼は長い間自分を訓練してきた迷信的な宿命觀のために、突發的な偶然があまりにも悲惨である彼の不幸な敗殘の生涯を一變させるときのことを信じてゐた。かういふ物質的なロマンスの多くがさうであるやうに、この哀れな相場師もまた彼の生活が慘めになるにつれて、進んで彼自身を世間から遠ざけようとしてゐるやうに見えた。同じ屋根裏の四階ではあるが、彼の部屋はたつた一つの細長い窓が、高い倉庫の壁によつて遮られてゐるので、太陽の光は何處からも入つてこなかつた。らす暗く、陰惨な部屋の空氣は古びて淀んでゐた。かういふ部屋になまじつか窓のあることは全く無いよりは一層悪い。ところどころに青黒いしみがうかびあがつてゐる倉庫の古壁を見詰めてゐると、絶望的な過去の記憶が彼を鞭うつに違ひないのだから。この男は自分を擦り減らしてしまつてゐるのだ。そして、今や最後の望みを毎週開かれる競馬にかけてゐるのであつた。それは彼の人生にとりのこされたたつた一つのものに違ひなかつた。何故かといつて多くの零落者たちにとつて、彼等の人生に奇蹟を示すであらう唯一つの夢は競馬の外にはなかつたから。彼はあらゆるものを賣りとばしたり質に入れたりしてしまつてゐるが、不思議に唯一着の洋服を持つてゐた。競馬に出かける日の朝は、彼は必ずこの洋服を着て、颯爽として私の部屋に現はれた。まるで人間が違つたやうに生き生きとしてしゃべり、高い聲で笑つた。だが、夕方になると、私は悄然として階段を上つてくる彼の靴音を聽かねばならなかつ

た。彼は黙つて私の部屋の前を通り過ぎ、亡者のやうに、薄暗い自分の部屋に忍び入り音も立てずに眠つてしまつた。この憂鬱な相場師とくらべると、次の室にゐる老人は非常に元氣であつた。彼は何時も莞々しながら誰とでも話をするにもかかはらず、誰も彼の素性を知る者はなかつた。だから、彼は結局誰とも話をしないのと同じであつた。それで私が彼について知ることのできたすべては、彼が彼の隣人である相場師よりも、ずつと古く二三年前からこの四階の同じ部屋に陣取つてゐるといふことだけであつた。彼が何によつて生活してゐるかといふことは宿の番頭たちも知らなかつた。それは知られる必要のないことだつたから。このあたりの港街に軒をならべてゐるどの宿屋にも、決して宿料を拂はないところのかういふ種類の人間が二人や三人はごろごろしてゐるといふことに彼等は心を煩はす理由がなかつた。しかし、日暮がた、B路の大通りを通ると、私はよくI旅館からあまり遠くない距離にあるベビーガーデンの中を、大きなマドロスパイプをくはへたこの老人が、黄昏の殘光の中を悠揚として歩いてゐる姿を見かけたのである。彼は色の剝けた紺セルの洋服を着て、ズツクの靴を穿いてゐるが、その無恰好な姿は、あまりに街の空氣と不調和過ぎるために少しも哀れに見えなかつた。哀れに見えないといふよりも、むしろ何か静かな喜びの中に心を委ねてゐるやうに思はれた。彼はもちろん私を訪ねて來なかつたし、また私の來訪を待ちうけてゐる筈もなかつた。だが、彼とはたつた一言も話をしたことがないのにもかかはらず、私には彼の心の中に張り詰めてゐる靜かな幻想がわかるやうな氣がした。つまり、

この老人は、どうして退屈な餘生を過ごさうかといふことを考へてゐるのだ。何故かといつて彼は運命の轉化を望むためには、あまりに年をとりすぎてしまつてゐるのだから。

秋が終りかけてゐた。それはあたり前の事實である。だが、しかし、この屋根裏の部屋の中で秋が終りかけてゐるといふことは何といふ悲しむべきことだ。——大氣は妙にうすじめつて底冷えのする風が正面から吹きつけるので、私は窓をあけることができなかつた。それに日本から來る管の金については、最早かすかな望みすらも失はねばならなくなつた。私のポケットには一弗の金もなくなつてゐるし、室の中には古びた一臺のコンベッドがあるだけで、新しい冬に備へるための用意は少しも出來上つてゐないのだ。窓の下に續いてゐるバルコンにも、今は人の姿を見ることができなくなり、マンドリンの音も聞えなくなつた。——ある朝である。私が洗面所にゆくために廊下へ出ると、隣りの相場師の部屋の扉が半ば明け放されたままになつてゐたので、聲をかけるためにそつと覗いたとき、私は思はず立ちどまつた。よれよれの浴衣を着た彼が低い机の前に屈んでゐたからである。そのうしろ姿はいかにもこの部屋の空氣に相應はしいものであつた。私は慌てて踵をめぐらし、暗い階段を下りていつたが、たつた今瞳にうつつた情景を忘れることができなかつた、薄暗い室の中に、身動きもしないで坐つてゐる彼の

姿は何事かの祈願を凝らしてゐる人のやうであつた。彼が首を屈めてゐる低い机の上には、黒ずんだ色の一匹の玩具の馬が立つてゐた。それが何を意味するのかわからないことについて考へる前に、私は思ひがけない人間の祕密に觸れたやうな氣がしたのだ。私は一月ほど前、彼と二人で北京路の淋しい裏通りを歩いてゐた。そのとき彼が、ある古道具屋の店頭で、さまざまながらくたの中からこの馬を拾ひあげたのである。彼はうれしさに五六枚のドンペイを投げ出して、この馬をうけとると、それを掌の上にのせて私に話しかけた。

「素敵に縁起がいいです。——私にはね、この馬の前脚が一本折れてゐることが、すつかり氣に入つたんです。若し今度の競馬に當つたら私は金の前脚をつくつてやりますよ。」

中年の相場師はほがらかに、しかし、確信に充ちた、つつましかたな低い聲で言つた。だが、何も人生を嚴肅に考へることはない。あの男とおれとはまるで隣り合せの運命の中に生きてゐるやうなものではないか。私はさう思はないではゐられなかつた。それは私の部屋と彼の部屋とが隣り合してゐると同じやうなものである。薄い壁一重に區切られてゐる彼の部屋から忍びやかに傳はつてくる物音は私の神經を脅かした。夜が更けて私は彼が寢返りをうつごとに寢臺の鳴る音を聞き、絶えず何ものかを懼れてゐるやうな、きれぎれの聲を聞いた。一日ごとに彼と私との距離は狭ばめられてきた。そして、自分の運命は彼と同じ方向に向つて發展してゆくのではないかといふ不安のために私はかすかな戰慄を感じ

た。だから、その朝、洗面所から歸つて、やつと支那人のボーイが運んできたパンの皿を机の上に置いて、冷めかかつた紅茶を毀りかけたとき、かすかに扉をノックする音を聞いて私は思はず、どきつとしたのである。それは彼のほかの誰でもなかつたから。――

しかし、相場師は愉快さうであつた。私は彼の顔がこんなに明るく晴れわたつてゐるのを見たことがなかつた、彼は何かに咬しかけられてでもゐるかのやうに絶えず身體を動かしながら、響のある聲で語つた。だが、それはほんの數分間に過ぎなかつた。彼は急に何時ものやうに憂鬱になつてむつとりと唇を噤み、深い瞑想に沈むやうに黙つて首をうなだれてしまつた。かういふとき、私の心は焦燥に驅られ、烈しい憤りが燃えあがつてくるのであつた。何故かといつて私は何時の間にか彼の憂鬱に調子を合せ、彼と自分とが全く同じものだといふ一つの觀念に脅かされなければならなかつたから。

彼はうつむいたまま低い聲で言つた。

「實は無理なお願ひにあがつたんですが。」

「何ですか？」

私はその言葉を彈き返すやうに言つた。

「今日、實は競馬があるんですが。私はもう着てゆく洋服が無いんです。それで――まことに申譯ないんですが、一日だけ、どうかあなたの洋服を拜借願へないでせうか？」

彼の聲は妙に顫へてゐた。

「いや、それは。そんなことならば、どうぞ――」

私はどきまぎしながら言つた。しかし、彼がいそいそと私の部屋から、たつた一着の私の洋服と外套とを運び去つたあとで私は妙な不安に襲はれた。その不安は暫らくたつて彼の靴音が階段の下へ消えてゆくとともに非常な速さでふくれあがつてきた。若し、彼がこのまま歸つて來ないやうなことがあつたら？ いや、それはあり得べきことだ。さうでなかつたら、あの男があんなに懼れながら物を言ふ筈がない。さうだとすると、私はこの冬中、まるで外出することができなくなつてしまふのだ。私は朝早く、よれよれの浴衣一枚で机の前に坐つてゐた彼の姿を思ひだした。すると、私はもうちつとしてゐることができなくなつた。その姿は最早彼自身のものではなくなつたのだ。そして、私の洋服を着たあの男は、彼の古い運命を垢じみた、よれよれの浴衣とともに投げ棄てて新しい流動に身をませかるために行衛をくらししてしまつたのだ……

日暮れがたになつたが彼は歸つて來なかつた。このうす暗い屋根裏の部屋は、今や私にとつて、運命の不幸を象徴する牢獄になつてしまつたのである。さういふ考へに囚はれたながらも私の耳は非常な注意をもつて、階段の方から聞えてくるすべての物音に耳を澄ました。私の幻想は急に速度を加へはじめた。だが、そのとき私の耳は、ゆつくりゆつくりと階段をあがつてくる靴の音をたしかに聞いたのであ

る。私は衝動的に把手にとびついて扉をつきあけた。すると、廊下の暗闇から私は一人の人間が近づいてくるのを見とめたのである。間もなく、私は眼の前に脊の低い一人の老人を見た。マドロスパイプをくはへた彼の口からはゆるやかな煙が、ほのかな夢のやうに立ちのぼつてゐた。

老人は、黙つて私の前を通り過ぎていった。彼は私の焦燥に對して一瞥を投げようとしなかつたが、しかし、彼のうしろ姿が暗い扉のかけに消えていつたとき、私の心は急に新しい昂奮に驅り立てられた。私は自分の部屋に入り、カンブベッドの上に腰をおろした。それから立ち上つて電燈のスイッチをひねつた。

眞暗な部屋の中で私は自分の吐く息が冷たい大氣の中に溶けてゆくのを見た。すると何かしら自分の心の底に神秘的な幻想の世界がひろがつてゆくといふ感じを避けることができなくなつた。妙に息苦しく——それにもかかはらず静かな昂奮の中で、私はあの老人と自分とをつないでゐる眼に見えないきつなを感じないではゐられなくなつたのだ。彼は人生に對してすべての要求を失つてしまつてゐる。だから若し彼の存在が人生の現實に何等かの關はりを持つてゐるとすれば、それは陽の照りつけた午後、の街に高い建物の影が映つてゐるやうなものではないか。彼の前にはすべての現實が過去の回想の中に横たはつてゐるよりも以上に少しも新しいものでなくなつてしまつてゐるからだ。人生に脅かされる理由が無いと同じやうに彼もまた人生を脅かす必要がないのだ。春が秋になり、冬が夏になると同じやうにこの

老人の前にはあらゆるものが永遠の循環をやつてゐるのだ。だが、しかし、この不思議な瞬間のために私は最早隣室の相場師について考へる必要がなくなつたのである。何故かといつて、——彼の新調の洋服を着て出ていつた相場師のためにどうして私が自分を不幸にしなければならぬのか？ 私の心は今こそ彼がふたたびこの四階の部屋に歸つて來ないことを望みたい氣持で一ぱいになつてゐるではないか。彼の憂鬱な顔が以前と同じやうに毎朝、細目にあけた扉口から亡靈のやうに私の部屋の中を覗き込む。そして、不幸な不幸な身の上ばなしを聞きながら、私もまた彼と同じやうにセンチメンタルにならなければならない。——そして夜は、うす氣味悪い未來の不幸に怯えながら、古い壁を隔てて永遠にかびあがることのできない人間のうめき聲を聴かなければならない。その重苦しい夜の長い時間は私の前から消え去らうとしてゐるのだ。私は自分の運命に一つの變化を期待し、新しい空想の道がひらかれてくるといふ感じに牽き入れられた。

そこで、私は部屋を明るくするために電燈を點けた。しかし、鈍い光に照らし出された部屋の中は何かしら不快であつた。相場師の印象がこの部屋の中のあらゆるものにこびりついてしまつてゐるのだ。さういふ感じを避けることができなかった。私は立ち上つて窓をひらいた。外の空氣の中へ不快な追憶を追ひ出すために。

だが、私の頭の上には曇つた冬の空が掩ひかかつてゐた。私の幻想を威壓するために、壁のやうに動

かない灰色の雲の層があつた。街路樹にかこまれた裏通りの傾斜面にはうすい街燈の光が流れて、異常な物寂しさが何か一つのおそろしい祕密を暗示してゐるやうであつた。街路樹の葉かげに見える二階家のバルコンには堅くとざした窓の青いカーテンのすき間から、かすかな光の線が落ちてゐるが、それすらも、今は凍りついたやうに無氣味であつた。

私は窓をしめ、それから部屋の感じを變へるためにカンブベッドをひきずつて窓の下へ置き、そのあとへ、左手の壁とすれずれにテーブルを置いた。しかし、ニスの剝けたテーブルにも、鉄の落ちたカンブベッドにも人間の不幸な生活が沁みついてゐた。私の心は隣室の相場師が寝ていつた不快な印象よりも、一層無氣味な幻想の中に誘ひこまれた。このテーブルにも椅子にも、かつてこの室の中に住んでゐたにちがひない多くの未知の人たちの過去が影を潜めてゐる。さういふ感じは異常な速さで私の心の中にひろがつてきた。すると、今までテーブルの置いてあつた隣室との境目の壁にかけてあつた小さい額縁の中の古ぼけた石版畫が、急にがらんとした空虚な壁の平面に一つの存在を示しはじめた。私はこの額縁がこの柱の上にかけられてゐるといふことに今まで全く注意を拂つたことがなかつたのだ。美しい花の咲いた高原の上をたてがみをならべた二頭の馬に跨つて陸まじさうに語り合つてゐる二人の男女の姿が描かれてゐるが、しかし、このありふれた石版畫すらも不幸な人間の運命を象徴するよりも以上の何ものでもないといふ氣がしてきてきたのだ。すると、笑ひ興じてゐるらしい男女の顔までが、私には急

に堪まらなく憂鬱なものに思はれてきた。花の咲いた高原の上には果しなく擴がつてゆく不安があつた。そして愛慾の疲れた旅を續けてゆく二人の男女の憂鬱が惨めな私の回想の中から現はれてきたのだ。私はこの石版畫の前に立つてゐることが苦しくなり急いで額縁を外して戸棚の中へ投げ込んでしまつた。そのとき、階段を荒々しく踏みつけながら近づいてくる靴音が新しく私の意識を呼び醒ました。斷續的に響いてくるその靴音は私の耳の底にこびりついた。しかし、やがて靴音は私の部屋の前にとまつて、私は扉の白い把手が烈しく廻轉するのを見た。細目にあいた扉口から、廊下の闇を背負つて相場師がよろけるやうに入つてきたのである。

蒼ざめた彼の顔が、悲惨な電燈の光の中にかびあがつた。両手を私の洋服の上着のポケットの中へ突つ込んで彼は私の方へ近づいてきた。――

「駄目でした。私はもう駄目です。」

彼はぐつたりとカンブベッドの上に腰をおろした。しかし、絶望の中に顫へてゐる彼の視線に觸れると、私は不意に兇暴な衝動を感じた。

「それが、僕に何の関係があるんです。」

この男の不幸のためにどうして私が悲惨にならなければならないのだ。――私は何よりも私の恐怖に

對して反抗しなければならぬ。私は正面から彼を睨みつけた。彼の表情の中に當然浮び上つてくるであらう憎悪と憤りとを期待しながら。

しかし、相場師の顔には全く何の反應も現はれなかつた。彼は私に挑みかかるかほりにおぼつと立ち上つた。そして口籠もるやうな顫へ聲で何事かを吐きながら、隣みを乞ふものやうに幾度びとなく頭を下げて、それから忍びやかに出ていつた。暫らく経つてから私は隣室の扉のあく音を聞いた。だが、そのまま何の物音も響いて來なかつた。あの男はことによると死ぬかも知れない。——さういふ考の中に私の不安はふくれあがつてきたのである。しかし、それがどうしたといふのだ。へたばるな。——私は何よりも悲慘に抵抗しなければならぬ。他人の運命に干渉することによつて、私は心の中に新しい事實を築きあげたのだ。私はあらゆる悲慘の蒐集である未知の人生に向つて飛びこんでゆく自分の姿を描きながら、部屋の中をぐるぐると歩き廻つた。——

次の日の午後、私は穩かな午後の陽ざしの中に眼を醒ました。隣りの部屋から相場師の咳ばらひが、かすかに洩れてきたが、しかし、それすらも今は私の心の静けさをかき亂すものではなかつた。壁に續いてテーブルの上には私の新しい洋服がきちんと疊んで置いてあつた。

酒場にて

これから、麻雀をやらうといふH氏と露地の四ツ角でわかれると、私とSは雑沓の流れる方へ歩いていつた。妙に浮き立つやうな氣持が、空虚な冷たさの中からのぼつてきたが、しかし、人通りのうすい裏街へくると、一列にならんだ軒燈の明りがわびしく、夜風に凍りついた道路に鳴る足駄の音がどうにもやりきれなかつた。こんなにピントが合はなくつちやあ仕方がないな。——自分はさつきから何べんとなく冗談のやうに弄んできた言葉を口の中で繰り返しながら、少し薄暗い露地が見つかるごとに、入口に立つて透かすやうに中を見た。だが、どの露地も奥深くうねうねと續いてはるたが、げつそりととした冷たい闇に掩はれてゐた。

「洞穴の中のやうだね。それにしても何かありさうなものだが。」

私は頭の中に、きれぎれの回想を探りながら、同じことを繰り返した。しかし露地を覗くごとに陰慘なさびれた妖氣が何處からともなく流れてくるやうな氣がした。裏通りが盡きて正面に學校か病院ででもあるらしい大きな門がそびえてゐる廣場があつた。

「へんなところへ出たね。入つて見ようか？」Sが外套の襟の中に深く首を埋めたまま張合ひのない聲を出した。

「いや、——訊いてみるから待てよ。」私は、うしろから擦れちがひに門の中へ入つてゆかうとする黒い人影に近づいていった。

「この門を通り抜けると何處へ行くんですか？」

四十恰好の、筒袖を着た女であつたが、無表情のまま二三歩前へ行き過ぎてから、吐き出すやうな調子で、

「吉原。」と言つた。さう言つて、足早に歩いていつてしまつた。何時の間にかこんなところまで歩いてきたのかわからない。ついさつきまで、未だ千束町の裏を歩いてゐるつもりだつたのだが。

「おどろいたね。吉原へ来てしまつたのか。しかし、それはいいが、あの女はどうしてあんなに無愛想な返事をするんだらう。」

Sが頓狂な聲を出した。

「冷やかされたと思つたんだね。だつて吉原の裏口へ来て、この道がどつちの方角へ向いてゐるか、訊く奴も無いだらう。しかしそれほど變でもないかな。——冷やかされてゐると思つたつて、もう少しゆとりのある返事が出来さうなものだが。やつぱり、あの女も心のピン트가はづれてゐるんだ。」

私は先に立つて歩いていつた。正面の高い建物の窓から来る燈火が、地面にひよる長い私の影を描いた。一瞬間、私は過去の回想の中へ躍りこんでゆく自分を咬しかけた。だがしかしこの回想はすつかりすりきれてしまつてゐる。そのために私は自分の若さが一層見すばらしく、そして衰へ過ぎてしまつたことを感しなければならぬ。それに、最もいけないことは遊廊の中が妙にひつそりとして、古い情感を浮き立たせるといふよりも、いかめしい門構への家がむしろ、何かしら、人間の運命を封じこめてゐる清浄な寺院のやうな氣のすることだ。しかし、裏門から續く大通りははつきりと私の記憶に残つてゐた。地震以後、家のつくり方はすつかり變つてしまつてゐるが、街には歴史の古い印象があつた。だから、私は歩きながら、直ぐこの通りの右側に「××××」といふ家があつたことをおもひだしたのだ。その方角に歩いてゆくと、その家は昔と同じとほり四軒目にあつた。それはほとんど以前と變つてはゐなかつたが、私の足音を聴きつけた妓夫太郎が、勢ひこんで立ちあがつたとき、私は思はずどきつとして足を早めた。何故かといつて、もう少しで、この家へ上つてしまふところだつたから。しかし、まん中の車道に立つて、この家を見上げると、屈辱と懶惰の中に埋まつてゐた私の過去が、おもひひの中に入つてきた。そして、昔どほりにこの家が存在してゐるといふことが哀れであつた。

曲り角の小さな家で、若い妓夫太郎が疝高い聲で呼びとめた。軒下にならんでゐる寫眞を見るために、そつと近づいてゆくと、數人の女が暖簾の間から急に首をつき出した。そのままひよいと身を躲して通

りへ出ると、うしろから、不意に調子の變つた妓夫太郎の聲が追ひ駈けてきた。
 「おい、冷やかしか。——これから冷やかしかなんか承知しねえぞ！——」その聲は、ほんたうに怒つてゐるやうであつた。閑寂な街の空氣は冷えきつて、まばらな人通りの中に、四方に延びた家並が見渡された。

「どうも、おれは少し寒くなつた。早く此處を出て酒を呑みたいな。」Sの口から吐く息が、うすじめつた闇の中へ消えていつた。どの通りも寂然として、明るい墓地の中をさまよつてゐるやうな感じであつた。

「吉原も、もう直無くなつて終ふだらうな。こんなにひっそりしてしまつちやあ妓夫太郎だつてちつとしてゐられないだらう。」

この古めかしく大きな街が、時代からとりのこされゆくことを考へると痛ましかつた。私たちは次ぎの四ツ角から引返して、裏門から右に折れる小さな濠に沿つた道を歩いていつた。道は幾度びとなく行き詰り、行き詰るごとに袋のやうな空地に出たが、やがて暗い潜り穴のやうな露地をぬけると、大門の通りへ出た。石疊の道は乾き切つて、砂を捲く風が足の下に音を立てて鳴つてゐた。四五人の男が擦れちがひに歩いていつたが、しかしその歩きかたにも妙にせかせかしてゆとりがなかつた。夜は更けて、私たちが、大門の右手にある大きな酒場の、火の氣のない吹きさらしの部屋にやつと腰をおろした

ときはもう十一時が廻つてゐた。酒場のただつびろい部屋の中は、二組か三組の客があるだけで、低いさざめきが、空虚な高い天井に反響してゐたが、しかし、古い客が順々に歸つていつても、新しい客は少しも入つて來なかつた。

そのとき、首をかがめて酒を呑んでゐたSが、急に私の耳に口を寄せて囁いた。

「うしろを見たまへ。——ほら、あの入口のテーブルに三味線を持つた女があるだらう。何だらう。一體、あれは？」

なるほど、私のうしろの空いたテーブルを三つ隔てて、四十恰好の商人風の男が、壁をうしろにして酒を呑んでゐる。小柄であるが眼鏡越にぢろりと流す視線には、人の心の裏をさぐる職業的な癖が感ぜられた。その横に、二十前後の髪を銀杏返しに結つた。肥り肉の女が度ましやかに首をたれて三味線の柄を膝の上で弄びながら腰かけてゐた。

「さて、——何だらうかね。一見して田舎藝妓だね。あの男に賣られて木更津あたりへゆくんぢやないかな。」

「まさか——」Sの頬が歪んで、口籠もるやうな、忍びやかな微笑がうかんだ。

「いや、そんな氣がするぢやないか。全くそんな悪黨が徘徊してゐるさうな空氣を感じるぢやないか。」だが、そのとき、女が立ちあがつて、テーブルの上の五十錢銀貨をとり、それから、びよこんと頭を下げ

たので、Sが笑ひだした。
 「やつぱり、この邊で稼いでゐる藝人だよ。君は厭に眞面目になつてをかしなことを言ひ出すぢやないか？」
 「今夜は俺は遠近法がとれてゐないんだ。——だが、この空氣の中にゐたら、誰だつて焦點が狂ひ出すだらう。何だか、いろいろなもの、みんないびつに曲つてしまつてゐるやうな氣がするんだ……」
 女は退屈さうに、おろおろと部屋の中を見廻はしてから、やがて、所在なさうに歩いて、まん中の大きいテーブルを一人で占領してゐる職人風の若い男のそばに寄り添ひ低い聲で何かしゃべつてゐたが、男が引廻しのポケットをさぐつて、大きな臺口の中から五十錢銀貨をテーブルの上へ置くのを見てから、傍の椅子に——ちやうど私の方に横顔を見せて腰をおろした。そして膝の上で三味線の調子を合せてから、無雑作に弾きはじめた。しかし、そのたるんだやうな音には情感を咬る響もなく、動きのない退屈な表情の中で、全く別の空想を追ひ求めてゐる女の瞳だけが唯目まぐるしく動いてゐるだけである。

職人風の男は、むつつりとして口をつぐんだまま聽いてゐたが、その顔にも何かしら深い憂鬱の翳があつた。テーブルの上には空になつた銚子が五六本、ならんでゐる間に、食ひあましのライスカレーの皿の置いてあるのが、たよりなく不調和に見えた。

女が無頓着な、幅のひろい聲で安來節をうたひはじめた。かんどころをすべりぬけてゆく、締まりのない聲の一ふしが終るごとに、職人風の男の唇には、皮肉な微笑がうかんだが、しかし彼はそれを露骨に示すことをすら避けてゐるやうに思はれた。ときどき、女の顔を見上げる男の表情には静かな落ちつきがあつた。私はこの男がすっかり好きになつた。男の眼は、女を憐んでゐるといふよりも、むしろ、自らを悲しんでゐるやうに見えたから。しかし、女は、あとからあとからとうたひ續けた。私は今までこんなに、自分の弾く三味線にも、自分のうたふ唄にも、およそかすかな陶醉を感じないらしい藝人を見たことがなかつた。

「どうも今夜は大變だね。——あの女のピントのはづれやうはどうだ。われわれのやうに人生に感激を求めなければ居られないやうなヒステリー患者は今にゐなくなつてしまふぜ。たとへば、われわれにしてもだ。昔だつたら、あんな女のためにも涙をこぼしたかも知れないね。だが、今はどうだい、かういふ情景を詠嘆する勇氣があるかね——」

私は頭の底に妙な火照りを感じながら、氣取つた調子で言つたのである。屈託に充ちたSの顔には一瞬間かすかな輕蔑の色が現はれたが、しかし彼は低い聲で、

「いや、まあいいよ、どうせ、君はピントが合つてゐないんだから。」

と言つた、そのとき、三味線の調子が改まつて、女が朗々たる聲を張り上げて磯節をうたひはじめた

のである。すると、職人風の男の、きよんとした視線が、私の方に閃めいたが、そのとき、彼は不意に両手をひろげて、

「こりや、こりや。」

と、大きな聲で拍子をとつた。その聲はだつびろい部屋の四周の壁に反響した。だが静かな憂愁を湛へた彼の表情には少しの變化も見えなかつた。次の磯ぶしが終ると、彼はまた、身體を前に屈ませながら、同じやうに「こりや、こりや。」と言つた。それは女の三味線に拍子をとるといふよりもむしろ彼の人生に調子を合せてゐるやうに見えた。そこで、私は見えない小さな運命に向つて自暴自棄になつてゐる彼の心を感じると、思はず、彼と聲を合せて「こりや、こりや」と叫ばなければ居られない氣持になつてきたのだ。それにしても、このポロ三味線にややくそな調子を合せてやるのが彼の人生なのではないか。だからこそ、無理に運命の偶然にピントを合せる必要はないのだ。私はだんだん酔つてきた。そのとき、今ごろ露地裏の俱樂部で朗かに笑ひながら麻雀に夢中になつてゐるにちがひない、H氏の顔がうかんだが、彼もまたポロ三味線に調子を合せてゐるだけのことだ。彼の表情を掩つてゐる暗い翳を感じると私はほとんど衝動的にSの肩を敲いて立ち上つたのである。――

當世文人氣質

(その一) 「人造人間」のむれ

――仁木一郎が「談風社」の門を潜つたのは午後二時であつた。午後二時、何とその時間が、この「談風社」の應接室を原稿取引の市場に一變させてしまふことであらう。銀行のメ切時間が近づくにつれて「市場」は極度に緊張してくる。公衆食堂を思はせる廣い部屋。その中に一定の間隔を保つて、ぎつしりつまつた二十脚近いテーブルをかこんで額と額を擦りつけるやうにして話しこんでゐる文筆労働者と従業員のみれ。

だから、どのテーブルでも商品取引の相談が進行してゐるのである。――仁木一郎は扉の前で立ちどまつた。彼はおそれてゐるのである。誰か知つてゐる男の眼がこつそりと彼を見つけたしてしまふことを。……「あの男も到頭やつてきたな！」

彼の頭の中には自分に注がれた無数の視線が閃めいた。すると、急に反抗的に肩をそびやかして――ひとり仁木一郎だけではない。いかに新しい訪客の誰も彼もが、まるでこの扉をあけるときの禮儀で

でもあるかのやうに肩をそびやかすことであらうか。力強く扉をあけた。

そこは窓に近いテーブルであつた。簡単に用事をすましてしまつた、この市場での常連の賣れつ子であるユーモア小説業者の八木放亭が仁木の顔を見つけると愉快さうに唇の上に皺をよせた。——「えらい人が入つてきたね、かうやつて見てみると、始めてやつてくる文壇の人の顔はすぐわかるよ！」彼は同じテーブルにゐた常連の一人にかう言つた。八木放亭は文壇の落伍者である。否、否、——彼に従へば文壇こそまことに彼によつて數年前に足蹴にされてしまつたのである。それ故、今はこの市場において、薄利多賣主義による優良商品の生産者として珍重がられてゐる熟練職工の一人なのである。「まるで。」

と、八木放亭が言つた。——「初めて待合入りをする藝妓みたいなものさ。いやにおどおどして、その癖妙に見識ぶつてね。」

それにしても、この卑俗な小ざかしき比喩が彼の得意とするユーモア小説よりも何と深刻なユーモアを含んでゐることよ！

何故かといつて、——肩をそびやかして入つてきた新しい訪客たちが二度三度と味を占めるにつれて、何時の間にかこの市場に相應はしい「人造人間」になつてしまふからである。

例へば「不見轉藝妓」が「不見轉」であることの卑屈さに甘んじないのと同じやうに彼等もまた、すりきれた藝術的良心のためにかう辯解するであらう。——「生活があるのだ、生活のためには何を書いたつていゝのだ、生じつかない文學的作品を書くよりも、かうやつて通俗講談を書いて生活の基礎をつつておいてから徐ろに……」

だから、彼等がゆくりなくも此處で彼等の友人を見出したときの安心した表情を見るがいゝ。

「——君も來てゐるのか？」

「君も！」

同じ境遇を憐み合ふところの、つまり當世流行の言葉をもつてすれば、何と小市民的な安心が、彼等の瞳をかすめることよ！（そして、そのとほりなのである。この應接室が象徴する現世的な功利觀は、磁力のごとく文壇作家をひきつけた。今や文壇からロツクアウトされたのが彼等ではなくて、まことに文壇こそ彼等からロツクアウトされたのである！）

仁木一郎の前に、一人の「人造人間」が現はれた。（——この市場においてはすべての従業員が、いかに優秀な人造人間たるべく訓練されてゐるかを見よ！）

この眼鏡をかけた「人造人間」は、まるで感情を失つてしまつてゐた。だから、機械的な態度で型どほりのお辭儀をした。

「——これは仁木先生で御座いますか、おいそがしいところをわざわざ御厚情に預りまして……」
仁木一郎は眞つ赤になつてあたりを見廻はした。

「ところで……」

と、機械的な聲音がゼンマイの動くにつれて彼の心臓の上のしかゝつてきた。——「社員一同、非常に喜んで居りますやうな次第で、いづれゆつくり拜見いたしました上、御挨拶に……」

「いや、實は、今日——どうしても金が必要なんだ、何とか……」

「それならば」

「人造人間」の従業員は表情一つ崩さないで立ちあがつた。

そのとき、彼の前のテーブルは彼の大學時代の級友である人氣通俗作家の横川射山が傲然として煙草をすつてゐた。そこで彼は慌て、顔を横へ反けてしまつた。すると、その横のテーブルには同人雑誌の作品で近頃評判のいゝ、竹知京一が蒼白い顔をして、ぢつとテーブルの上の灰落しを見詰めてゐるのである。そこへ脊の低い五分刈頭の従業員が、一綴の原稿を持つて現はれた。

「——折角で御座いますが、今度の作品は、どうも先生のお書きになつたものとしては力の入れ方が不足してゐるのではないかといふやうな編輯局一同の意見で、——それに、しまひの方を少し人情的にびりつとするやうなところを入れていたゞかないと……」

「ぢやあ、もう一度手を入れることにしませう、それで實は……」

と、竹知京一は急に聲の調子を落して、ひそひそ話をはじめたではないか。おゝ、どうしたといふのだ。これが既成文壇を罵倒することにおいて最も勇敢である新人の姿なのであらうか。——しかし、問題は竹知よりもむしろ彼自身の方にあつた。といふのは彼は自分に必要な金について考へるよりも前に、自分の藝術的良心のうけた侮蔑(?)が、——そして、これから更にうけるかも知れない侮蔑がどの程度にまで次のテーブルに影響するかといふことについて考へなければならなかつた。

しかし、隣のテーブルでは取引が不調に終つたらしい。竹知京一は、眼の前に置いてあつた原稿をつかんで立ちあがつた。そのとき仁木一郎の眼に大きく書かれた表題の文字がチカチカと閃めいた。——「人獸争闘の大悲劇!」

仁木一郎はひとすぢの哀傷が胸の底からのぼつてくるのを抑へることができなかつた。(——だから、この見通しの應接室の中で事務が凝滞なく進行することを訝る必要はなかつた。此處では全く必要以上の感情を露出する機會、——例へば境遇の非を訴へるとか、相手の同情に頼るとか、——すらも與へられなかつた!)

だが、前のテーブルでは横川射山をかこんで「人造人間」が小さな垣をつくつてゐた。それ故、殖民地の官憲に迎へられた陸軍大將のやうに、彼は次々に現はれてくる従業員に挨拶してゐるのであつた。

そのとき、仁木一郎はふと、彼の友人である西方現助の顔を思ひ出したのである。そして、西方の藪
 尻みのやうな瞳とともに、ある夜、彼が酔にまぎれて悵然として吐き捨てた一塊の言葉を、「ねえ。
 君、僕は談風社の應接室を主題にして『當世文人氣質』といふ小説を書かうと思つてゐるよ、それから
 僕は最近文壇行進曲といふのをつくつて大いに天下に宣傳しようと思つてゐるんだ、かういふ調子にね、
 『文學時代は、めで博文館は間に合はず、急げや急げ談風社——』
 急げや急げ談風社か……と、彼は口の中で歌ふやうに繰返しながら、しかし、それにしてもあの男の
 カリカチュアにならないですんだぞ、といふ氣持のために、ほつとしたやうに息を吸ひこんだ。

「——西方さん！」

と、しかし、そのとき、すみとほつた聲が、彼の耳の中へすべり落ちてきた。「おや」と思つたとき、
 小切手の束をもつた若い會計係が彼のテーブルの前をすりぬけて、左手の隅の方へそのそと歩いてい
 った。その壁につぶいたうす暗い隅のテーブルから、そのとき、まぎれもない西方現助の憂鬱な顔が、
 いかにも觀念したといつたやうにかびあがつたではないか！ 脱兎のごとく立ちあがつた西方現助は
 （しかし、これも西方にかぎつたことではない、誰だつてかういふ場合にはかういふ風に機先を制しなけ
 れば恰好がつかないものである）仁木一郎のテーブルに向つて歩いてきた。

「珍らしいね、——まさか君が來るとは。」

「いや、僕よりも、君は一體、何時の間に来てゐたんだい？」

「もう二時間も前に、——壁の方を向いて身動きもしないでゐたんだ。あの會計係が厭に大きな聲を出
 しゃがるんで、すつかりおれのゐるのがわかつてしまつたんだ！」

若い會計係はしかし、無表情のまま、部屋のまま中に突立つて、一人づつ大きい聲でよびあげてゐ
 た。よびあげられた男は機械的な動作で大きく返辭をしてびよこんと立ちあがつた。

午後三時であつた。——それ故「人造人間」のむれが、それぞれ一枚の小切手を握つて扉の外へあふ
 れ出した。……

(その二) ドンキ・ホーテの假面

「談風社」の門を出ると、仁木一郎と西方現助とは、ほつとしたやうに顔を見合せたのである。それか
 ら彼等は、炎天の下に乾ききつた路上にべつ！ と唾液を吐いた。お、誰だつて唾液を吐くであらう。
 あの不可思議な魔力を持った應接間の中で、一ト晩で書きあげた「人情美談」をやつと一枚の小切手に
 代へるために「人造人間」の一役を演じてきた男たちの誰も彼もが。——

一瞬間、みぢめなカリカチュアが彼等の脳底に閃めいた。それは、しかし彼等自身の姿だけではない。
 「A」も「B」も「C」も「D」も、……それは、あの「市場」のテーブルの上で、彼等の「文學」の相

場が、急激な速度をもつて下落してゆく姿であつた！

しかし、かすかな藝術的良心とともに、文學者としての「名譽」だけが未だ在郷軍人の勳章のやうに彼等の胸の上にぶら下つてゐるのであつた。

「もう決して。」

と、だから、仁木一郎はヒステリカルな聲で言つた。——「二度とふたゝび、あんなところへ行くものか、たとひ餓死したつて……」

うまうまと小切手をせしめたときの、あの蟬鼓町で始めて「小金」を握つた「合百相場師」らしい卑しい表情は何時の間にか悲痛な相好に變つてゐた。

「だがね、そんなことは言はない方がいゝんだ、——おれたちはもつと自分をカリカチュライズする必要があるんだから、」

と、西方現助が昂然として、彼の顔を睨みつけながら「在郷軍人」の勳章を勢ひよく埃つぽい路上に投げすてたのである。——「おれたちはあの應接間では藝術家でも何でもないんだからね、重い荷物を背負つて臺所口から今日は、と言つて入つてゆく御用聞きと同じことなんだからね、文學もへちまもあるものか。——へえ、今日は新しい大根が御座いますが、いや、ほかにも南瓜でも茄子でも……といった調子で、——だから、誰に對しても恥づる必要はないのだ、あの應接間の中で『屈辱』を感じて歸つ

てくる位ならむしろ、いさぎよく自殺してしまつた方がいゝんだからな、——あの資本主義のロボットに對して、おれたちの文學者の氣魄を護りとほすためには、かういふ風にもう一つ先きのロボットになりきるよりほかに道はないのだ！」

一息にしゃべつてしまつてから、しかし、彼は不思議に妙な不安を感じた。たつた今、あの應接室の中で、隅の方のテーブルから、おそるおそる立ちあがつた自分の姿が、喩へやうもなく哀れな「かたち」をとつてうかびあがつてきたからである。しかし、彼は此處で負けてはゐなかつた。このひとり相撲の名人は、惨めな感情をすりぬけるために（——それにしてもいかに長い間彼は自分の幻影と取つ組んできたことであらう。いや、彼だけではない、世にも哀れな文學者の多くが貧乏ゆるぎもしない人生の胸に一生を賭けて突進していつたことであらう）——反省的な良心を見事に土俵際ではたき捨てながら、

「——おれたちは、今こそ、紙の鎧を着て、ドン・キホーテの假面をかぶるのだ、いゝかね、無反省に大膽に、文學の瘦せ馬にまたがつて……」

「だがね。」

と、仁木一郎が、かすれた聲で言つた。

「——おれは今日で四日家をあけてゐるんだぜ。毎日毎金を工面しては、今夜こそ如何しても家へ歸らうと思ふのだが、さう思ふだけで、おれはもう自殺したくなるよ。金、金、金——あゝ『なんぢが得

たるケチ臭き錢を握つて枯れたる街樹の幹にたゞきつけよ」か……」
 彼は氣取つた調子で諷ふやうにかう言つてからもう一度べつ！ と唾液を吐いた。彼の頭の中には蒼ざめて、とげとげしく瘦せおとろへた妻の顔が閃めいたのである。それから月末が近づいて、喚くやうに臺所口から殺倒してくる借金とりのむれが……。すると、昨夜の亂醉の疲れで、後頭部が錐で刺すやうに痛みだした。——「だから、おれたちは結局、このしみつたれた感情の中で没落してしまふよりほかに道はないんだ！」

「ほう。」

と、西方現助が、そのとききよんとした顔をして立ちどまつた。——「没落するつて、いや、おれはもうそんな理窟には飽きあきしたよ、おれの没落はそんな生やさしいものぢやないんだからね。寄生蟲のやうなインテリゲンチユアに没落する氣力なんかあるものか、すくなくとも『談風社』へ大根を賣りにゆくインテリゲンチユアにはね——だから、おれは。」

と、彼はドン・キホーテの假面の下から冷笑をうかべながら言つた。——「あの應接間の中でポロイ儲けをするいろいろな藝當を知つてゐるのだ。まるで花がるたの『インチキ』みたい……だから、おれは今日も腐つた胡瓜を賣りつけてきたばかりなんだ！」

しかし、その夜、銀座裏のカフェーの二階で西方現助と仁木一郎とはテーブルを挟んで向ひあつてゐ

た。宵の口から一軒一軒と飲みつゞけてゐる酒で彼等は陶然として酔つてゐるのであつた。それ故、仁木一郎の頭の中からは哀れな妻の幻像はまつたく消え失せてしまつてゐた。彼は今夜九時に早番で歸つてくる女給のマリ子と新橋の驛の裏の小さな喫茶店で落合ふ約束をしてゐた。十八歳のマリ子よ、——今夜こそ、おれは無反省に突進して行かう、と彼は思ふのである。だから、酒を飲まねばならぬ。あの、うす濁つて、じめじめした家庭なんぞおれは何時だつてぶつ壊してしまふぞ、——今夜こそ、さうだ、今夜こそ、——。

しかし、西方現助は——お、何と彼の心は哀れた空想の中を泳ぎはじめたことか。(彼は半歳前に前の女房とわかれて、新しい家に一人の女と暮してゐるのである)——彼はふと半歳前に飛び出したまゝ一度も歸つたことのない昔の家をおもひだしたのである。夜空の星の下に高く波をうつて起伏してゐる丘にかこまれた小さい村を、そしてそこに置き忘れてきたきれぎれの回想を、彼は、かつて自分の部屋であつた葦葺屋根の下の六疊の部屋を思ひ出した。八年間使ひ古した小さな紫檀の机を。赤い花をいろいろどつた明るい壁紙の色を。出窓の前の大きな備前焼の壺を……。

「さあ——」

と、そのとき、仁木一郎が慌てゝ時計を見てから「キユラソウ」のグラスをぐつと一息に飲みほして止ちあがつた。(——もうあと二十分なのだ、それまでに西方現助をまいてしまはなければならぬ！)

「お、おれは今夜、もう一晩何處かで飲みあかして、明日から生活をふつきりと改めるよ、こんな生活の中に何の新しさがあるんだ、おれは……」

「めそめそするなよ。そんなやくざな生活なんぞに拘泥してゐて何が出来るんだ、おれを見ろ！ このおれを！」

しかし、西方現助の頭の中がぼうつとかすんできた。彼の眼は悲しげに瞬き、その顔は電燈の光に赤黒く輝いてゐた。彼はぐつたりとうしろの壁によりかゝつてゐた。それ故、また彼の心もひとすぢに過去の記憶の中へ倒れていつた。それから、彼はよろよろと立ちあがつて帽子をとつた。だから、仁木一郎が階段を飛ばすやうにおりて街頭に飛びだしたときには瘦せ馬にまたがつたドン・キホーテの姿は雑沓の波にまぎれて何處にも見出すことはできなかつた。

(その三) ビストルを賣る男

——その道はうねうねと、ゆるやかな勾配をもつてつゞいてゐる。月光の下に村は安らかに眠つてゐるのであつた。何といふ静けさだ。そして、何も彼もが半歳前とそっくりだ。變つてゐるのは、ぐらつく身體をやつと腰のあたりで重心をとりながら、よろよろと歩いてゆく西方現助だけである。白い路の上に彼の影が長くゆれてゐる。初秋の風が彼の着物の裾を煽つて、瘦せた毛脛が月光の中にかびあが

つた。一つの丘をのぼりきつたところで彼は立ちどまつた。(この道を、幾度び彼は深い哀傷におびえながら往復したことであらう。その半歳前の不快な、うすじめつた記憶は心の何處にも残つてゐなかつた。今は、苦しかつた過去の生活に對する感謝の念だけが彼の心を捉へたのである。) 彼はくると向きを變へて、暗い窪地の方へ曲る坂道をおりていつた。雜草が露にしめつて、冷たい感觸が草履の裏から沁みてくる。暗い、暗い、——竹藪にかこまれた、まるで街燈一つない道なのだ。彼は自分の家の前に立つてゐるのである。門が半分あけたまゝになつてゐて、しかし、それにもかゝらず家の中はまるで眞つ暗だ。夜風にはたかれた裏木戸が、無氣味な音を立てゝ鳴つてゐる。——まるで、これは人殺しのあつたあとのやうではないか。彼はそつと足音を忍ばせてその窓に近づいていつた。すき間から覗いてみると、がらんだりの部屋の中に一人の男が死んだやうになつて眠つてゐる。その横に、窓の方に顔を向けて、ぢつと一人の女が、これも安らかな寢息を通して眠つてゐるのだ。骸骨のやうな細い腕が闇の中に軽く動いて、——一瞬間、西方現助は不意に心の底にひやりとしたものを感じた。彼はそのまゝ、そつと身をひいて白い砂利道へ飛びだしたのである。明るい月夜だ。(酔ひが、疲れのために彼の脳髓に沁みとほつてゐた)——それにしても、如何したといふのだ。これはまるであり得べきことか、あり得べからざることか、——例へば若し、あの窓の中で眠つてゐた男がむくむくと起きあがつたとしたら、(そして、事實、その男は起きあがつたのである)——そして、その男の顔が彼自身であつたとしたら、

(お、まことにそのとほりだつた!)……月光の中を踰越として泳いでゆく彼のあとから不安におびえた「別」の彼が追つかけてくるのである。行手には人生を貫く空想の道路が白く輝いてゐるのに、——しかし、それにもかゝらず陰惨な過去の現實が、無気味な駭を描いて彼の心へぢりぢりと忍びよつてくるのである。(村中の犬が一せいに吠えだした!)

だが、しかし、それはほんの數分間にすぎなかつた。今——彼を乗せた一臺の「圓タク」が現實の街路をすべつてゐるのであつた。その「圓タク」が、がたりと音を立てるとまつたのである。彼は夢の中から弾き出されたやうに今、自分の住んでゐる家の前に立つてゐる自分を見た。その中の一室に新しい「愛慾」が彼を待つてゐるところの家の前に。

さて、格子戸が不意にあいたのである。そして、一人の男が幽霊のやうに首をつき出した。

「西方さんですね?」

その男は明るい聲で叫んだ。——「夕方から来て、ずるぶん待つてゐましたよ、もう駄目だらうと思つて歸らうと思つてゐたところですよ。」

それは社會運動者の石塚だつた。その顔は極度の緊張のために顫へてゐた。

疊の上で向ひ合つて坐ると、石塚はやつと低い聲で言つた。——「ピストルを買つてくれませんか?」
「何だつて、——ピストル」

石塚は懐の中から一挺のピストルをとりだしたのである。ブrowningの小さいピストルは、石塚が銃身をひくごとに横から勢ひよく弾丸が一つ一つ疊の上にはじけ飛んだ。

——「僕はね、急に身邊が危なくなつてきたんですよ、だから、こんなものを持つてゐると……」

と、石塚の姿勢は西方の幻想の中で少しづつ崩れはじめた。——「このピストルは、二三年前に上海にゐる僕の友人が……」

「いよ、もういよ、そんなことは。」

と西方現助が彼の言葉を遮つたのである。そして、彼はピストルをとりあげた。するとその小さな銃口から放射される「新しい人生」が喩へやうもなく彼の心をひきつけた。そこで、彼は袂の中から緻くちやになつた一束の紙幣(腐つた胡瓜の代價)を出して懸へはじめた。

(その四) 小説家の現實

「ドン・キホーテ」は到頭一挺のピストルを手に入れた。ブrowningの七連發、豫備の彈丸三十六發。

——お、こんな素晴らしいピストルが減多に手にはひつてたまるものか。一體、小説家の誰がこんなピストルを持つてゐるであらう。この引金にちよいと力を加へるだけで、このじめじめした退屈な人生をたちまち混亂に陥れてしまふことができるのだ。若し必要ならば自分の息の根をとめてしまふこと

もできるし、それから、猫だつて鼠だつて、たつた一發で仕とめることができるのだ。あの弾丸の一つ一つが新しい「事實」と「奇蹟」とを放射する用意を整へてゐるのではないか。——彼は、そのピストルを持つて部屋の中をぐるぐると歩き廻つたのである。(お、かうなれば「過去の幻影」なんぞ糞喰へだ。濁つた構想で埋まつてゐる脳髓なんぞ、微塵になつて碎けてしまへ！)

さて、その夜の、明け方近くであつた。街は死んだやうに静かだつた。墓場にかこまれてゐる高臺の彼の家から広い坂が通りに向つてつゞいてゐた。その坂を下つて、省線電車の踏切へ出ると、すぐ下が海だつた。月光の中に家々の軒は低く垂れさがつてゐるやうに見えた。それに静かな海が何と夢のやうに蒼白く輝いてゐることか。——そこへ、西方現助の姿が唯ひとつ、ひよつこりとうかびあがつたのである。

彼の懐の中には實弾を裝填したピストルがはひつてゐる。彼は大膽に、すたすたと海に向つて歩いていった。頭の上には高く晴れた空があつた。彼は兩足を力強く踏んばつて、それから右手に握りしめたピストルの銃口を空に向けた。一瞬間彼は引金を引かうか、引くまいかと考へた。だが、しかし、西方現助にそんな勇氣があるものか。彼はそつと、あたりを見廻してから、ピストルを懐の中へしまひこんだ。

あたりは途方もなく静かだつた。無論、何一つ變つたことはない。——彼は元の道へ向つて歸りはじ

めた。そのとき、一つの變化が、彼の空想とはまつたく縁もゆかりもない方向から起つてきた。——踏切の向うに一つの影が現はれたのである。一つ、二つ、三つ、四つ、そして彼の眼の前に、靴音が高く鳴つて、脊の低い、三角形の赭ら顔の、「あご」のしやくれた冷酷な瞳を輝かした男が現はれた。彼はどきつとして立ちどまつた。その男たちが「スリ」や「泥棒」のあとからついてゆくことによつて生活を立てゝゐることを知らぬ者はあるまい。(此處にも法律のつくつた人造人間があつた！)——その男と、自分との關係がはじめて彼の頭の中に一つのかたちをとつて現はれてきたとき、太い聲が彼の耳のそばでひびいてきたのだ。

「一寸、待て、——お前は何處へ行くんだ？」

「家へ、——家へ歸るんだ。」

「家は何處だ？」

「このすぐ上だ。」

「何故、今頃歩いてゐるんだ？」

「散歩……」

と、彼が言ひかけたとき、彼の身體は四つの顔によつてかこまれてしまつてゐた。一つの頑丈な手が彼の肩を壓へてゐるのであつた。

「ふん、——なるほど、散歩にもいろいろあるからな、それで、お前の商賣は何だ？」

「小説を書いて……」

「そんなにびくびくするな、ぢやあ、小説家だな。」

しかし、そのとき、ほかの一つの腕が素早く彼の懐の中をさぐりはじめたではないか。次の瞬間、その男の手にはピストルが握られてゐた。お、何だつて、ピストルが「奇蹟」と「新しい人生」を封じこめたピストルが——？

「おい、こんなものが小説家の懐の中から出てきたよ、——近頃の小説家は。」

と、鬚の生えた肥つた男が得意さうに鼻をうごめかした。——「近頃の小説家は、君、小説を書くのにペンを使はないでピストルで書く」と見えるね、何しろこんなものが出てきちやあ黙つて歸つていたよ、くといふわけにもゆかないね。」

その男はもう一度得意さうに鼻をうごめかした。何しろ世の中にはピストルを持つて街を徘徊する男が加速度に殖えつゝあるときであつたから。そして、いふまでもなく。鬚の生えた肥つた男の探し求めてゐるのはさういふ種類の物騒な男にちがひなかつたから。それにしても、哀れな、ドン・キホーテよ。月光は遠慮なく彼の蒼ざめた顔を照してゐた。白い坂道には長い影がもつれて、西方現助は、たちまち空想の瘦馬からひきずりおろされた。實弾を装填したピストル。それに袂の中から豫備の弾丸が三十六

發。この兇惡な「ピストル強盗」を見事に捕縛した刑事の顔が燃えるやうに輝いてゐたことはいふまでもないであらう。見よ！坂の上にある警察署の中は俄かに活氣づいてきたではないか。前の晩酒に酔つて、いゝ氣持にぐつすり眠つてゐた宿直警部は慌てゝ起きあがつた。そして、犯人を幽閉するために留置場の扉がひらかれた。そして、すぐにばたん！と止められた。

(その五) 藝術的良心

——その夜、仁木一郎はまるで夢から醒めたやうな氣持だつた。露地をつきぬけると彼は、ほつとしたやうにうしろをふりかへつた。

高い石垣の上に電柱が立つてゐた。それ故、空から落ちてくる灯かげの中にその小さい家の建てこんだ裏長屋の一廓が憂鬱な影を曳いてうかんでゐた。いや、——嚴密に言へば憂鬱なのは長屋の一廓ではなくて、がらんとした坂の傾斜面にうかびあがつた彼の姿だつた。

——さうだ、これは何といふ新派喜劇だ！と彼は思った。(お、すべての喜劇には彼のごとき悲劇役者が必ず一人は必要なのである！)

仁木一郎は暗い坂をのぼりつめて、廣い電車通りへとびだすと、長い溜息をついた。それはさうと、とんでもないことになつてしまつたぞ、——まるでこれは劍劇一天張の役者が人情芝居の二枚目にをさ

まらうとしたやうな間違ひだ!

街はすっかり夜更けたつた。つい一時間前まで、夜店が兩側にならんで雑沓の波がどよめいてゐる廣い電車通りは急にしんかんとして、ときどき横町から出てくる人の影が埃つぽい大地をのたうつて、彼の視野をかすめてゆくだけだ。うそ寒い感情の雫が不意に彼の胸の底に落ちてきた。——さあ、今夜、何處へゆくのだ?

彼はもうすっかり酔ひが醒めきつてゐた。二時半だ。電車はむろん無いし、圓タクに乗る餘裕もないし、——いや、かりにあつたとしたところでこんな晩に如何して圓タクなぞに乗れるものか!

二時間前、仁木一郎とマリ子に乗せた自動車は上野の方角に向つて走つてゐた。何か一つの限界を突破したやうな氣持だつた。「だが、しかし」と、彼は、すっかりへまをやつて舞臺の上からほうほうの體で逃げだして大根役者のやうに悄然として考へるのである。「おれはたしかに一つの仕事を果したのだ、だから、もつと愉快になれ、もつと……」

然らば彼は、どんな仕事を果したのか。「おれは——」と彼は考へつゞけるのである。「生れてはじめて積極的になつたのだ、そして堂々とへまをやつてのけたのだ!」

いかにも彼のやつたことは堂々としてゐたにちがひない。何故かといつて、若し彼がほかの男だつたら、月並にこの自動車を巧みに森ヶ崎まで走らせることができるであらう。彼にはできなかった。彼は

まるで北海道から上京してきた遊覽客のやうに東京市内をぐるぐる走り廻つた。それから、最後に女の手で數枚の紙幣を握らせて、たつた今、彼女を郊外の新開地の露地にある家まで送り届けてきたばかりである。(圓タクの中で彼がいかに堂々とへまをやつたかといふことについての説明は避けやう、このやうに經濟觀念の乏しい人間があるといふことは、いや、それだけでも氣の早い讀者は笑ふよりも以上に怒りだすにきまつてゐるから——)

さて、彼は、暗い坂道をのぼりながら、哀れな妻のことを考へるのである。——「これは妙なことになつてしまつたぞ、こんなことになる筈がない——」

「蒼ざめた妻の顔」と「月末の窮乏」とがこのときほど彼の心に慌しく、しかし、しみじみと迫つてきたことはない。それ故、その翌日の午後、彼が新しいドン・キホーテの扮装で、談風社の應接間へつゞく階段を、せかせかのぼつていつたとしても少しも不思議は無いであらう。しかし、彼の相場は、この市場のテーブルの上で極度に下落してしまつてゐた。彼から一束の原稿を受けとつた従業員は、恐縮して出ていつたが、しかし、すぐに同じ原稿を持つて入つてきた。

「——唯今の、この原稿で御座いますが、社の方針としてはかういふものはいたゞけないことになつてゐるので御座いますが、特に御便宜を圖つて、普通の稿料の半分ほどでよろしければ御融通申上げてもよろしいといふ部内の意見で御座いますので……」

「いや、結構です、ぢやあ、さういふことに。」
 彼はあたりを見廻してから、低い聲でさう言つたが、しかし、一瞬間、彼は何ものかに烈しくうちのめされたやうに慌てゝ立ちあがつた。

「——いや、止ませう、僕には、僕には、良心がありますからね。」

彼は疝高い聲で叫んで、呆然としてゐる従業員から商品を奪ふやうにうけとつた。そして扉の方へ歩いていつた。そのとき、ユーモア作家の八木放亭が、——若し彼があたとしたら、そして、仁木一郎のうしろ姿を見つけ出したとしたら、——立ちどころに例の野卑な笑ひを唇の上にかべたであらう。

——「まるで、値切られて、ヒステリーを起した不見轉ぢやないか！」

——しかし、八木放亭はゐなかつた。そして彼のかはりに、仁木一郎の友人である新進作家の笹塚銅吉があつた。(彼は左翼的思想を「砂糖漬」にして賣り出した男だつた。近代人はその位に融通が利かねばならぬ、——これが彼のモットーだつたから。それ故、その文壇小間物商人は、この市場のテーブルでは、セルロイドでつくつた武者人形をひろげたところだつた)……彼は仁木のうしろ姿を見ると衝動的に立ちあがつた。しかし、仁木の身體はそのとき扉の外に飛び出してゐた。そして彼の懐の中にはもう一錢の金も残つてはゐないのであつた。それに、間の悪いことには外は思ひがけない雨だつた。——灰色に曇つた空が彼の頭の上から、それはさながら彼の生息してゐる時代のやうに重苦しくのしかゝつ

てゐた。畜生！ 雨だつて構ふものか、彼は絶えず泥濘に吸ひとられる草履の不快な音を聞きながら歩き出した。そのとき、彼の頭の底に西方現助の昂然と肩をそびやかした姿がうかんできたのである。……

……「おれたちは今こそ紙の鎧を着て、ドン・キホーテの假面をかぶるべきだ！」

だが、しかし、紙の鎧は雨の中に萎れかへつてしまつた。紙の鎧だけではない、雨は彼のセルの單衣をとほして「藝術的良心」にまでも沁みとほつた。それ故、彼は喘ぎ喘ぎ廣い坂道をのぼりはじめた。いや、彼ではない、ずぶ濡れになつた「藝術的良心」が……。

「苦命」たち

その一人の男

その男は夜中に街を歩くことがすきであつた。それについて、私は彼が私に言つた言葉を憶えてゐる。「私は絶えず、自分の中に何かしら求めてゐる氣持になりたいのです。」

ある夜であつた。私は彼を吳淞路の町はづれにある薄暗い露路の中に訪ねた。露路をつきあたつて左に曲り、古さびた壁の臭のする倉庫にそつて歩いてゆくと、三角形の廣場に出るのだ。

その隅の木造建の三階の家の二階の窓に一つだけあかりがついてゐる。カーテンがないので下から見上げると、窓硝子にたまつた埃が黒いしみのやうに浮いて見える。暗い袋地に、一條の明るさを投じてゐるのは、この一つの窓だけであるのに、この窓からあかりの洩れてゐることが、どんなに露路の空気を重苦しくすることか。それは、言つてみれば、この室に住む老人(まつたくこんな陰鬱な場所に若い

人の住んでゐる筈がない)は長い間彼を嘲らしてきた不幸から心を避けようといふ氣持を失つてゐるのだ。窓をあけて清新な空気をよび入れる必要がないのだ。

この窓を見上げるとき私は何時も、さういふ感じに牽ひ入れられる。その感じは此處に住んでゐる人が誰であるかといふことを思ひ返す隙のない程の速さでやつてくる。私は、ときどき、この窓の前に立ちどまつて、大きい聲で、その男の名前を呼んでみようかと思ふことがあるが、もし私の聲に應じて誰かの顔が、あの薄曇つた窓にうつるとしたら、それは、この室の片隅に置いてある壊れかかつたカンブ。ベッドの上に傲然として胡坐をかいてゐる、生き生きとした男、彼の顔ではなくて運命の不幸に對する抵抗力を失ひつくした、言はば人生の陰影だけを背負つて立つてゐるほかの老人の顔だといふ氣がするのだ。それほど、この古く、くすんだ露路の空気があり得べからざる幻想をかきたてる。

この家の中には、すくなくとも六人の人間が住んでゐるらしい。だが、何と彼等が幽霊のやうに見えることか。私が裏木戸をあけて便所の横から斜めにのびてゐる細長い階段をあがつてゆくと、兩側の室には何時も人のゐるらしい氣配がするのに、窓のあかりのついてゐたことがない。いや、その筈である。彼等にとつてあかりほど不必要なものはないのだから。――

私が彼の室に近づいてゆくと、足音が聞えたのか、中から鍵をがちやりとはづす音がして薄い扉が勢ひよくあいた。すると、煙草のけむりが渦を巻いて霧のやうに私の視線を遮つた。けむりの中から、彼

の眼鏡をかけた大きな顔が笑つてゐる。

「ひどいけむりですね。」

その男は、さう言つた私の言葉には答へないで、けむりによつて掩はれた正面の壁を指差した。「これを朝から描いてゐたんです。」

壁とすれずれに十五號大の畫板が立てかけてある。そこには無数の色彩が、繪具のチューブを畫板に向つて不統一に放射したとしか思はれないほど、亂雑になすりつけてある。だが、ちつとその前に立ちどまつて、視線を凝らしてゐると、向ひ合つてゐる二つの顔の輪廓が段々、鮮かに浮かんできた。やがて顔を基點として全幅の輪廓が私の視線の中にひろがつてきた。

脊の高い一人の男が出齒庖丁をふりあげてゐる。粘つこい鮮血が、その男の頬を彩り、首から胸のあたりまで赤く染めてゐるところを見ると、うしろに半圓をえがいて倒れかかつてゐる男は、胸に致命的な傷をうけてしまつたらしい。この兇行はよほど咄嗟の間に行はれたものにちがひない。だが、畫面には、さういふおそろしい構圖以外に何かしら一種の明るさが流れてゐる。――

「僕は昨日、北四路の通りを歩いてゐて、ふいとへんな衝動を感じたのです。最初は何だかわからなかつたが家へ歸つてきて畫板に向つてゐると心の底に鬱結してゐたものがだんだんはつきりしてきました。これは私の、運命に對する冷笑です。」

彼は、丸い籐のテーブルの上に置いてあつた四角い葉巻の箱を自分の方に引きよせて、無雜作に一本とりあげ、吸ひ口を齒で噛みきつた。

「つまり、私はこの畫板に現はれた二人の男の運命を同時に自分の心の中に感ずるのです。此の畫板の前に立つてゐると、私は今まで遠くはなればなれになつてしまつてゐた自分の中の二つの運命が、ひよつこりと出會つたのだといふ感じを受けます。」

私には彼の言葉がよくわからなかつた。しかしこの話をするときの彼の表情は非常にゆつたりとした落ちつきを示してゐた。それは今彼の心が何か一つの「莊嚴」に當面してゐることを思はせた。

「どうです。外へ出ませんか？」

不意に彼が言つた。それから彼は身輕に仕事着の上に外套を羽織つて扉の方に歩きだした。私は彼がすつかり愉快になりきつてゐるにちがひないと思つた。こんなにそわそわと饒舌りつづける彼を見たのは始めてなのだから。

露路へ出ると、しかし、私はもう一度、彼の部屋である二階の窓を見上ることを忘れなかつた。燈光はゆるく大氣の暗の中に浮んでゐたが私の頭には何の幻想も起らなかつた。若し私の眼の前で、私と肩をならべて歩いてゐる彼が急に一人の見知らない老人の姿に變つてしまつたとしても私は最早あり得べからざる現實におどろく必要がなくなつてしまつてゐるのだから。

彼は露路を、通りの方とは反對に奥へ奥へと入つていつた。そこはやつと身體が通りぬけることがで
きる位の狭い道幅しかなかつた。道は泥濘のやうにぬかるみ、ともすると靴がすべりさうだつた。それ
に兩側に向ひ合つた壁から傳はつてくる臭氣は、腐れかかつたアンモニアの臭を含んでゐた。しかし、
その潜り穴のやうな道は一町ほどで終つた。

私たちの前には蒼白い瓦斯燈があつた。

「君、——あれを御覽なさい。あの色を。僕は毎晩、おそくなつてこの瓦斯燈の前に出ることにひやり
とする。この光の中に立つてゐる人の顔を見ると地獄から浮びだしてきた人間のやうな氣がする。それ
に、この瓦斯の火は夜が深くなるにつれて變つてきます。僕はこの瓦斯燈がおそろしいのです。それだ
のに毎晩一度づつ此處を通らなければ居られないのです。何と言つて説明したらいいですかね、つまり
自分の心が『死』にひきよせられてゆく氣持です。」

しかし、左手の道は街の明るみの餘波をうけて洞穴の入口のやうに見え、そこから電車の轆音がひび
いてきた。その響は私の心を古くさい現實に呼び戻した。

十分の、私は、虹口通りにある薄ぎたない茶館、美男居の二階で何時ものやうに小さいテーブルを
挟んで彼と向ひ合つてゐた。

「私は、もう一週間位で南京にゆくつもりです。」

彼は思ひだしたやうに言つた。その唐突に洗滌な聲が私を驚かした。彼の表情にはさつきの明るさが
少しも残つてゐなかつた。その眼にはほとんど絶望的なおそれさへ現はれてゐた。

「僕はもう上海にゐるのが恐ろしくなつた。何か異常な變化が運命の上に現はれさうな氣がする。」

茶酌み男が茶の入つた大きな藥罐を持つてやつてきた。私は黙つて窓の外に眼をうつした。吳淞路の
電車通りでは上海の春の夜が漸く眼を醒ましたばかりである。

その男の友人

「君は苦命といふ言葉を知つてゐますか？」

さう言つて私に話しかけたのは吳淞路の露路に住んでゐた男の友人である。露路の放浪者が飄然とし
て南京に去つてから二日目の朝、私は共同公園でその男とばつたり出會つた。

私と彼とは黃浦江に面した細長いベンチに並んで腰をおろしてゐた。

四月であつた。芝生の丘を越えたるの音樂堂では、朗かな春の演奏がはじまつてゐる。

「苦命——」

言ひかけて、私はちよつと、どきつとした。

何故なら、私はその男が私の言葉の中に求めようとしてゐる、ある無氣味なものに觸れたやうな氣が

したから。言ひ換へれば、それはあまりにも彼自身の生活を象徴した言葉であるにちがひないのだから。

私はこの同じ言葉を最初四馬路のプロステイチュートのむれの中で聞いた。それを、その夜、淫賣窟へ私を案内した一人の若い放浪者が説明してくれたのだ。

「一口に言ふと、ああいふ女たちの信仰なんです。あの女たちは自分が苦命であることに安心を持つてゐるのです。つまり自分を善くしようとするすべての努力が無駄であるといふことに……」

女たちの多くは彼等の親を知らなかつた。親の愛を求めようとするこすらおそれるた。何故なら、何事かを求めることは言ふまでもなく運命の罰を蒙ることであるからだ。

で、その一瞬間、私の表情の中に現はれた、かすかな狼狽をその男は感じたらしかつた。

「人間は長い間放浪してゐると遠い過去の出来事をつかり忘れてしまふものです。何處へ行つても同じやうな運命ばかり見せつけられるからですね。これも自分の通つてきた道だ。これも、これも、と思ひつづけてゐるうちに何も彼も同じもののやうに見えてくるのです——」

彼は一人で饒舌りつづけた。

「あの人が南京へゆくとき、私はありありと十年前の自分を見たやうな気がしました。こんな姿が自分にもあつたのだといふことを咄嗟の間におもひだしたのです。」

「しかし、あの人の歩んでゐる道は同じやうには見えても、あなたとは全く別のものではないでせうか？」

「いや。」

彼は垢によごれて皺くちやになつてゐる古い型のハンチングを慌ててぬいだ。

「全く同じものです。同じものでないとどうして言へますか。形がどんなに變つてゐても私たちは結局同じものです。同じ方向に向つて歩いてゐるのです。」

この男の聲は、絶えず、誰かをおそれてゐるもののやうに底の方で顫へてゐた。

そのとき、黄浦江の水面に不意に小型の商船が現はれた。楊子江の河口から来たのであらう。何處の國の船ともわからないが、船體を塗りつぶした黒い色はところどころ剝げ落ちて、この船全體に朽廢しかかつた印象を與へた。

少しく前に傾きかかつた一本の煙突からたちのぼる茶褐色の煙は風のためにブートンの方角に吹き流されてゐたが、それは火葬場の煙突からのぼる憂鬱な煙を思はせた。そのとき、私は彼の顔に異常な緊張の現はれたのを感じた。だが彼は黙つて船の動きを見詰めてゐた。

やがて船は無数にうかんでゐる舳板の間をくぐつて下流の方へ消えていつた。

「あの船を私は此處でよく見るのです。いや夢に見ることもあります。——あんな船が存在してゐるこ

とは、たしかに時代錯誤でせう。しかし、誰だつて、あの船を見て憂鬱にならない人があるでせうか。」
 私は、はじめて彼の言はうとしてゐることがわかつた。運命の不幸に向つて永久に同じ航海を續けてゐる一艘の船、——私がそれを見たのは一瞬間の慌ただしい幻想に過ぎなかつたのではないかといふ氣がした。

後の音楽堂では新しい音楽が始まつた。それに續いて一團の群集のほがらかなざわめきが急に私の胸に新しい希望を甦らせた。

しかし、この不幸な男は、ねつとりとした口調で彼の話を續けた。

「私には時の經つてゆくのがおそろしい氣がします。今はもう何をやる力もないのです。もつと早く、死ぬことのできた時に死んでしまへばよかつたといふ氣がします。今は死ぬことすらおそろしいのです。私には、今自分が日本人であるのか、それとも何處かほかの國の人間であるのか、それすらわからなくなつてゐます。——私にはすべてのものが、すべてのことがみんな同じに見えます。世の中に進歩してゐるものが一つだつてありますか？ この二三年前から私はもう畫を描かうとする氣力すら失つてしまひました。」

彼は低い聲で早口に饒舌り終ると、そのまま立上つた。

「どうです、少し郊外の方をお歩きになりませんか？」

「歩きませう。」

花園橋の上は人で埋まつてゐた。春の陽がどす黒い水面に落ちてゐるが、橋のかけになつてゐるところだけ、さびれたやうな暗さが漂つてゐた。

橋を渡ると、大きな西洋の商館が兩側に建ちならんだ、ひろびろした往來へ出る。

彼は首を前にうなだれた一種の姿勢を保つて大膽に歩いていつた。その後姿は、彼の生活の不幸とは反對に何か一つの晴れ晴れとした目的に向つて突進してゆく人のやうに見えた。——

道が二つに岐れたところで彼は立ちどまつた。

「どつちへゆきませう。」

右の道は、ごみごみとした支那街の雑沓に續き、左の道は静かな流れにそつてゐた。

「どつちでも。」

すると彼は左の道の方に足を向けた。この道を眞直ぐに行くと、北四路路電車通りへ出るのだ。川に向つて煉瓦づくりの二階家がならんでゐた。私はこの道を毎朝歩くことにしてゐるので、どの家にもどんな人が住んでゐるかといふことを知つてゐる。朝早く通ると大抵二階の窓が明け放たれ、川に面した細長いバルコンには、この一つ一つの家の家族らしい人たちが一かたまりになつて、うれしそうに話しかつてゐる。僅か十軒足らずの長屋であるが、此處だけは街の騒音から離れて非常にしつくりした善

良な生活が営まれてゐるといふ感じがした。
 一番はづれの家の二階には若い日本人の夫婦が住んでゐて、朝飯が済むと亭主は會社へ出かけてゆき、若い細君が一人正午近くまでバルコンの上で籐椅子に身を支へながら編針を動かしたり雑誌を讀んだりしてゐる。私はその妻君が、バルコンの下を人が通るごとに急いで街を見下ろすときの姿勢がすきであつた。その細君が今日もきつと私の姿をみとめるにちがひない。——
 しかし、もう時間がおそすぎたのか、室の窓は明けてあつたが、バルコンの上には人の影も見えなかつた。

道はだんだん傾斜になつて、人家は途切れつた。

ふと、彼が立ちどまつた。

「私は此の道を通つたことはほとんどありません、此處を通ると、私は何か大きな罪を犯してゐるやうな気がするのです。」

私は何と言つて返事していいかわからなかつた。この男の頭が、何か薄氣味のわるい幻覺に脅かされてゐるにちがひないといふ氣がした。

「あのはづれの家に若い日本人の夫婦が住んでゐるのです。」

彼は私たちの歩いてきた長屋の方へ視線をうつした。

「知つてゐます。あの細君の方だけ。」

「御存じですか？」

彼は急におどろいたやうに胸をうしろにひいた。

「いや、朝、散歩するものですから顔だけ知つてゐるんです。」

そのとき、私の頭には、編物を動かしながら、ときどき夢の中を探るやうな視線を路上に投げてゐる彼女の顔が映つた。

「その女です。私はその女を昔知つてゐたのです。つまり、私の妻だつたのです。」

その聲はかすれるやうに低かつたが私の胸を突き刺した。

「五六年前の話です。女は私を捨てて逃げてしまつたのです。それだけのことですがね、私は女と同じ土地に住んでゐるのが恐ろしいのです。あの女は若し私と顔を合すことがあつたら氣絶してしまふでせう。それだけでも私は大きな罪を犯してゐるのです。」

「どうして、それがあなたの罪になるのです？」

「いや、私にはこれ以上の罪はありません。私は未だ五年前に私を捨ててしまつた女に執着を持つてゐるのです。——」

私は彼の頬にかすかな火照りの現はれたのを感じた。

「私はあの女を良く知つてゐます。あの女は永久に私を裏切つたといふ罪の記憶から逃れることはできないでせう。あの女はもう完全に私の運命の奴隷になつてゐるのです。その言葉がおわかりになりますか？ 要するにわれわれは一つの生活をしてゐるのに過ぎません。これは恐ろしいことです。」

私は彼が饒舌つてゐる間、彼の横顔を見詰めてゐた。その表情は、言葉の一つ一つを象徴してゐるかのやうに眼まぐるしく動いてゐた。それは、すべての言葉が彼の顔によつて語られてゐるやうな感じであつた。しかし、彼はそれきり黙つてしまつた。

私たちは雑沓の街を歩いてゐた。

彼は人混みの中をかきわけるやうにして歩いていつた。私は何か不思議な力に引きずられてゆくやうな氣になり、何時の間にか彼と同じ姿勢をとつて歩いてゐた。

街が盡きると、ひろびろとした郊外へ出た。茶種畑が右手に大きな傾斜をつくり、その前に背の高い印度巡捕が一人、銃をぶら下げて立つてゐた。

道の行き詰りに、平家建の支那軍隊の兵營があつた。高低のついた草原が、その後にはひろがり、遠くの方に白壁の家が一つだけ青い水平線の上にかびあがつてゐた。

「あそこに小高い堤が續いてゐるのが見えるでせう。」

彼が五六歩先のところで私を振り返りながら、草原の一角を指差した。

「私は一年ばかり、畫板を擔いで此處へ通ひつめたのです。」

私たちの前には二條の鐵道線路があつた。それは低い堤の上を、ほとんど一直線に平原を横切つてゐるのであつた。

堤に近づくと、彼は二三歩手前から勢ひよく駆けあがり兩手を後へ引いて演説をするやうな恰好をした。

「私は此處へ始めてきたとき、人生にこんな憂鬱な情景があるだらうかと思ひました。此處に立つて御覽なさい。この二本の軌道はまるで永遠を貫いてゐるやうです。此處には變化もなければ奇蹟もない、唯、おそろしい退屈があるばかりです。」

その聲には何とも知れず屈託のない朗かさがあつた。

「しかし、今の私にとつては、この鐵道線路だけが救ひです。此處へ來ると氣持が明るくなります。人間の運命がこの二本の軌道のために、すべて同じ方向に向つて運び去られてゆくのです。だから、われわれに生きる理由の無いことは死ぬ理由の無いのと同じことです。さういふことがやつと私にわかりかけてきました。」

彼の聲は何か心に一つの誇りを感じてゐる人のやうであつた。

「どうです。あなたも上つてごらんになりませんか？」
 しかし、その瞬間、自分を運命の傀儡だと信じ切つてゐるこの男の姿が私には堪まらなく滑稽に見えてきた。私にはこの放浪者の言葉が盡く一日の退屈をまぎらすために構へられた、思ひつきの嘘に過ぎいなのだといふ氣がしてきた。――
 歸り道に、彼は自分の家に寄つてゆかないかと言つたが、無理に斷つて北四路の終點から一人だけ電車に乗つた。

二日経つた朝、私はその日の邦字新聞に上海驛から一里あまりの平原の中で、一人の日本人が轢死したといふ記事の出でゐるのを讀んだ。その日の新聞では唯、慘狀が報ぜられただけで、轢死者の身許はわかつてゐなかつた。しかし、讀みながら私の胸は顫へた。それが、あの男であることは疑ふべくもないといふ氣がしたのだ。私は急いで顔を洗ひ、新聞を上着のポケットに入れたまま外へ出た。何時もの散歩道を辿つて河岸に出ると、路はまだ露のやうな霧に包まれてゐた。私は煉瓦建の長屋に近づき、おそるおそる一番端のバルコンの上を見上げた。すると、そこには薄い霧を透して二つの顔がならんでゐた。彼女と、彼女の夫。そして、私の頭の上へ朗かな女の笑ひ聲が落ちてきた。私はもう再び上を見る勇氣がなかつた。急いで、その下を通りすぎると私は花園橋へ通ずる大通りの方へ曲つた。

川面をわたつてくる冷たい風が私の鼻奮した感情を撫でて通つた。橋の下には蘇州通ひの民船が列をつくつてうかんでゐた。朝の電車が爽かな響を残して私の眼の前をすべつていつた。

私は欄干にもたれかかつて楊子江の河口に船の煙突からのぼる煙がもつれ合つて空に溶けてゆくのを眺めてゐた。

そのとき、不意に誰かが後から私の肩を敲いた。

「莫迦に早いですね。」

どきつとして振向くと、二日前と同じ服装をしたその男が笑つてゐた。それは恰も私の幻想の中から抜け出してでも來たかのやうに。――

消えてゆく街

I

へんな街だ。

マドロスパイプをくはへた老人が、春の陽ざしの中を歩いてゐる。彼は濃い嵐地のコートを着てゐるけれど、足には白いズツクの靴を穿いてゐる。——今はまだ三月の始めなのだから、たぶん一年中、老人の足は同じ靴を穿いてゐるにちがひない。彼の足どりは歩むことを惜んでゐるやうにさへ見える。短いパイプの管を傳はつて、ゆるやかな煙が陽ざしの中に溶ける。午後だ。彼は今から露路のつきあたりにあるB茶館へゆくのだらう。

彼の眼は、まるで自分だけの運命に安じきつてゐるやうに見える。何處の國の人間だかわからない。若し、そんなことを彼にたづねたとしても、そのだしぬけな質問は彼を狼狽させるにちがひない。——

私は毎朝、同じ街通りで、老人に會ふのだ。同じ恰好の同じ調子でゆつくりゆつくり歩いてゐる。だが、この老人の姿が、いかにこの街に相應はしいことであらう。上海の繁華から、この街が置きざりにされてゐることに全く何の不思議もない。——大きな泥溝のやうな河を一つ隔てゐるだけで、洋風の建築をつらねた大通りが、電車線路を挟んで左右にひろがつてゐるのに、一町足らずの橋を越えると、空気がすつかり變つてゐるではないか！

私は、私のそばを通り過ぎた老人の背後姿を目送した。だぶだぶの洋服が背中のところでもふくらんで、よちよちと歩いてゆく背後姿が、佻しいと言ふよりも、むしろ一種の神々しきをもつて、私の頭の中に沁みひろがつてくる。

老人は、一町ほど離れた活動常設館——その古ぼけた倉庫のやうな建物を掩つたあくどいペンキの繪看板のために私はときどき無気味な幻想を唆られるのだ——の手前の露路の入口で立ちどまつた。その薄暗い露路のつきあたりがB茶館なのだ。

街は、橋の袂から、右に斜線を描いて續いてゐる。幅の狭い本通りの兩側には、小さい長屋のやうな家が、ごたごたとならんでゐるが、さて、何處に、どんな家があつたか思ひ出せないほど、同じやうな

家ばかりなのだ。私たちは、其處で、老酒を買ふことも出来たし、煙草を買ふことも出来た。だが、二三軒置きにやらんでゐる何の裝飾もない煙草屋の店には、私たちの眼を惹つける美しい娘もなかつたし、愛想のいゝおかみさんもなかつた。男も女も同じやうな顔をして同じやうに年をとり、ゼンマイの利かなくなつた人形のやうに、のろのろ動いてゐた。

茶館は朝から店を開いてゐるのだ。二階には何時も大抵きまつた一團の人間が、一つ一つのテーブルを占領してゐる。晝も夜も、其處に集るのは同じ顔ばかりだつた。それぞれの運命に安じきつてゐる、同じやうに疲れた顔は、決して相手を求めようとしなかつた。それなのに、彼等は一團の人間のやうに見える。人生の同じ方向に向つて老いつゝある人間であることを感じさせるのだ。

老人の姿は露路の中へ消えた。

II

「春になるとね、——僕は濟南にゐたときのことをおもひだすよ。」
洋畫家のRが靜かな調子で話しかけた。

私は、バルコンに面した大きい開き窓をあけた。バルコンの上には四方から連り合つた倉庫の屋根のために眞四角に割り立てられた空の一部が、天井をめぐりぬいた大きな窓のやうに見えた。

此の二階は、街の裏通りの露路にあつた。太陽の光は、周圍の倉庫の尖つた屋根によつて全く防ぎとめられてゐた。やつと西日だけが、バルコンのてすりの上をすべつてゆくだけだつた。ちやうど、この暗く濕つばい室の中に住んでゐる人間に、かすかな憐みを垂れるやうに。——

この室の中で彼と對坐してゐると、遠くの方から入り雜つて聞えてくる、さまざまな音のために、室の中の空氣が絶えず微動してゐるのが感ぜられた。それが、妙に私をそはそはさせるのだ。

「二年前だ。——僕が上海を飛び出した年の春だからね。僕は濟南で、日本人の家に間借りをして晝をかいてゐたんだ。——その家に女學校へ通つてゐる娘があつてね。十四だつたかな、その娘がね。毎日の僕の晝室へ遊びに来るんだね。僕を、をぢさん、をぢさんと呼ぶんだ。僕も可愛くなつてね。そいつがまた素晴らしいお轉變さ。僕が晝をかいてゐるうしろからそうつとやつてきて首ッ玉に嘯じりついたり、肩に飛びついたりするんだ。ところがね、夕方だつたな。——その頃はまだ女房と別れて間がなかつたからね。僕はときどきへんな回想に囚はれることがあつたんだ。性慾的なメラノコリイだね。僕は

窓に凭れてぼんやり煙草を喫つてゐたんだ。——そのとき娘が飛び込んで来たんさ。何時ものやうにぞさん！と言ひながら飛びついてきた。その瞬間、衝動的に僕は娘を抱きあげてしまったのだ。そして頬つぺたにキスしてやつた。だが、すぐに僕は何か悪いことをしたやうな氣持になつたんだ。僕はもう一度新しく娘を揺すぶりながら、よつちやん！ さあ、こんどはおんぶしてやらう——Y子といふのが娘の名前なのだ。笑ひながら、右の手で娘の下げ髪を撫で、やつた。無邪氣な遊びに還らなければいけないといふ氣になつたんだ。だが、君！ 全くびつくりしたね。娘は平氣で唇を僕の唇の上を押つけてくるんぢやないか。こりやいけないと思つたね。娘は完全に僕の誘惑を感じてしまつたんだ。——僕は慌て、兩手を離した。だが娘の腕は僕の首筋に絡みついてゐるんだ。それから顫へるやうだ。——Rさん！と言つて呼ぶんだ。娘からRさん。と呼ばれたのは始めてなのだ。——

「Rさん。——あなた、遠慮しなくつたつていゝわよ。わたし處女ぢやないのよ。」——はつきりした聲で言ふんぢやないか。それが、實にもう成熟しきつた女の聲なのだからね。——

私は少し不愉快になつた。その私の表情が咄嗟の間に彼に反射したのがわかつた。

「……それでね、その次の日、到頭、僕は濟南を去つたね。」

Rは急に、あつさりと言を片付けてしまつた。

「君は嘘だと思ふんだね？」

Rの眼が光つた。

「いや——」

嘘だなどと思ふものか。——私は、唯、少しばかり不快になつただけだ。たぶんこの話を彼は幾度びとなく繰返して人に話してきたのだらう。話の筋にも、彼の言葉にも、あまりに洗練された一つの諧調が感ぜられるではないか。それが私を不快にしたといふだけのことだ。——

空からくる明るみの中に、太い皺の入組んだ彼の横額が、蒼黒く光つて見えた。それが妙に不潔な老衰した感じを唆つた。瞬間、私は彼のありふれた回想の中から、彼の心の底に潜んでゐる鋭い要求を嗅つけたやうな氣になつた。

私は、毎日、午後から夕方までを、此の二階と、活動常設館の裏の茶館とで過す習慣になつてしまつてゐるのだ。(あまりに單調になり過ぎた私の生活にとつて、彼と會ふことだけが僅かな變化を期待させるのだ)

だが、此の洋畫家は少し年をとり過ぎてゐた。彼は、數年前、彼の若い妻と、一緒に北四川路の、あのパンションの一角に住んでゐた。彼の畫は旺んに賣れたし、彼の若い妻は決して彼を失望させなかつた。しかし、うまくゆかなかつた。彼の妻は、彼が一月ばかり南京に寫生旅行に行つてゐる間に、若い新聞記者と一緒に漢口へ墮落ちしてしまつたといふのだ。——

しかし、その話は嘘かもしれない。彼の畫が、そんなに賣れる筈がなかつたし、いや、假りに彼の畫に興味を感じる人間がゐるとしたところで、——彼の話は、あまりに小説的な構想に囚はれすぎてゐるではないか。

だが、現實のデテエルを缺いてゐやうとゐまいと、そんなことはどうだつていゝのだ。

私は無理に此の空想的な友人の生活から醜い現實をつかみ出す必要はないのだから。それに、私はもう今月の末には、どうしても日本へ歸らなければいけなくなつてゐるのだ。彼が私に深入りしようとないかぎり、私に彼の生活を究める必要なんかあるもんか。——私は彼にとつては一個の傍觀者であるに過ぎないし、彼もまたそれを信じてゐるのだから。

III

建附のわるい裏木戸をあけると、私は音のしないやうに足音を忍んで、傾斜の急な階段に近づいた。

——私が此の家に通つてくることを誰も拒まうとしないのに、何故か、かうしなければいけないやうな氣になるのだ。

かういふ建物の一部が、無頼漢の巢窟にあてがはれてゐることも想像されるし、それにRがこの家にとつてかなり厄介な客であることもわかつてゐた。私は、一週間ほど前に彼の室の前で、この家の主婦

らしい四十恰好の色の黒い女が口穢く罵るやうな調子で、頻りに彼に間代を請求してゐるのを見たことがあるのだから。

ほとんど、胸と擦れずれになりながら、階段をのぼりつめると、漸く身體だけが自由に通れる位の天井の低い廊下が左右に岐れてゐるのだ。

廊下を左に折れて、行き詰つたところが彼の室だ。

「おい！ ゐるかね。」

何時ものやうに軽く扉をノックしながらも、私は思はず聲が顫へた。昨日、私が日本へ歸るといふ話をしたときに、急に彼の顔に現はれた寂しい翳を思ひ出したのだ。その瞬間この二ヶ月ばかりの間に、ひとりで二人の間にかき立てられてきた親しさが根こそぎに消えてゆくのを感じてしまつたのだ。

煙草の煙で濁つてゐる室の中に、Rは一人ぎり、キャンプ・ベッドの上に胡坐をかいてゐた。充血した彼の眼が疲れた放心の中をうろついてゐる。

「昨夜、すっかり遅くなつちやつてね。」

彼はまだ一寸ほど指の間に残つてゐる葉巻を床の上に投げた。

私は、その苦りきつた姿勢の中から彼の憂鬱な心を感じた。私は、かういふときの彼の表情に馴れてゐた。(彼は昨夜の賭博場のみぢめな回想にすっかり氣を腐らしてゐるのだ)

「明日の朝の船で歸ることにしたんだ！」

私は彼の顔に笑ひかけた。

「それがいいね。——君はもう、あまり長く上海で暮し過ぎたぜ。今、歸らなければ、もう歸る機會を失つてしまふぜ。」

「だがね、——僕はまたやつてくるよ。」

「いやそんなお世辭は要らないよ。」

「きつと来るよ。」

「なるほど、ほんたうかもしれないな。だがそれは僕に言つてもらひたくないな。」

「何故？」

「だつて、僕は此處で君のやつてくるのを待つてゐる氣にはなれないからな。」

外があまりに明るすぎるので、この室の中は何時よりも一層暗く濕つぽく感ぜられる。——

私は何だか、ほろりとしてきた。

不意にRが元氣よく立ちあがつた。

「一寸、君の横顔をスケッチさせてくれたまへね。ときどき君のことをおもひだしていゝ氣持になりた
いからね。」

彼は、ベッドの脚に立てかけてあつた厚つぽたいスケッチブックをとりあげ、組み交した足の上に斜
に置いて、新しい姿勢をつくつた。

その唐突に緊張し切つた彼の態度にぶつかると、一瞬間、私は彼に欺されたやうな無氣味な氣持に牽
き入れられたが、スケッチブックの上を滑走する自由な鉛筆の音が彼のひねくれた親しみを私の胸に
運んできた。

「さあ——どうだね。」

やつと輪廓だけ描きあげられた肖像畫を私の眼の前へつき出した。

「明日の朝は九時だね。ぢやあ、七時までにB茶館で會はう。——實を言ふと僕もへんな氣持なんだ。

これから一花咲かせようといふ君を、むざむざ僕の仲間に引き入れようとは思はないけれど、何だか別

IV

れたくないきもちもあるね。それに君がなくなつたら、また僕は一人になるんだ。僕は二三日のうちに此處を引越すよ。北四川路のもつと明るい室へゆきたいんだ。僕もまだ若いんだから——」

その哀調を帯びた聲は、全く私にはだしいけだつた。

朝、眼を醒ましたのは六時半だつた。私は妙にそわそわしてきた。私はまだ少しも荷物を整理してゐないのだ。それなのに、私の下宿からB茶館までは、どんなに黄包車を走らせても三十分はたつぷりかかる。荷物といつても大したものはないけれど、それでも、片づけるとなるとちよつと手がつけれなかつた。

私は到頭、番頭をよんで、何も彼も一纏めにして船に届けてくれることを頼んだ。

門口へ出ると黄包車が一臺待つてゐた。街はやつと眼を醒ましたばかりだつた。冷やかな風を切つて私に乗せた黄包車が走る。肉を積んだ一輪車が、ぞろぞろと私の眼の前を横切つていった。——私の心にはひろびろとしたよろこびが湧いてきた。私は今更のやうにこの不潔な呪はしい往來を見廻した。活動常設館」の前で私は俵を下りた。

B茶館は店を開いたばかりだつた。二階へ上つたけれど、テーブルはまだ積み重ねたまゝになつてゐる

るし給仕たちの誰もが私に物を言はうとしなかつた。この街が急に私に對して冷酷になつたやうな氣持がする。

Rの姿が見えないといふことも今となつては私にはそれほど意外な氣がしなかつた。あの男が私と別れを惜むために此處の茶館で待つてゐる、と言つた言葉を、あまりに強く信じ過ぎてゐた自分が恥かしくなつた。結局、私たちはこのまゝ別れてしまへばいゝのだ。——

しかし、私は此處から四五町足らずの露路の中にある、倉庫にかこまれたRの二階をおもひだした。すると、あの薄暗い室の中で、動くごとにぎしぎしと音のするカンパ・ペットのうへに胡坐をかいてゐるRの憂鬱な顔がすぐ描き出されてきた。彼の唇には皮肉な微笑が泛んでゐる。

私は、だだつびろい室の中を一人で、ぐるぐる歩いた。——

やつとテーブルの用意が出来上つたので、私はその一つに席をとつた。茶が運ばれた。が、私は飲む氣にもなれなかつた。

時計を見ると、もう七時半になつてゐる。私は、もう出かけようかと思つた。だが、まだ、ひよつこり階段に足音が聞えるたびRぢやないかと思ふのだ。

街の雑音が、だんだん私の耳の中にひろがつてきた。茶館には私のほかに一人も客はなかつた。私は右のズボンのポケットの中へ入れてあるハンケチに包んだ「大洋」銀貨を握りしめてみた。——十二弗、

それは私が日本へ歸る旅費を差引いた残りの金なのだ。それを私は今朝此處でRに渡してゆかうと思つたのだ。しかし、それも、今となると、あまりに、キザなセンチメンタリズムではないか。私はもう往かなければならない。

八時十分。——私は到頭立ちあがつた。街へ出ると黄包車が群がり寄つてきた。私は、もう一度、常設館の前から一直線に續いてゐるこの街の全景を眺めた。太陽の光は、まだこの街の上に流れては來なかつた。

V

振鈴が鳴つた。船は、もうあと十分で出帆するのだ。若い番頭は「船橋」の上り口で私に握手を求めた。

「さよなら。」
「さよなら。」

霧は揚子江の河面を掩つてゐた。上海の全市街が霧の中にぼやけた輪廓を描き出してゐた。

碼頭には見送りの人たちが、それぞれ、手を振つたり、ハンケチを翻へしたりしてゐた。私の胸には清々しい力が湧いてくる。この憂鬱な街からやつと解放されたぞ！ といふ喜びが、何故ともなく朗かな希望を約束するやうな氣がした。

と、急に機關が運轉を始めた。彈動が氣魂しく甲板の上に傳はつてきた。

船は少しづつ動き始めた。碼頭に集つた人たちは、上甲板のてすりによりかゝつた一列の顔に向つて歡聲を浴せかけた。

私は眼下にとよめいてゐる愚なる群集の顔を一つ一つ探つていつた。——霧の中に泛んだその顔の

塊は、無数の風船玉を思はせる。空虚な騒がしさの中を船は悠々として遠ざかつてゆくのだ。

風船玉の連りが段々くづれていつた。そのとき、私は入り亂れた騒音の中から「おーい」と呼ぶ音高い聲を、ほそほそと聞いたやうな氣がした。群集の最後の列に、黒いソフト帽が高く捧げられて空間に躍つてゐるのが見えるではないか！

Rだ。Rだ。

「おーい。」

私もありつたけの聲を絞つて叫んだ。だがその聲は聞えないのか、ソフト帽は前と同じ位置をくるくると動いてゐる。もやもやとした煙のやうな霧の中に、彼の肩先から、細長い顔の輪廓まで、ちらちら

つと私の眼をかすめるのだ。

「おーい。」

私ははてすりに半身をのめらして叫び續けた。船と碼頭との間は僅かに一町ほどの距離しかないのに、彼には私の姿を見わけることが出来ないのだ。

ふと、私は、右のポケットの中に、ハンケチに包んだ「大洋」のあるのを思ひ出した。私は頭の中がぼやけてきた。

「おーい。」

私はハンケチに包んだ塊を高く差し上げた。

「おーい。」

すると、微かな聲が霧を傳つて、響いて来たやうな気がした。

しかし、黒いソフト帽は、もう何處にあるのかわからなかつた。瞬間、私は群集の頭を目がけて、ハンケチの包を力一ぱいに投げつけた。だが、そのとき左手の河面から流れてきた霧が私の眼の前を横切つた。私は白い包がくるくると揺れながら空間に吸ひこまれてゆくのを見たゞけだつた。

船は大きく汽笛を鳴らした。速力を速めはじめたのだ。

眼の前にはもう何も見えなかつた。市街の上に斬然と聳えてゐた高い塔の屋根だけが、仄かに私の視

線に残つたけれど、しかし、それも忽ちのうちに消えてしまつた。ふと、群集の背ろに見えたRの姿が私の錯覺にちがひないといふ氣が私の胸の底を走りぬけた。すると、上海で暮した二月の生活までが、單なる幻覺に過ぎなかつたのではないかといふ氣がしてきた。

船は烈しく汽笛を鳴らしながら、大きく航路を右に曲つた。揚子江の河口に近づいたらしい。

六助の逃亡

的場六助が、うしろから南里支作の肩を敲いた。

「見たまへ——あの煙突だ。あれが笠原獅子太郎の最後の努力だ。あんなに未だペンキの色が新しいぢやないか。かうやつて眺めてみると、いろいろなことをおもひだすね。一昨日の夜、うちのやつが、おそくなつてから子供を抱いて行つたときにね。番臺の上に坐つてゐたおかみさんが言つたさうだ。もう今夜がおわかれです。私たちは草分けのころから、この村に移住してきてゐるんですが、やつぱり土着の人でなければ駄目です。土着の人たちはそりやお互に助け合つてゐますからね。さう言つて眼に涙をいつばいためてゐたさうだ。何でもその晩はね、——獅子太郎が一人で水道の栓をひねりながら、水にあふれるのをちつと見詰めてゐたさうだ。あの男にも多少の感慨はあるさ、三年近くも三助を傭はないで一人で戦つてきたんだからな。」

六助の聲が顫へてゐるので、彼を煽り立ててゐる一つの激しい、感情が南里の心に迫つてきた。二人が腰をおろしてゐる土橋の低い欄の前には、工事が終つて白い砂利を敷きつめた新道路が、三角

形の廣場の横を通つて獅子太郎の風呂屋の前まで續いてゐた。

風呂屋は、そこから見ると、人のゐない荒れはてた城のやうに大きな森をうしろにして平原の一角にそびえてゐた。

「あの新しい煙突から煙が出てゐないといふことは、ちよつと薄氣味がわるいね。」

六助は低い聲で言つた。——午後の陽ざしが黒い煙突の新しいペンキの色を照り返してゐた。

「……僕にもいろいろ思ひあたることがあるんだぜ。十日ほど前から、あの男は妙にそはそはしてゐた。流し場の壁が壊れて大きな穴があいてゐたが、そんなことはまるで問題でないといふ顔をしてゐた。しかし今から考へるとあの壁穴から獅子太郎が逃げていつたのだといふ氣がするぢやないか！」

六助が氣取つた調子で言つた。風のために擦り切れた着物の裾がまくれて、泥溝の流れとすれずれにぶら下がつてゐる彼の兩足の毛脛が現はれた。しかし、六助は新しい興奮に追ひ立てられるやうに饒舌りつづける。

「あの男は戦つたのだ。戦つて破れたのだ。あの石炭小屋の前に積んである薪を見たまへ。五尺に足らない小さな男が、毎晩、子供をおんぶしたままで、あの薪を割つてゐたんだぜ。——一體、風呂屋が夜逃げをするなんて、馬鹿な話があるかね。いかにも、あの男らしい。悲壯なユーモアがあるぢやないか！」

悲壯なユーモア、——さうだ、それにちがひない、と南里玄作は思った。この男は風呂屋の主人によつて彼自身を説明してゐるのだ。何故かといつて、彼——六助の生活もまた最後のどんづまりまで來てゐるのではないか。六助が彼に夜逃げをする相談をしたのは一週間ほど前のことだ。だから、彼の頭には、この六尺近い大きな男が、一年近くもたまつた家賃の催促に追はれながら、窓の無いす暗い部屋の中で、小さな一閑張りの机によりかかつて、全く賣れる見込みのない小説の原稿を書いてゐる姿がうかんできたのだ。その六助の不幸な計畫が、全く唐突に獅子太郎によつて先を越されてしまつたといふことは、これはまた何といふ悲壯なユーモアだ。しかし、獅子太郎の名前の中から第一にユーモアを發見した者は六助であつた。「獅子太郎」は「風呂屋」の同意語となつた。そこで彼等はこの村に一軒しかなかつた平原の中の風呂屋へゆくために「獅子太郎の家に行かう！」と言つた。それを主張した者も六助であつたが、しかし今、風呂屋の亭主の運命の中に、彼自身の悲壯な幻像を見出してゐるのも六助なのではないか！

「僕にはね、あの男が、女房と子供をつれて荷物を積んだ車を引きながら逃げてゆく姿が見えるやうな氣がするんだ。——おれたちは、おそかれ早かれ、夜逃げをするんだからね。最初は獅子太郎で、その次ぎは僕で、——いや、この順序だけが狂つてしまつたんだが、さて、その次ぎは誰かな。ことによると、南里——案外、君のところへ廻つてゆくかも知れないぜ。」

六助は愉快さうに笑つたが、急に片眼をつぶつて、——それは彼が物を正視するときの癖であつたが——ちつと空を見詰めながら、

「おい、あれを見ろ！ ほら、煙突の先に月が残つてゐるぢやないか。いよいよ古城落月といった感じだね。」

と言つた。——なるほど、澄みきつた空にうすく月の形が残つてゐる。

「古風な晝題だ。いかにも獅子太郎の最後に相應はしい。」

「さうだ。古風な晝題だ。」

と、南里玄作も思はず叫んだが、しかし、風呂屋の煙突にかかつてゐる夕月よりも、むしろこの風景に人生の感慨を託してゐる自分たちの方が、はるかに古風な晝題である、といふ考へが冷たく彼の胸をかすめた。彼は黙つて立ちあがつた。

「少し歩かうよ。」

彼は先に立つて右側の、丘の傾斜面に沿つてゐる砂利を敷いた坂道をのぼつていつた。坂の曲り角には、棟上げのすんだばかりの新しい家が骨組だけで立つてゐた。このあたりは半年前まで深い雑木林にかこまれ、落葉に埋もれた暗い洞穴のやうな細い道が丘の上まで續いてゐたが、——そして、丘のすぐ裏が日蓮宗本山のH寺の森になつてゐるので、春になると、この道は南里玄作のたつた一つの散歩道に

なつたが、しかし、今は秋だ。そして、雑木林はことごとく伐り拂はれて、今まで深い繁みの中にかくれてゐた丘のかげの小さい墓地までが、すっかり裸にされてしまつた。前には、その墓地のそばを通ることが、彼には何かしら不安であつたが、しかし、今は石塔の亂雑にならんだ墓地が裸にされて明るみの中にさらけ出されてゐるといふことまでが痛ましい。

丘の上に立つと高い空が平原の上に擴がつてゐるので、低い丘のうねりを縫つて弓形にのびてゐる村の斷面が彼の視野の中にくつきりと浮んでゐる。正面の大きな窪地を隔てた椎の並木の上に白いコンクリートの煙突がそびえて、ゆるやかな黒い煙が青い空の裂け目の中に溶けていつた。それが新しく村はづれに出來た風呂屋だ。その風呂屋は開業してからやつと二十日ばかりしか経たぬのに「獅子太郎」の風呂の浴客は半分に減つてしまつた。新しい建築が出來あがつたとき、南里は彼の家の二階の窓の下を、子供を背負つた獅子太郎が息を切らしてのぼつてゆくのを見たことがある。その翌日、彼は同じ姿をした獅子太郎が椎の並木の下に立つて、高い煙突を眺めてゐるのを見た。獅子太郎の風呂屋の古い煙突に新しいペンキの塗り替へがはじまつたのはそれから二三日経つてからである。しかし、塗り替への工事が終つたときには、十人の浴客を數へることも困難になつてゐた。そして、今、新しい風呂屋の煙突からは、勝ちほこつた煙が、閑寂な空の軌道をすべつてゐるのであつた。

「——獅子太郎はあの煙に感壓されたんだ。この村の地主たちはへんに結託してゐてね、決して新しい

侵入者を入れないんださうだ。だから、見たまへ、表通りの店屋の軒をのぞいてみると、大抵、小林だとか、石井だとかいふ苗字ばかりぢやないか。まるで、一家同族で一つの村を經營してゐるやうなものだ。——金のない移住者はすつからかんになつて逃げ出すより外に仕方がない。社會主義の時代もへちまもあるものか、この村は未だ資本主義の時代にも達してゐないのだからな。」

「さうかも知れない、——だがね、君は一體如何するんだ。これからの生活をどうするんだ？」

「これからの生活——？」

六助はかう言つてから自嘲的な笑ひをうかべながら、

「——さあ、やつぱり書いてゆくよ。だがね、そんな風に言ふよりも僕は書かなければ居られない氣持になつてゐるんだ。僕はもう文壇的な野心なんぞ持つてゐるやしない。——たつた一つの題材を書きあげたらそれでいいんだ、全く家賃を踏み倒しながら武俠小説を書くことにも飽いたからね。この一年間、僕は心を屈めて暮してきたんだぜ。自分に對して僕は『無告者』といふ言葉を投げつけてきた。無告者——これが僕なんだ。僕の頭は、もやもやとした憤りでうづまつてゐるのにこの憤りを誰に向つて洩らしたらいいのだ。」

「だがね、さういふ意味なら、すべての人間が無告者だ。それよりも、僕はあらためて君に聴きたいんだがね——」

言ひかけて、南里玄作は六助の瞳の中に彼に對する敵意を感じるると急に言葉に詰まつた。
 「いいかね。僕はこれだけのことを聴きたいんだ。一年前に上海から君を呼びよせた者は僕だ。——そして、日本へ来てからの一年間を君が心を屈めて生きてきたとすれば、すくなくともその責任は僕にあると考へるべきだらうか？」

南里は自分が途方もなく意地の悪い人間になりつつあるといふ氣がした。だが、しかしこの感情を横へ外らしてはいけないといふ氣持が、彼の心を強く壓さへつけた。

「いや、そんなことは——」

と、六助が言つた。

「そんな馬鹿なことがあるもんか。僕は君に感謝してゐる。——君は僕を不幸にするために上海から呼びよせたんじゃないからね。」

「そんな風に話し合ふことは止さう。僕と君とは友人だ。もつとむき出しの話をしようぢやないか。君は僕を憎んでゐるかどうか、唯それだけを聴きたいのだ——？」

「それは、——どういつて説明していいか、自分にもわからないんだが、しかし。」

六助はどぎまぎしたやうに眼を俯せた。彼の表情には明かに自分が侮辱されてゐるといふ感じが現はれた。南里はそれを彼の心に感ずるとこのまま六助をいぢけさせてしまつてはいけないと思つた。そこ

で、新しい反撥を呼び起させるために、もう一太刀斬り込むための姿勢をとつた。

「卒直に言ふがね。僕は君を憎んでゐた。それは君と僕とを別々のものだと思へることができなかつたからだ。——僕には君の弱さがもう我慢が出来なくなつたのだ。例へば、この前の女の事件にしてもだ

ね。僕は君が復讐の憎念に燃えながら日本にやつてくると思つてゐた。すくなくとも、君が日本へ歸らなければ居られなくなつたのはあの女のためだ。いや、われわれはもう世間的な儀禮で物を言ふことは止さう。俺は君に會ひに来たんぢやなくてあの女に會ひに来たんぢや。僕は君にさう言つてもらひたかつた。だが、君は、もう昔の生活とは縁を切つた。僕はこれから新しい生活を築きあげるのだと言つた。

それはいいさ。僕は、一人で悄然としてやつてくると思つてゐた君が、新しい細君と二人で現はれた時には涙ぐましいほどうれしかつたからね。これから君の新しい生活が始まるのだと思つた。だが、前の女の罪をすつかり許してしまつた筈の君が、どうして、女の籍だけをそのままにして置かうとするのだ。女の若い情夫がキザな不愉快な野郎だから、あいつの申出に應ずるのは厭だといふことなら話はわかるさ、——しかし、君はさうぢやない。あの女がことによると君のところへ戻つてくるかも知れないといふ不安が君の決意を鈍らせるのだ。それなら、それで何故堂々と戦はうとしないのだ。さういふ性格の弱さが君の運命をずたずたに引き裂いてしまふのだ——」

「そ、それは違ふ。だがね、そのことを説明したくはない。しかし、君が、それだけ言ふのなら、僕も

はつきり言はう。一體、君は何の權利があつて僕の運命を穿鑿するのかね。君は惨忍だ。……君は他人の生活を自分の尺度で測らうとするのだ。僕は君と話をしていると意地の悪い檢事の論告を受けてゐるやうな気がする。そりやあ、あの女に對する僕の氣持だつて、常に一つのところに停滞してゐるわけぢやない。三年間、僕たちは夫婦として暮してきたんだからね。人間にはいろいろな回想があるよ——」

「それはわかつてゐるさ。唯、僕は自分の氣持の底を割つて話してゐるだけのことだ。僕の判斷が正しいと言つてゐるんぢやない。人間は必ずしも生活を曖昧にしておいてはいけないといふことはない。眞實そのものが曖昧である場合もあるからね。だがね、——僕の言葉を誤解するなよ。僕は唯、心を飾らないで言つてくれと言ふのだ。もつと、はつきり言へば、今、君が引越してゆくにしてもだね。君の決意の裏には僕に對して反撥する感情が潜んでゐたんぢやないかと言つてゐるんだ。——僕はお互ひの友情の皮一重下にあるほんたうの友情に觸れたいのだ。假りに、そのために僕たちが敵同士にならねばならないにしてもだね、僕はお互ひの心を胡麻化してゐるよりもむしろその方がいゝのだ。」

「それは、君と僕との性格の違ひだ。僕にはどうしてもそれをはつきりすることが出来ないんだから。君の言ふとほり、僕も君を憎んでゐたことはあつた。短刀で君の胸元を刺し通してやらうと思つたこともあつた。しかし、今は憎んでゐない。——今、僕の心の中には、君に對する感謝と反抗とがもつれ合つてゐるのだ。實際、僕は君とわかれることに寂しさを感じるよりも以上に、君と離れてゆくことに

喜びを感じてゐる。」

六助の眼は充血してゐた。それは豫期した言葉ではあつたが、しかし、南里は張りつめた心が急にげつそりと虚ろになつたやうな氣がした。たとひ性格の違ひであるにしても、これほどまでに六助の生活が自分によつて痛めつけられてゐたといふことは全く意外であつた。しかしそれにもかゝらず彼の心は何かしら爽かであつた。これでいゝのだ、おれたちは、もう完全に友情の結び目をほどいてしまつたのだ、と南里玄作は思つた。——

「それで、君は何時、荷物を運ぶのだ？」

「早い方がいゝと思つてゐるがね、何しろ一世帯あるからな、一度には運びきれないんだが、がらくた道具だけ一時何處かに預つて貰ふやうな場所はないかな。——？」

「それぢやあ、春田の家の空き家がいゝ。あそこなら當分置いてあつたつていゝからね。」

南里は不意に春田の姿をおもひだした。おゝ、春田、——彼もまた一ト月前に、不幸な戀愛からのがれるために、そして、それからのがれることによつて一層彼自身を不幸にするために、二年前にやつと建てたばかりの小さな家を捨て、新しい郊外に移つていつた。引越すとき、彼は自分の家の鍵を南里に預けていつたが、しかし、その家は半歳ほど前から抵當に入つてゐた。そして、その期限が、もう今年末に迫つてゐた。

「そいつはいゝ、それぢやあ明日が二十日だから……」
と、六助は指を折つて歎へながら、
「二十日の晩臺所道具だけを春田君の家に運ぼう。そして、ほんたうの夜逃げは二十一日の晩にするからね。しかし、なるたけ月の無い晩がいゝな。さうかといつて雨に降られても困るがね。」
六助は元氣のいゝ聲で言つた。

五年前に、上海で旅費を費ひ果してしまつて、どうすることもできなくなつてゐる南里に、自分の僅かな月給を割いて、彼の住むための小さな部屋を借りてくれたのが六助である。その頃の六助は、多くの上海にゐる放浪者たちがさうであるやうに、上海のある邦字新聞の記者をしてゐた。彼は十年近くも支那の新聞社をわたり歩いて暮してゐたのだ。北京から南京へ、南京から上海へ、上海から青島へ——と、彼は新聞社のさゝやかな月給をたよりにして小説を書いて暮してゐた。そして、同じやうな仲間が虹口附近のうすぎたない茶館を中心にして集つてゐた。彼等はいづれも三十前の青年であつたが、しかし、彼等は自分たちが人生の敗殘者であると考へることに一つの誇を持つてゐた。そこで、彼等は野心的なものゝ一切を輕蔑した。しかし、輕蔑する感情を表現するために、彼等は極端に反對の形式を用ゐる癖がついてゐた。たとへば、その頃、支那には奉直の第一回戰が始まつてゐたが、彼等の尊敬は吳佩孚に對して集つてゐたといふことができる。だが、それは直隸側の戰爭の目的が正しいからではなく、

吳佩孚の人氣が上海を壓してゐるからでもなく、唯、直隸側に降伏を勧めるためにひとりで馬に乗つて吳佩孚の陣營を訪れた張作霖の愛妾を禮を厚くして迎へた上に護衛をつけて送り返したといふゴシップ的な報道——その報道の中に現はれた封建的な英雄氣質が彼等を喜ばせたからであつた。それを彼等は、野心的なものに對する自分たちの輕蔑の一種の現はれであると解釋してゐた。だから、彼等はあらゆる感情を誇張して話合つた。それから、自分たちがすつかり人生に退屈してしまつた人間であると考えなければ居られない氣持が素晴らしく彼等を熱情的にしたのだ。異常なものを避けることによつて、自らを異常なものにしようといふ幼稚なヒロイズムが、これ等の若い敗殘者の心を充たしてゐたが、しかし、的場六助は、かういふ仲間の中で自分を最もモローラスな存在にすることに一つの意義を感じてゐるやうに見えた。彼は日常生活のすべてからユーモアを拾ひだしてきた、たとへば日が暮れて街燈がともされる。——これは何といふすばらしいことだ、と彼は思つた。彼はそれを感じることによつて、自分の感覺が誰にも増して放浪者に相應はしいといふことを信じてゐたから。彼はある朝、曉闇の大氣の中に春を感じた。そこで、その日、揚子江岸へ行つてみると楊柳が芽をふいてゐた。これは異常なユーモアである。と彼は思つた。

そして、そのことを茶館にあつまつた彼の仲間と話した。彼等は六助の話にユーモアを感じるよりも、話してゐる六助にユーモアを感じた。彼等の仲間の一人が、花園橋の下の温室の中で酔つぱらつて寢て

みたのを通りすがつた英國人が口ぎたなく罵つたといふことを口惜しさに話したとき、六助はわざとらしく肩を張つて、彼の友人の怒りに調子を合せながら、――

「怪しからん、――そんな英國人は重藤の弓をもつて射るべき奴だ！」

と言つたので、怒つてゐた男が噴きだしてしまつた。かういふ言葉の上の技巧も、この集團の空氣の中にゐると少しの不自然も感じなかつた。彼に従へば、人間の肖像を滑稽化するためには、たつた一本の線をゆがめることだけで十分であつた。この男は南里と始めて會つた日を、彼を夜中の散歩に誘ひだした。六助によれば、夜、道を歩くことは人生に何事かを求めてゐる證據であつた。彼の説明は南里の胸に新しい感激をよび起した。そこで、南里は川風の寒い夜をレインコート一枚で六助と二人で歩き廻つたために、ひどい風邪をひいてしまつた。しかし、かういふ人たちによつてかきたてられる空氣の中で、南里玄作もまた彼自身を一人の放浪者であると考へる癖がついてしまつたのだ。

「もし君が上海を厭になつたらね、僕は今度は濟南へゆくよ。濟南には若い娘がたくさんゐるよ。それからね、今は蝦フライのうまいころだ。毎日つくつて喰はせるよ。僕は料理が上手だからね――」

六助はかう言つて、日本へ歸りたがつてゐる南里をひきとめた。

そのころの六助の姿がいかに南里の記憶の中で生々としてゐることよ。――それは五年前であるがしかし、あの親しむべき放浪者のイメージは、生活に疲れた中年の敗殘者である的場六助の萎びた南瓜の

やうな顔の何處から見出すことはできないではないか！

五年間、南里は六助の消息を知らなかつた。と、いふよりも、知る必要がなかつたのだ。何故かといつて、南里は彼の記憶の中から、決して、垢じみた上着を着て袋のやうなズボンをはいたあの親しむべき放浪者の姿を見失つてしまふことはないであらうから。――

彼が上海で過ごした數ヶ月は、南里玄作の生涯にとつての最も美しい、感謝と憧れに充たされた時期であつた。浪漫的な空想が蒼空のやうに彼の生活の上にはひろがり、そして、すべてのものが純潔で、燃えるやうな友情が彼に少しの孤獨も感じさせなかつた。全く彼は夕方になると、露地の街燈に對してすらも挨拶しなければ居られないやうな氣持になつたほどに。――

しかし、五年目に南里が彼に對して新しい友情を用意しなければならぬやうな事件が六助の身邊に起つた。だが、その事件は、若し南里が、職業に困つて彼のところに泣きついてきた一人の青年を上海の邦字新聞社に紹介してやらなかつたら、あるひは起らないですんだかも知れない。といふのは、彼のその青年の職業がきまつて、いよいよ上海に立出しようとする前の日に、ふと六助のことをおもひだしたのだ。だが、たぶん六助は上海にはゐないだらうと思つたが、しかし、ゐなくてもいゝ。もし六助に會ふ機會があつたらこれをわたしてくれ、といつて青年に一通の手紙を託したのだが、しかし、上海から來た青年の手紙によると、六助は吳淞路の表通りに、A新聞の通信員となつて一家を構へてゐるので

あつた。そして、彼は青年の訪ねていつたことを非常によく早速若い妻と一緒に、新公園へ案内しようと言つた。——青年の手紙は六助の机の上で書かれたもので「奥さんのお化粧を待つてゐる間にこれを書きます」といふ文句が最後に書き添へてあつた。六助が上海にゐたといふことよりも、彼が結婚してゐるといふことが南里をおどろかせた。彼は何よりも六助が、どうして、かういふ平俗な生活の中に自分を落着かせる氣持になつたかといふことを知りたいと思つた。さういふ疑ひが彼の心の中に新しい根をおろしはじめたとき、彼は紹介してやつた青年から不意に電報を受けとつたのである。突発的な事件が起つて急に歸國しなければならなくなつたから金を送つてもらひたい、といふ文面であつたがしかし、彼は二三日そのまゝにして置いた。すると四日目の朝、長崎の消印のある青年の手紙が届いた。——一兩日中にお訪ねするつもりであるが、私は今一人の女をつれてゐる。その女が何ものであるかといふことは、あなたの想像にまかせるが、何よりも私の行爲があなたの御厚情をふみにじる結果になつてしまつたことをゆるしてもらひたい、——といふ意味の言葉が亂雑に書かれてあつたが、その手紙を讀み終つたとき、一つの豫感が南里の頭の底を電光のやうに走り過ぎた。六助の妻だ！と彼は思つた。すると非常に不愉快な忌まはしいものが残滓のやうに彼の心の底に浮んできた。それから二三日経つて、青年が女をつれてやつてきた。女は彼の豫感どほり、的場六助の妻であつた。女は神経の粗悪な骨張つた顔をしてゐたので長い間向ひ合つて坐つてゐることが苦痛だつた。それに、もつともいけないことは、

女がかういふ境遇に入つてきたことに對して少しの自責も感じようとしてゐないことだつた。——彼女が六助のことを的場、的場と言つた。そして「わかれるきとに的場は、おれは何時までも待つてゐる。若しあの男から捨てられたら何時でも歸つて來いと言つてくれましたの。あの人も氣の毒ですわ。」と、こんなことを青年の前で平然として言つた。すべてが南里には不愉快であつた。彼はこのがさつな女とともに暮らしてきた六助の生活について考へるよりも前に、南里は彼自身の不用意な過去について考へなければならなかつたから。その傷痕には未だに生々しい膿がかたまつてゐる。四年前に南里は一人の男を極度の不幸に陥れることによつて不自然な結婚をしたのだ。彼の妻はその男の妻であつたから。そしてその男の友人から、彼は、その男が未だ結婚もしないでゐる、といふことを聞いたとき、始めて自分の美に對する新しい自覺を持つた。しかし、今は位置が顛倒してしまつてゐるのだ。彼は六助の不幸に同情してゐるのに、それにもかゝらず、青年の憎むべき行爲の中に彼自身の過去を見出さなければならなかつたから。彼は何よりも自分が六助に同情する資格が無いといふことを、そして、同時に、この青年を憎む資格が無いといふことを感じなければならなかつた。

的場六助が彼の新しい妻とともに飄然として東京驛に現はれたのはそれから二ヶ月ほど後であつたが、しかし、六助に東京へくることを勧めたのは南里であつた。南里は六助が家庭的な打撃のためにすつかりまるつてゐるにちがひないと思つてゐたので、何よりも彼の心に新しい野心を植ゑつけることが

必要だつたと思つた。それをすることを南里は六助に對する、ある意味の報恩であると考へてゐたから。

しかし、南里の空想の中で六助の輪廓はひとりでひろがつていつた。彼は六助を一人の落魄した天才に仕立て上げた、それを六助に自覺させることが友人としての義務であると思つた。——だが、五年ぶりで會つた六助は南里の頭の中の幻像を根こそぎ打ち壊した。何故かといつて、五年前に人生の敗殘者を氣取つてゐた彼は、事實敗殘者であるより以外の何ものでもなくなつてしまつてゐるし、自分をユ—モラスな存在に仕立てあげることに努力してゐた彼は、あまりにも慘めな人生の餘計者になつてしまつてゐるのではないか。

上海の街を生々として、のたうち廻つてゐた放浪者は、僅かに六助の姿勢や話しぶりの中に残つてはゐたが、しかし、南里は今彼と話をすることすらも苦しくなつた。彼は六助と向ひ合つてゐると、生活力を失つた人間を感じないではゐられなかつた。そして、六助の不幸に同情しなければならぬといふ氣持のために彼は腹立たしくさへなつた。——それは自分が六助を愛してゐるからだ、と彼は思つた。しかし、ともすれば、この氣の弱いセンチメンタルな友人の姿を彼は自分の中に求めることがある。——さういふときに彼は自分と六助とが全く同じものだといふ感じを避けることができなかった。——けれども、この感じは六助に對する新しい友情を喚び起すよりも前に、南里の心を無氣味な憎惡に導いた。

た。彼は、自分の生活の中に沁みひろがつてくる六助の影を虐げ、ふみにじつた。……

南里と六助とは黙つて向ひ合つてゐた。彼等の立つてゐる丘のうしろは道路工事のために斬り割かれ、緒土の肌をむき出しにした勾配の急な坂道を、土を運ぶトロツコのすべつてゆく音が、たそがれの微風を傳つてひゞいてきた。

「僕にはね……」

と、六助が苦しさに言ひながら立ちあがつた。

「僕にはね、——君の好意もよくわかるのだが、しかしね、僕はもう自分を慘めにするよりほかに生きる道はないのだ。どうせ貴様はうかびあがることなんかないのだ。轉がるところまで轉がつてゆけ！と、自分にむかつて言ふよりほかに仕方がない。ずつと前に、君に借りて讀んだことのある何かいふ外國の作家の小説があつたね、孤獨の老人が暗い部屋の中で、自分の一生の出來事を何の目的もなく書いてゐる、その原稿がある量まで達すると、ずたずたに引き裂いて、齒で噛んでは紙の團子をつくつて窓の外へ投げつける。——さういふ小説があつたね、そのときの老人の口癖にしてゐる言葉をおぼえてゐるかね、——このおぼれのセンチメンタリストめ！と言ふのだ。僕の一生がそれだ。僕は君との友情を一つの美しいものとして残して置きたいんだ。かりに君が僕の中から敵を見出したとしても、僕も君の中から敵を見出さなければならぬといふことはない。……」

「いや、そんな問題ぢやあない。——僕は唯君の新しい生活に何の助力も與へられなかつたといふことが腹立たしいのだ。だが、そんな話はもう止さう。それよりも、君は、もう支度が出来てゐるのかね？」

「支度も何もないさ。見つかつたらそれまでだしね。だが、夜逃げといふのはへんなものだ。僕は自分で自分の生活をカリカチュアライズしてゐるんだが、僕が車をひいて、子供を背負つた女房が車を押してくるといふやうな姿はどうかね。——いや、これは冗談だがね。」

「ぢやあ、明後日の晩は手傳ひにゆかう！」

「いや、來ない方がいゝ、僕は裏道を通つて街道に出るからね、——愚圖愚圖してゐてつかまつたら大變だからな。君のうちの裏の道を通つてゆくけれど、聲をかけないでゆくかわからん。だが、二三日のうちにまた來るよ。どつちにしても春田君のうちへ荷物を運ぶことだけだのむからね。」

彼はかう言ひながら、愉快さうに笑つて、

「この村も寂しくなつたな。エルバート・ブレッサニがゐなくなるし、笠原獅子太郎が行つてしまふし」と、わざとらしい、おどけた調子で言つた。

「ほら、屋根だけ見えるぢやないか。西洋の小説なら、エルバート・ブレッサニの青い屋根よ、左様なら、といふところだ。——」

丘の下から、大根畑のゆるやかな勾配が盡きるところの窪地に、暗緑色の森にかこまれた高い屋根の

尖端が見えた。そこには今年の夏まで西洋人の一家族が住んでゐた。そのうちの門標には日本語で、「ペルー公使館、エルバート・ブレッサニ」と二行にわけて書いてあつたが、それを第一に見つけたのは六助だつた。——

「あの公使は一體何をしてゐるのかね。日本に來ても退屈で仕方がないだらうね。元來公使といふものは忙しい筈のものなんだが、ブレッサニは何時にも庭を散歩してばかりゐるぢやないか。」

六助がさう言つて話したことのあるのを南里はおもひだしたが、あの宏壯な屋敷が今に空家になつてゐるといふことも、何となく寂しい氣がした。

次の日の夜、南里は東京からの歸り道にわざと六助のうちの前を通つてみた。もう眠つてゐるのか、戸のしまつたうちの中はひっそりとしてゐた。それから、新しい田圃道を歩いて自分のうちへ歸つてくると、彼の書齋に六助と南里の妻とが火鉢を挟んで坐つてゐた。彼の顔を見ると、六助はひき緊つた聲で、

「今、春田君の家へ車をひいていつて歸つてきたところだ。——何だか少し恐ろしくなつてきた。通りへ出る曲り角でね、巡査につかまつたんだ。しまつた、と思つた。だがね、運のいゝことには、二三度戸

籍調べにやつてきて話をしたところのあるあの男だつた。僕は思ひきつて正直に言つてやつた。——今、夜逃げをするところです。どうか大目に見て下さい、と言つたら、あいつも寂しさうに笑つたよ。そして、かういふ風に敬禮して行つてしまつたよ。」

さう言つて、六助は額のところの手をあて、「失敬」をする眞似をしてみせながら大聲で笑つた。彼の顔には晴れやかな色が溢れてゐた。何か一つの重大な使命を果すために選ばれた人間のやうに、六助は軽快な調子で饒舌つた。今度のうちが黒街道の奥の竹藪の中にあること、近所に人家がないので彼の仕事には持つて来いであること、——そして、あとは半年足らずのうちに自分はきつと「無告者」を書きあげるつもりであること、——さういふ話をつゞけてゐるうちに、六助の眼は昂奮のために輝いてきた。彼の話をきいてゐると、南里には、六助が一つの希望に向つて出發する旅行者のやうに思はれてきた。そして、古ぼけた生活の中に心をとちこめてゐる自分自身が、いかにもみすぼらしく不幸であるかといふ感じのために、一瞬間、彼の心は暗くなつた。

「ずるぶん、御迷惑をかけましたね、奥さん——今度は道が遠くなりましたからね、毎日のやうにはお伺ひは出来なくなりましたよ。」

六助は歸り際に南里の妻の方を向いてかう言つた。それから、急に思ひ出したやうに膝を敲いて——「さうだ、おもしろい話があるんだぜ。これは獅子太郎後日譚なんだがね。君はあの番臺に坐つてゐた

肥つたおかみさんを知つてゐるだらう。眠さうな顔をした蒼ぶくれのさ、あいつにね、情夫があつたんださうだ、それがまた意外な話だ。毎日あの風呂へやつてくる朝鮮人の土工ださうだ。尤もこいつには女房も子供もあるといふことだが、——そのことを近所の人たちが噂し合つてゐたがね、若しこのことを獅子太郎が知つてゐたとしたら、随分悲痛な話だ。近所の人話ではね、そのために土工の女房が憤慨して嗚りこんでいつたといふことだが……」

六助は軽い調子で話しながら一人で笑つたが、しかし、南里は妙にうそ寒い氣持が胸を通りぬけてゆくやうな氣がして、どうしても一緒になつて笑へなかつた。

六助が歸つたときは十二時を少し過ぎてゐたが、一人きりになると、急にげつそりとした哀感が彼の胸を充たしはじめた。——

南里は自分が一人だけとり残されたやうな氣がしたのだ。こんなときにおれはセンチメンタルになつてはいけない、と彼は思つた。それから、彼は煙草の煙のこもつた部屋の中の空氣を入れ換へるために窓をあけた。これは何でもないことではないか。ありふれた戲臺だ、要するに、おれは、——と南里は思つた。——さうだ。おれは人生における一つの悲惨を蹴飛ばしただけのことなのだ。——

しかし、南里は妙にちんとした胸苦しさを感じないではゐられなかつた。何者かに自分が鞭うたれてゐるやうな氣がした。だが、おれは正しかつたのだ。六助の運命が行くところまで行つたとしても、

彼の悲惨の中に、自分の罪を探す理由はないのだ、と彼は思った、彼は床の中へ入つてからも雑草のやうにのびてくる想念に悩まされて明け方近くまで寝付かれなかつた。

翌朝、南里玄作は正午近くなつて眼を醒ました。どんよりと曇つた空が垂れ下つてゐた。風が寒く、窓の前の雑木林に鳴る落葉の音に彼はとげとげしい冬を感じた。家の中はひっそりとしてゐた。何時も午すぎになると石を敷いた坂道に六助の下駄の音が慌たゞしく聞えてくるのであるが、しかし、もう、その足音を聞くこともできないといふことまでが、動きのない自分の生活にとつて重大な變化であるやうな気がして来た。彼は心が落ちつかなくなつた。机の前に坐つてみたが何をすることもできなかった。彼は立て續けに煙草をすつた。風は絶えず骨組だけになつた雑木の梢をゆり動かしてゐた。彼は時計を見ながら、立つたり坐つたりしてゐたが、到頭思ひきつて外へ出た。しかし、室の中にゐたときとくらべると風は思つたよりも強かつた。遠い畑の先きには砂埃りが砲煙のやうに渦を巻き、その煙の中に輪廓だけがはつきりとうかんで見える丘松林が波のやうにゆれてゐた。彼は思ひきつて六助のうちへ行つてみようと思つたが、しかし、家財道具が臟腑のやうに雑然とさらけ出されてゐる小さな部屋の中を、たぶん苛立たしさうにとび廻つてゐるであらう彼の姿を想像すると、妙に心がすくんでしまつた。田圃の中の新しい砂利道を、ざくざくと音をさせながら歩いてゆくと、ふと彼は砂塵に掩はれた正面の森の上へ獅子太郎の風呂の煙突がそびえてゐるのを見た。彼は思はず立ちどまつた。その煙突からはひとす

ぢの煙がたよりなく風に吹きちらされてゐるではないか。してみると、獅子太郎のあとへ何時の間にか新しい風呂屋が引越して来たのかも知れない。すると、彼は獅子太郎のおかみさんが坐つてゐた同じ番臺の上に坐つてゐるであらう一人の若い女房を空想した。そして、身體の小さい背中の丸くかんだ獅子太郎のかはりに、今度は頭の禿げたいかにも田舎者らしい一人の親爺を……

そこから彼は廻れ右をしてうちへ歸つた。南里はぐつたりと疲れてゐた。彼は夕飯を喰べると床の中へもぐりこんだ。そのまゝ彼はぐつたりと寝入つてしまつたが、浅い眠りの中で彼は、風の音を聞き、それから犬の吠えるのを聞いた。三四時間経つたと思はれるころ、彼は不意に石疊の上を踏みつける荒しい靴音を聞いた。彼は慌てゝ起きあがつた。

窓をあけると、低い門の前に鈍い門燈の光をうしろにして六助が立つてゐる。黒いソフト帽をあみだにかぶつて、彼は外套の襟を立てゝゐるが、暗い窓の中に南里の姿をみとめると、合圖をするやうにステッキを持つた右手をあげて、

「南里君。——左様なら！」

太い元氣のいゝ聲であつたが、南里は思はずどきつとした。叫びかけようとしたが、言葉が咽喉につまつて出て來なかつた。しかし、六助は二三歩あとへさがつて透かすやうに南里の顔を見定めてから、もう一度大きくステッキをふつた。そのわざとらしい姿勢の中に南里は、彼自身を悲壯な情感の中にカリ

カチユアライズしてゐる六助の心を感じた。それにもかゝはらず南里の心は石のやうに堅くなつた。彼は六助がくるりと向きを變へるのを見た。——そして、無恰好な六助の身體が裏道の闇の中に消えてゆくのを……。

南里は慌てゝ外へ出た。彼は駆け出したやうな衝動を感じながら、六助のあとを追つかけたが、しかし、彼の姿はもう見えなかつた。月のない闇の中に砂利を敷いた小さな道が白々とうかび、その道の果てからひびいてくる車の轍の音だけを南里ははつきりと耳に聞いた。それから、彼は闇の中に立ちどまつて、ちつと耳をすましてゐたが、しかし、彼はすぐに、かういふ情感に涵つてゐる自分に對して無性に腹が立つてきた。

「馬鹿！ 馬鹿、馬鹿！」

彼は立て續けに唾を吐いた。新しい悲慘に向つて突進してゆく六助の姿を頭の中に描きながら……

月光の道

わたしは今、かつて自分の家であつた藥身屋根の下の六疊の部屋で、一人の友人と小さい紫檀の机をはさんで坐つてゐる。

この部屋の中の様子は半歳前と少しも變つてゐない。赤い花を彩つた明るい壁紙の色も、青いカーテンも、それから出窓の前の大きな備前焼の甕（その中にはおくれ咲きのつゝじが萎れかゝつたままで無雑作に活けてある）さへも同じ位置にあるし、だから、この紫檀の机の前に坐つてゐると、小さな爪のあとや、インキのあとまでが一つ一つわたしの心をおびやかす。といふのは、八年間、わたしはこの机によりかゝつて勞作をつゞけてきたからである。前例のない（すくなくともさう信じてゐた）忍苦と艱難の生活を、わたしは一生涯、この机に凭れて過すつもりだつたから。まつたく、わたしの作品の大部分がこの机の上で書かれたといつていゝのである。窓をとざして暮してゐた八年間、この部屋はいふまでもなくわたしの幻想の拷問室だつた。

わたしは、この机にもたれてペンを動かしながら、門の前へつゞく勾配の急な露路の石疊を歩いてく

る足音を遠い幻想の中からひびいてくるものやうにちつと耳を澄した。この安らかな生活の中へ忍びよつてくる運命の間諜に對して絶えず心の構へを立て直しながら、しかしわたしは幻覺の中の敵に對する警戒を怠らなかつた。

すべてのものが窓外に動く風景だつた。この窓の前を、砂利を敷いた街道をすべる荷車の音とともに新しい時代の轟音がひびいて來た。小さな村に住む人々の生活の上に現はれた盛衰興亡の中にさへ、動いてゐる時代の波紋が描き出されたのである。だから光と影とが絶えずわたし視野の中にひろがつてゐた。雑木林にかこまれた丘の上に王城のごとく聳えてゐた赤い屋根の二階建の家には、髭の生えた裕福な事業家が住んでゐて、わたしの部屋の出窓にもたれてその家の二階を見あげると、明るい電燈の光が高い窓のカーテンに沁みて、そこに動いてゐる人の影が生々ともつれあつてゐたが、その中には絶えず明るい酒宴が開かれてゐるやうだつた——そしてこんなに遠く離れてゐるのに人の笑ひ聲までがわたしの神経にひびいてくるやうな氣がしたが、ピアノの音だけは椎の若葉をゆるがす夜風の音にまじつてほんたうにひびいてきた！最近の二三年間、その窓は閉ぢられて、事業家の一族はその裏にある納屋のやうな小さな家に引越してしまひ、石の門の前には大きな借家札が立てられた。だから、この窓を見あげることは落魄れてゆく人間の一代記を讀んでゐるやうな、何か憂鬱なじめくした氣持だつた。丘の下の砂利道を夜おそくこの家の主人を運んで歸つてくる自動車の音もばつたりと止まつてしまつた。

その窓に、今明りがついてゐる。窓が左右にひらかれて鬘髪をした若い女の頭が人形のやうに軽く動いてゐる。もう一人の相手はカーテンのかけにかくれて見えないが、ことによると文化生活を營む一對の夫婦が引越してきたのかも知れない。——

ところで、わたしは何のために、この荒涼たる昔の家へ歸つてきたのか。この家に支關のそばに四疊半に半身不隨になつてゐるわたしの母が一人の召使と二人で住んでゐるのだ。彼女は今年六十九歳で、もう疾くに醫者から見放されてしまつてゐる。わたしは母を見舞ふためにやつてきたのだが、しかし、此處から聞える彼女の軽い咳の音を聞くだけで、もう胸が塞がつてしまひさうである。裏口からこつそりやつてきたので彼女はわたしの來たことを知らない。だからわたしは黙つて母に會はないで歸つてしまふつもりである。同じ屋敷の中の別棟の西洋館にはわたしの昔の愛人がひとり住んでゐるのであるが、彼女は朝から何處かへ出かけて未だ歸つて來ない。わたしが長い間古ぼけた人情を封じこめたその大きな部屋には明りがついてゐないで、暗く閉ぢられた窓の中に過去の空想が凍りついてゐるやうだ。

「——ねえ君。」

と、わたしは呆然としてバットをふかしてゐるわたしの友人を顧みた。彼は生れながらのロマンチストで、だから現世的に極度に不幸な生活をしてゐる。——「ついでに僕の友人を紹介しよう！」わたしは、この坂の下の窪地に住んでるペルー公使、エルバート・ブレッツサニ氏の顔をおもひだした

のだ。(こんな晩には、あのブレッサニ氏の家の前を通るだけでもどんなに幸福か知れない!)
外は月光の夜である。

窓の前の八ツ手の木は風を受けるごとに青い月光の雫をふるひ落してゐる。庭をめぐる竹垣は数日前の風で、朽ちかかった部分だけ内側に倒れてしまつてゐる。それで、一層荒涼たる感じを唆る。——そのため、列をつくつてゐる椎の木、幹の太さまでが目立つ。八年前、一本丹錢宛で買った椎の木である。窓の前の藤棚は手入をしないので蔓が伸び放題に伸びてしまつた。横のもつこくからまり、八ツ手にとりついてすつかり外光を塞いでしまつた。この藤棚もわたしの「山莊生活」の名残である。露地を出た街道を左に行つた角の家に間借りをして暮してゐた植木屋の老人が、同じ位の年のお婆さんと二人で一日がよりでつくつてくれたものだ。ぢいさんの家は田舎にあつて、山もあり田地もあつていゝ生活をしてゐるが、このばあさんと戀に落ちて逃亡しそれから人生を漂泊し歩いてゐるうちにこんな結末になつてしまつたのだ。もうこんなに年をとつてしまつては萩の柴折戸萱の屋根でもあるまい。わたしは、毎日のやうに町へつゞく坂道を、ぢいさんが車をひき、ばあさんがそのあとから押して歩いてゐる姿を見た。その姿は、わたしの眼に觸れる最も悲惨なものゝ一つだつた。(かういふ人生は決してカリカチュアライズすることのできるものではない)二人は何時會ふときでも互に烈しい言葉を投げつけながら罵り合つてゐた。例へば、

「——野郎また何か買ひ喰ひしとるな、貴様がそんな了簡だから家が持てんのぢや。」

かう、ぢいさんが、うしろをふりかへつて、駄菓子に口を頬張つてゐるばあさんを見て嘔鳴りつけるのである。するとばあさんは嚙みつくやうな聲で、かう罵り返す。——「お前が悪いのぢや、お前が、お前が酒を飲む癖に……」

この二人は和やかな調子で物をいつたことがない。いがみ合ふことが彼等をつなぐ愛情であるほどに二人は愛し合つてゐたのだ。このぢいさんは「嘘つき」で「ツンボ」の眞似をしてゐるといふ評判だつた。だから、人氣がなかつた。だから彼の生活は一日ごとに狭められてきた。もう、間借りをして暮す餘裕さへ失はれてきた。道路が改正された。それ故、そのあたりの古い家が片つぱしからぶち壊された。そのあとへ新しい二階屋が建つたが、それきりこの老夫婦の姿を見ることはできなかつた。赤い屋根の家に住んでゐた事業家が村を離れていつたときにも、風呂屋の亭主が夜逃げをしたときにも、わたしは常にユーモラスな感懐をもつて、落武者である彼が何處かで浮びあがる時のあることを祈つてゐたのであるが、しかしこの老夫婦に對してだけはそれが出来なかつた。いふまでもなく、彼等は何處かで沈んでしまつたのだ!(わたしは、足音を忍ばせて砂利を敷いた往來へ出た)すぐ前の地主の家の冠木門が半分あいてゐるので、横にある牛部屋の臭が漂つてきた。この謹直な地主が土地からしぼりあげる金でますます肥りだしたとき彼の牛部屋の中では子供が一匹産れたのだ。それ故、今は二匹の牛が眠つてゐる

るのである。

エルバート・プレツサニ氏の家は、もう、すっかり電燈を消してしまつてゐる。あの憂鬱な老人の顔は時代からとり残された神祕な存在の一つだつた。彼とわたしは朝の散歩道でよく出會つた。

「お早う！」

「お早う！」

これだけがわたしたちの挨拶なのであるがしかし、彼とわたしとは眼顔で十分お互の感情をかすめる深いニュアンスを汲みとることができた。それから、夜、物の前を通るとプレツサニ氏は大抵二階の窓によりかゝつてぼんやり外を見てゐた。この老人の顔を彩つてゐるものは何よりも、やりきれない退屈だつた。彼はまつたく孤獨なのである。ことによるとかうなのだ。——この老人は自分の愛妻を置いてけぼりにして、ほかの女と二人で日本へ逃げてきたのだが、今はその女とも別れてしまつた。(それでなければこんなに絶望的な憂鬱が人間の顔を彩るはずがない。)

わたしは自分の空想を人にいひふらして歩いた。だから、今は誰だつてそれを信じてゐる。

わたしはあの窓の下へ行つて大聲で呼んでみようか、——「ミスタア・プレツサニ！」

そしたらあの老人は驚いて窓をあけるだらう。そして、わたしの聲を、夢の中で絶えず彼を追つかけてくる妻の聲のやうに聞くかも知れない。しかし、そのとき、わたしはすぐ下の坂道の方からしつとり

とひゞいてくる足音を聞いた。こんな夜中に一體誰が歩いてゐるのか。闇の中から二つの眼がぎよろりと光つた。そのあとから、また二つの眼が——。

それは十何年、この村に住みなれてゐる夫婦乞食だつた。彼等は一筋の綱でお互の身體を結びあつてちやうど曳き船のやうな恰好で歩いてゐる。月光の中を、その異様な姿が傲然として通つていつた。